

レイル・クローターと魔法生物

antique

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

基本的に、彼女がトランクを手放したことはない。

中身を誰もみたことはなく、中には大金、無いしは全ての知識を詰め込む図書館とも、数多の魔法生物がいるとも言われている。

果たして真実は確認できず、その正体は魔法省の上層部のみが知っている。

彼の者の名は、ヘルミオネ・クローター。

世界で唯一、どこに居ても魔法動物の飼育を許可された人間である。

これは、その子孫にあたるレイル・クローターの物語である。

レイル 大人版

追加タグ

もうやめたげてよ

原作キャラ死亡回避

ケルト神話

原作キャラ大改造

誰これ？

ヒロインと書いて嫁と読む

目次

プロローグ	1
人物設定 (7/10時点)	3
トランクの住人たち一覧 (6/10現在)	7
第1章 トランクの住人	
コンパートメントより	11
組み分け	20
クライアント	29
授業開始	36
畏怖の象徴	47
怒れる鴉	55
トロールの倒し方	62
君を孤独から救いに来た	72
任務遂行	81
防衛作戦	93
一年が終わる	106
傀儡人形と蛇の末裔	
夏休み	111
聖二十八一族	119
命短し	129
これは酷い	136
母親とは	143
不思議少女は密かに笑う	149
いつぞ清々しいまでに	155

思いは遠く

王の素質

天然令嬢と王の日記

バジリスク

水天の涙

ブラシピミー

part. 1

162

169

178

185

191

201

プロローグ

「ああ、カロライナ。そこを出ないでくれ？それ以上大きくなられると困るからな。おい、ヒューレル。またネクサスを刺したな？」

忙しなく動く少年は杖を一振り、一瞬で材料を調合してネクサスと呼ばれた白い猿のような浮いているモノに薬を塗り付けた。目眩や吐き気が納まったネクサスは姿を消して立ち去ろうとしたところを少年に捕まった。

「ネクサスも色々動き回らないで、危ないから。ビート、僕の背に乗る癖は直してくれ。ペッツ、チユークル、デユーク、ベツジ、アルファ、クラープ、レスター、ご飯の時間だよ、好きだけ食べてくれ」

ビートというスフィンクスを小さくしたような猫は言われても尚肩に乗り続けた。ペッツ、チユークル、デユーク、ベツジ、アルファ、クラープ、レスターと一気に呼ばれた梟の顔をしたアルパカは少年が宙へと散らかし、滞空したままの餌を食べ始める。

「ハルファス、バルクアス。アンドロメダを抑えといってくれ、後で仕置きに行く。アレクサ、ヒューイ、ルイス、メリビット、喧嘩するなよ、首がまた増える」

ハルファスとバルクアスの見た目は完全なマンティコア、しかも押さえているのは首もとを棘だらけにした豹だった。

彼らは棘にさわらぬように頭と体を抑えている。アンドロメダと呼ばれた豹は「仕置き」という単語にマンティコアが押さえるよりも早く伏せていた。

言葉だけでよかつただろう。

アレクサ、ヒューイ、ルイス、メリビットは体は共有しているが頭は別れていた。一応生物上の雌に当たるのでそうと言わせてもらおうが、彼女らはヒュドラである。

ここに来る前までもかなり奔走したらしい少年の額や頬には大粒

の汗が垂れていた。彼が全員の食事を与え終わると、丁度八つの大きな影が渡ってきた。

「丁度よかった。ノージバル、エラメル、フレアーズ、ボーマン、ダイアナ、パルコール、エラクレス、お前らの分もあるから安心してよ」そこに現れたのは八頭のドラゴン達だった。本来人間に懐く筈のないドラゴン達が、八つの塔に鎮座し我へと彼を待っている。

ノージバルは犬と蜥蜴を足して二で割ったような顔に大きくなすんだ茶色の羽、先端で二つに割れた尻尾を持つドラゴンだ。

エラメルは二本の角を持ち、翼膜に黒い斑点をもつドラゴン。体の色は呼んで名の元になったエメラルドの如く、綺麗な翡翠色だ。

フレアーズは真っ赤な体に後頭部の棘が特徴的なドラゴン。誰よりも好戦的だが、少年の指示には必ず従う。

ボーマンは一本角以外は特徴はそれほどないが、鼻から漏れている蒼い炎が印象に残るドラゴン。この中では一番忠実。

ダイアナは体が光に当たるとマジョーラカラーの様に偏光する体質がある。それがダイアのように見えたからこの名を付けたのだ。

パルコールは恐らくこの中で統率を担っている。赤い目と長い爪、巨大な翼は誰がみても強者と言える。

最後のエラクレスは、知識の有るものなら詠嘆の声をあげるだろう。何せ、このドラゴンは誰よりも強い。

彼らは塔の上に乗せられた肉を足でつかんだり手で掴んだり、口に加えたりし、一つ吼えて自分の住処へと戻っていく。少年はそれを見届けて、現実世界へ戻るために小屋へ戻る。

小屋の中に入ると緑色の繭のような形をした何か少年に必死になにかを伝えようとしていた。

「あー、分かっているよミロー。ホグワーツからの手紙だろうか？大丈夫、お前らもちやんと連れてくよ。許可は取ってある」

少年は繭を一撫でし、小屋の階段を上がって行った。

人物設定（7 / 10時点）

レイル・クローター

177cm、68.9kg（6年生時）、黒髪、碧眼。

この物語の主人公であり、外伝主人公のヘルミオネ・クローターの子孫。イメージは奥村燐。

動物の言葉や気持ちを感じただけでいたい理解出来る。しかしその事を余り重要視せず、本人もなぜこんなことが出来るかを理解していない。

いつそ清々しくヘルミオネのことを第一に考えるほどに、ヘルミオネに依存している。それでもトランクの住人達も愛している。

頭の回転が早く、どんな状況ならどの子が合っているなど判断できる。どうしようも無くなればだいたいエラクレスとパルコールを呼ぶ。

決闘のスタイルはカウンター型。相手の手札が切られるのを待って行動不能にする。勿論普通の戦いならば先手必勝である。

白檀に不死鳥変異種の尾羽。三十六センチ。ヘルミオネの兄弟杖

ヘルミオネ・デイマイント

155cm、51kg、金髪、金眼。

レイルを愛する本作品のヒロイン。イメージはアルトリア・ペンドラゴン・オルタ。

基本的に仏頂面で、レイルにのみ感情を露わにする。その微笑みは聖女のように言われている。

血統のスタイルは「何もさせない」。気づけば終わっているような「瞬殺」を心がけている。

黒檀に不死鳥変異種の尾羽、三十四センチ。レイルの兄弟杖

アリシア・ティファール

168cm、56kg、金髪、碧眼。

作品オリジナルの「聖二十八一族総督家」の一人娘。後に弟のグリ

ゴーレが生まれる予定だったのだが、妊娠が発覚してまもなく両親が死亡したため当主の座に座ることとなる。

変わり者の多い聖二十八一族を纏めあげるカリスマは勿論、幼少の頃からメイドからの英才教育を受けていたため知識も豊富。決闘は相手の手札を潰していくスタイルと結構エグい。

スネークウッドにバジリスクの角、二十九センチ。

フィリップ・レツカ・ハワード

175cm、67kg、黒髪、黒目。

常に飄々としたレイブンクローの知識箱。イメージは仮面ライダーWのフィリップ。「地球の本棚」とかまんまである。

角膜が異常で、魔法が色と形で見える。例えば認識阻害呪文などは青のペンタグラム。

元々知識が豊富なため知識に貪欲、また自分と同じようなタイプの人間を否定されると指定した相手を完膚なきまでに叩きのめす。決闘のスタイルは先手必勝、相手の動きを止めて一気に勢いに乗せて打ち負かすタイプ。

母親の旧姓はレイブンクローであり、ロウエナ・レイブンクローの正統なる末裔であると言える。

トウヒにニューレール・ユニコーンの鬘。四十センチ。

メズール・キラグリード

154cm、49kg、茶髪、灰眼。

名前の由来は仮面ライダーオーズのメズール。しかしキャラが全然違うので名前だけである。

ゆるふわ系の性格だが、時に物の核を的確についてくる潜在能力の持ち主。ダーティジョークもスラスラと吐く毒舌。

決闘は持ち札をばらまいて何をするか分からせないトリッキーな戦術を使う。何をするか分かった時にはもう負けている。

父は婿入りであり、父方の旧姓がハツフルパフで、ヘルガ・ハツフルパフの末裔。

モンキーポッドに銀卵オカミの羽、二十三センチ。

ゼノ・ジーヴァ・デイマイント

真名「The First Dementor」

176cm、体重不明。白髪、翠眼。

ヘルミオネの祖父であり、レイルの父親代わりの人物。イメージはワールドトリガーのヴィザ。

物落ち着いた賢人といった風貌であり、ある事情からレイルのことをステファニーから預かっていた。今でも信頼度はトランクの住人の次に高い。

Do not read

ステファニー・クローター

170cm、59kg、金髪、碧眼。

レイルに邪険に扱われてはめげずに親子の愛を育もうとするレイルの母親。レイルからはたまに捨て札と呼ばれる。

スネイプの後輩にあたり、授業のない日はだいたい彼と共にいる。恋愛的なあれこれではなく、学生時代から共にいたためである。

梅檀にニユーレル・ユニコーンの尾毛、持ち手にアフリカンマリーゴールドの装飾がある。逆境を超える力を授ける。

ダフネ・グリーングラス。

168、6cm、61kg、金髪、碧眼。

原作登場は言及のみという悲しき少女。幼い頃、アリシアが両親を亡くして以来彼女の護衛を全うするべく英才教育を受けた美を司るグリーングラス家の長女。

その肉体美もさることながら、無手での戦闘は随一に登る。支持したのはフィリップの母親アガルタの伝手のとある神父。

彼女との戦闘は魔法を放とうとすれば終わっているので本来するべきではない。そういうところもヘルミオネと似通っている。

ドラコ・マルフォイ

みんな大好きフオイ。今作では魔改造。

アリシアを人目見た時から色恋云々とは違う運命を感じ、自らの生涯の一切を彼女に捧げることを誓う。

色恋ではなくとも、誰かを一途に思い続けるその精神から、レイルには言われのない親近感を覚えられている。

ハーマイオニー・グレンジャー

グリフィンドールの知恵袋。その知識は今作でも健在。

ある一件からフィリップを想い慕うようになり、だいたい暇な時は本を読むかフィリップと共にいる。

ジネブラ・モリー・ウィーズリー

病的な程にフィリップを慕うウィーズリーの良識枠。原作ではハリーに惚れていたが、今作ではフィリップに一目惚れした。

フィリップと兄のロンがいざこざを起こしたため、少しばかり邪険に扱われているがそれすらも眼中になく、常にフィリップの後を追っかけている。

トランクの住人たち一覧（6 / 10 現在）

フオウ

キヤスパリーグ。あるいはプライミッツ・マードー。又の名をビーストI V。

レイヴェル

不死鳥。雌个体。特異个体で羽や体毛などが赤いところが青くなっている。レイルが大好き。

メディクルス

レイルのフクロウ便を届けるため常日頃から空を飛ぶアフリカオオコノハズク。愛情の証として暇な時は何時もレイルの人差し指を甘噛みしている。

クロエ

角水蛇の雌。アメリカに行った時にトランクの住人となった。額にはルビーが輝いている。

エラクレス

ハンガリー・ホーンテール種の雄。パルコールの夫。トランクの中で1番強い。名前の由来はヘラクレス。

??? 「バーサーカーは負けない…世界で一番強いんだからっ!!!」

フレアーズ

チャイニーズ・ファイアボール種の雄。寧猛、暴虐無人唯我独尊を地で行く竜。然しレイルの命令には従う。やりすぎることもし。

ボーマン

スウェーデン・ショートースナウト種の雌。余り戦いを好まず、ドラゴンの喧嘩の仲裁役を請け負うことが多い不幸者。そのせいで意外に強いのだが。

エラメル

ウエールズ・グリーン種の雌。とても甘えん坊でドラゴンにしては人懐っこい。

ノーバジル

ノルウエー・リτζジバック種の雄。魔法使いを殺すのが赤子を殺すよりも楽なほど強力だがレイルにとても従順。

ダイアナ

ポケモンのディアルガとパルキアを足して二で割り、翼をつけた竜。アイルランド・マリシヨール種の雄。堅実派でエラメルの事が好き。

パルコール

ウクライナ・アイアンベリー種の雌。ボーマンが仲裁した喧嘩に火を注ぐのが趣味。エラクレスの妻。

ミネマ

アクロマンチュラの雄。レイルの小屋の上に住んでいる。

ネクサス

デミガイズ。レイルの身につけるものに擬態するのが好き。

ミロー

スウーピング・イーヴルの雄。数少ない変異種で、翼が緑と青ではなく緑と赤。毒液も赤色。

ネイキツド

シリンドミツシヨンの雄。テレパシーであることから「筒抜け」の英語シリンダーオミツシヨンをもじって名付けられた。ネイキツドはその特性から「むき出し」という名をつけた。子供にソリッド、ヴェノム、リキツド、ソリダスがいる。

フィリア・レギス

バジリスク。ある意味ホグワーツ固有種。（話の進み方的に）現在はあと100年生きられればいい方なほど寿命が縮んでいる。

ノーベルタ

ノルウエー・リτζジバック種の雌。原作ではノーバードだったが、レイルが引き取ったことにより名前変更。

ソリダス

ネイキツドの息子。相手の裏をかくことが得意で、どんなに閉心術が上手くてもものの数秒でこじ開けられてしまう。

メツサー

レシフオールドの雄。初めはレイルとヘルミオネを喰らおうとしていたが、フオウの威圧により大人しくなった。なお、彼のいない所ではやはりレイル達をどうやって食べようかと頭を働かせている模様。

ソリツド

ネイキツドの息子。息子たちの中で1番心を読める範囲が大きい。最近ボキヤブラリがおかしくなってきた事があるがレイルの悩み。

ビート

スフィンクス・アウラードという顔のない小さなスフィンクス。食べ物を食べる時は顔面を突っ込むというシニールな光景が現れる。イメージはオジマンディアスのエクストラアタック、もしくはオジマンディアスのバレンタインのお返し。

ヴェールヌイ

オーグリーの雄。レイヴェルを好いているが、当のレイヴェルはレイルが好きなので背中を押している。ラブコメ的には一番報われない立場。

ユミル

オカミーの末っ子の雌。銀卵から産まれた。防衛本能は高いが、レイルに撫でられるのが一番好き。

アリー

屋敷しもべ妖精。本来ならばもう自由を勝ち取ったはずなのだが、物好きなのかレイルに雇われるという形でトランクの中の掃除洗濯やらの家事全般を担っている。

カム、ノノ

オルガロンの夫婦。まんまモンスターハンターフロンティアのオルガロン夫妻。説明不要。

コール

ヒツポグリフの雌。つがいを探してレイルのトランクの住人に。外に出る時はだいたいバックビークにアタックを仕掛けられてるが、つがいにしたいたいのレイル。

ライナー

ヒツポグリフの雄個体。レイルを盟友とし、頭を下げなくても背中に乗せてくれる。しかし一番好きなのは箒に乗ったレイルと並走すること。

ナリフオーレ

ズーウーの雄。フレアーズと一緒にトランクへやってきた。

フリーヤ

サンダーバードの雌。ニュートがアリゾナに放したフランクの子孫。

リデイ

ニューレル・ユニコーンの雌個体。白が黒になり、赤が金になる。怒ると金が銀になる。激情しやすい。

第1章 トランクの住人 コンパートメントより

ホグワーツ魔法魔術学校。

魔法使いになるべく少年少女が七年制で魔法の知識を学ぶ学校。全寮制で四つあり、それぞれグリフィンドル、レイブンクロー、ハッフルパフ、スリザリンである。

グリーンゴツツ銀行を除き、世界で一番安全だと言われている。それはひとえに、アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダブルドアの存在だろう。

正義側の魔法使いで歴代最強と言われている彼がホグワーツの校長に就いている。これほど安全なものはないだろうと誰もが述べる。「そんな安全な場所で許可も取れた。ダームストラングじや無理だったかな」

そんなホグワーツに少年、レイル・クローターもお呼ばれした。イギリスでは珍しい黒髪に青い瞳が特徴的な、どこか包み込まれるような雰囲気を持つ少年だ。

レイルは現在一人でホグワーツに向かう列車、ホグワーツ特急のコンパートメントに座っていた。灰色に青いラインが入ったマフラーを首にまきつけ、ウインチェスターコートに羽織っていた。

景色を眺めながら、覚えている魔法の脳内反復などをしていると、トランクからコツコツという音の後、一つ鳥の鳴き声らしきものが聞こえた。レイルは苦笑いしつつ、トランクを膝の上に乗せて囁いた。「レイヴェル、後で飛ばせてあげるから今はじっとしてて」トランクを一撫でし、また下へと下ろすと、三回のノックがされた。

「どうぞ」と答えると三人ほどの男女が入ってきた。

「このコンパートメント、空いてる？待ち合わせとかしてない？」

代表して金髪の少女が問うてきたので、レイル。

「空いてるよ。魔法族の知人はそんなにないからね」

少女は頭を下げて、少年はレイルのトランクに興味深く見ながら、

最後の一人は楽しげに入ってきた。

「入れてくれてありがとう。私はアリシア・ティフル。今年入学するの。良ければアリスと呼んでね」

「あたしはメズール・メズール・キラグリードだよ！ヨロシク！」

アリシアは金髪碧眼の綺麗な少女だった。動作の一つ一つに気品を感じる所を見ると、恐らく彼女は純血の家の出なのだろう。

変わってメズールは茶髪にパーマをかけ、バレッタで後ろ髪を纏めていた。灰色の瞳はキラキラと輝いている。

歳より精神年齢が低いかもしれない。

「レイル・クローター。僕も今年入学するんだ。こちらこそよろしく」
二人と握手した後、今まで会話に入らずにトランクを凝視する少年を見た。自分と同じ黒髪に、彼は目の色も黒だった。

アリシアは呆れながら首にチョップし、自分の隣に座らせた。因みにアリシアの向かいがレイル、左前がメズールである。

「フィリップ、貴方さつきから何してるの？ずっとレイルのトランクを凝視して」

「ん？レイル？それはこのトランクの持ち主のことかい？」

黒髪少年は惚けた様子で首をかしげた。アリシアは力なく項垂れてしまった。

「私達より先にいたんだから当たり前でしょ。頭良いんだから使いなさいよ」

「数年前に僕の頭をポンコツと罵ったのは君だろうか？何故いいと言える？」

「うっさいフィリップ。それ以上私を揶揄う事で頭回したらノルウェー・リτζバックの前に突き出すからね」

アリシアは杖を抜き出してフィリップと呼ばれた少年に向けた。フィリップはヘラヘラと笑いつつ、視線をこちらに合わせるなりズイッと顔に近寄った。

「君がレイルかい？僕はフィリップ・^{レッカ}L・ハワード。よろしく」

「あー、うん。レイル・クローター、よろしく」

挨拶を終えたフィリップは再びトランクを凝視し始めた。メズー

「あー、トンとツーで言葉を伝えるやつでしょー？やったことあるよー」

メズールは飴の付いていたはずの棒を上下に振って笑った。いくら何でも食べるのが早過ぎないかとレイルは思った。

「Rayle、DE、N。H？HR、I am philosopher。8、1143、BT、Rayle in the train、BT、Hogwarts、F4、stone？use freely。あ、終わった」

音の鳴り終わった砂は移動して現在時刻の十一時四十三分を指した。ため息を吐くと、レイルはそれをポケットの中にしまった。

また面倒なことが増えたなと思いつつ、未だにルーズリーフに向き合っている少年を見る。と同時にガバツと起き上がってまたレイルの顔まで近寄ってきた。

「どういうことだいクローター？このトランクは物が大量に入るだけの拡大呪文が何度も重ねがけされてる。しかも薄らと、ガラスのような三角形のようなものまである！なあ、中身を見せてくれないかい？」

「あひゃひゃひゃ、やめときなよフィリップ、人のを物色しても面白いことなんてないよー？」

ケラケラと笑うメズールと、呆れてものも言えないアリシア。だが二人ともトランクの中身には興味があるようだった。

レイルはトランクを引っ張り出し、鍵の下のダイアルをマグル用から研究室へ、そして皆の家に変えた。そして片方だけ鍵を開け、しどろもどろになりながら。

「あー、別に秘密にしてるわけじゃないけど、魔法生物たちが結構。ダンプルドアや魔法省から許可は貰ってる。これ持っていていいって」「ダンプルドアから？ってことは皆安全なの？」

「いや、危険なものもあるけど、皆いい子だよ」

そう言ったレイルは微笑みながらトランクを撫でた。その表情からは、本当にトランクの中身に愛情を注いでいるのがわかる。

それを微笑ましく見たアリシアをレイルは中身がさらに見たく

なつたと勘違いしたらしく、二つ目の鍵を開けた。

「一体だそうか？」

「大丈夫なの？」

「何時もは危険のないやつだから大丈夫」

ガチャリと音を立てて開かれたトランクに頭を突っ込んだレイル。普通のトランクならそうなる前に頭をぶつけるが、頭をぶつけないままある動物に呼びかけた。

「おーい、フォウ。来てくれないか？」

その言葉に「フォウ？」という鳴き声らしきものがした後、手を伸ばしていたらしいレイルの肩に猫なのか栗鼠なのか犬なのかかわからない生き物が飛び出してきた。そしてアリス達の方をみてコテンと首をかしげた。

「おー、可愛いー！キミー、フォウくんって言うんだー？どこから来たのー？」

「フォウ、フォウ」

メズールがフォウを抱き上げ、頭を撫でる。満更でもない様子のフォウは目を細めて心地良さに身を任せている。

アリシアは一向に体勢を戻す気配のないレイルを見ていた。何やら格闘しているようだった。

「こら、レイヴェル、出てくるなって。お前の存在は希少何だから」

「おや、クローター。それが僕が見たガラスのような三角形の正体かい？」

歌声にも似た綺麗な鳴き声に何かの波長を感じたフィリップはトランクを覗き込もうとする。レイルの体格上、隙間からトランクの中がチラチラと見えるのだが、レイルは気付かずに鳥を抑えていた。

「ほら、早くカゴに戻って。なんなら飛んできていいから。違う、外を、つてことじゃない！あっ！」

奮闘数分、勝利したのは鳥らしい。フォウは未だにメズールに撫でこねられていた。

アリシアが飛び出した鳥を見ようとして、その美しさにみとれてしまった。それはフィリップもであり、フォウを握っていたメズールも

だった。

そこに居たのは青い鳥だった。羽は先端に向かうにつれてだんだんと色が薄くなり、先端に近くなるほど綺麗な銀色になっていた。幻想的にも美しいその鳥はコンパートメントを一周すると床に音もなく降り立った。

「レイヴェル、外の空気が吸いたくなつたのはわかる。けど君は不死鳥の希少種だ、もし邪な考えを持ったやつに分かりでもすれば捕えられるのが目に見える。入ってくれ」

レイヴェルは一度頷き、一鳴きすると、トランクの中に戻って行った。それを見届けたレイルはしっかりとトランクを閉じ、鍵を閉めた。

「レイルー、さっきのつて不死鳥ー？でも色おかしくないー？」

「ええ、あれの羽の色は青と銀よ。不死鳥なら赤と金の羽のはず」

メズールとアリシアがレイヴェルに疑問を持っていると、フィリップがカバンから本を取り出した。フィリップが出した本は黒字に金枠が付けられた革本だった。フィリップは目を閉じて、本を開いた。

「え、中身が全部白紙なのか？」

「フィリップの特殊体質その二ね」

「タイトルも本文も何もないまっさらな本を開いてー、自分の意識を地球の中心部にアクセスするんだってー」

「フィリップはこれを《地球の本棚》と呼んでるわ。キーワードさえ集まれば何でも分かるそうよ」

「へえー」

素直に関心したと同時に、フィリップは恐らくレイブンクローだろうなとレイルは思った。知識がある人ほど知識欲があると言われてる。

レイルは自分がレイブンクロー、若しくはグリフィンドールと考えている。まだ見ぬ動物達を見たいという欲求か、どんな動物を相手しても臆さない精神力が上かは分からないが。

メズールはハツフルパフで確定だとレイルは思う。あの間延びしたような雰囲気は誰とでも溶けあえるだろう。

アリシアが入る寮を考えようとした時、「検索完了」と呟いたフィリップがやつと目を開けた。

「確かに確認した。フェニックス特異個体、青と銀の羽を持つ。能力事態は通常個体と変わらない。通常個体よりも好奇心が強い。出現確率はファイブカードと同じ」

「ファイブカード!? それってロイヤルストレートフラッシュよりも確率高いじゃないの!」

「幸せの青い鳥とも称されてるね」

「理由聞けば当たり前ー、って思うけどねー」

フォウが捏ねられることから脱し、レイルの肩へと場所を戻していたために手持ち無沙汰になってしまったメズールは蛙チョコを食べながらカラカラと笑っていた。この反応が嫌なせいでレイルはレイヴェルを出したくなかったのだ。

レイヴェルとは別の青い不死鳥は今でもオークションにかけられており、今は3400万ガリオンが付けられている。それを避けるためにいち早く青い不死鳥を探し、保護したのがレイヴェルなのだ。

この先に不安をよぎらせるレイルにアリシアはひとつ微笑んで、その両手を取った。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。仮に私たちが貴方の言う邪な考えを持つているならもう既にトランクをパクってるわよ」

「こちらとしてはトランクの隅から隅まで全部調べ尽くしたい、君は情報秘匿できる。Win-winと言うやつさ」

「そうでなくてもー、私はフォウくんを守るぞー!」

フィリップは本の背表紙を撫で、メズールは最後の蛙チョコを口に放り込んで高々と答えた。その姿にレイルは少なからず安心できた。

その後、フォウ以外にもアフリカオオコノハズクのメデイクルスを取り出して談笑していたところ、2回のノックのうちに赤毛ボサボサの女の子とひよろつとした黒髪の男の子がでてきた。

「ねえ、カエル見なかった?」

「さつき食べ終わったよー?」

「君のはチョコだろうメズール」

食べ終わった、という所に後ろの男の子が「ヒュツ」と息を飲んだが、チヨコという情報に凄く安堵していた。どうやら男の子のカエルが逃げたようだ。

レイルはトランクから一匹の蛇を取り出し、男の子に近づいた。

「君、名前は？」

「え、ね、ネビル。ネビル・ロングボトム」

「じゃあロングボトム、君のカエルの名前、種別、大きさ、色なんかを教えてください。あと君の手貸して」

ネビルは伝えられるだけカエル、トレバーの情報を渡した。そして差し出した右手が蛇に嗅がれていたので口の端をひくつかせていた。「オーケー。じゃあクロエ、情報とおなじヒキガエルを連れてきてくれ。食べちゃダメだよ」

クロエと呼ばれた蛇はシュー、と一鳴きしてその場から姿を消した。文字通り、一瞬で。

「クローター、彼女は角水蛇なのか？」

「ああ」

姿くらしを終えて帰ってきたクロエの口にはヒキガエルが咥えられていた。

「トレバーー！」

「ビンゴか」

レイルの手に乗ったクロエはトレバーをネビルに渡し、甘えるように首にすり寄ってきた。

「ありがとクロエ。後でラットをあげるから」

最後にもう一度鳴いたクロエは腕を伝ってトランクに帰って行った。女の子、ハーマイオニー・グレンジャーとネビルはこのコンパートメントにいることになった。

「荷物を取ってくるわ」

「行かなくていいだろ？」

「なんで？」

荷物は前のコンパートメントにあるので取りに行かなければならないはずなのに、動かなくていいというフィリップにハーマイオニー

は首をかしげた。フィリップはその仕草にハーマイオニーがマグル出身者であると思抜いた。

「こういうことさ、アクション^{来たれ}」

杖を取り出したフィリップは呼び寄せ呪文を唱え、結構離れていた距離にあった二人のトランクを自分たちのコンパートメントまで引きずり出した。杖を離し両手を開いたその時には二人のトランクが手のひらの中にあつた。

「これくらいは予習範囲だろう?」

「そうね、スコージファイ^{清め}」

杖を取り出したアリシアはメズールのゴミカスに呪文を当てた。当てられたゴミは縮小していき、やがてなくなってしまうた。

予想通りマグルだったらしいハーマイオニーに質問詰めにされた二人は、着替えの時間になるまで疲れることを今はしらない。

組み分け

着替えが終わった丁度にホグズミード駅に到着した。荷物はそのままにしていけとの事だったので、レイルはフォウだけを連れていき鍵掛け呪文を施してトランクを置いていった。

駅のホームには見たことも無い大男が立っていた。普通ならここでびつくりするだろうが、レイルは巨人と面識があったのでそこまで驚かなかった。フィリップも知識として巨人の大きさを知っているからかそこまでびつくりすることは無かった。

「あの男……魔力が全身を覆っている？ハーフなのか？」

「それは巨人との、ってどういう意味か？フィリップ」
「ああ」

フィリップがそういうからにはそうなんだろうということだ。レイルはそれほど気にはしなかった。

誘導された後、4人乗りのボートに乗ることになったのでレイル、フィリップ、アリシア、メズールで乗った。

鳶のカーテンを潜り、暗いトンネルを奥まで行った先の船着き場に到着し、大きな扉の前まで連れていかれた。

扉を3回ノックし、扉が開くとエメラルド色のローブに身に包んだ老教師、ミネルバ・マクゴナガルが待っていた。

「マクゴナガル先生、一年生^{イチ}の皆さんです」
「ご苦労さまハグリッド。ここからは私が預かります」

マクゴナガルに誘導され、扉の中へと入っていく。
「ホグワーツへの入学、おめでとうございます。新入生の歓迎会がまもなく始まりますが、大広間の席に着く前に皆さんの寮を決めなくてはなりません。寮は全部で四つ。グリフィンボール、ハッフルパフ、レイブンクロー、そしてスリザリン。何れの寮も輝かしい歴史があり、そして偉大な魔法使いを輩出してきました」

移動しながらマクゴナガルは得点、減点の説明、寮杯の説明があつたが、レイルやフィリップ、メズール、アリシアは聞き流していた。別にそんなものに興味なんて湧かないからである。

レイルは魔法生物の飼育時間、フィリップは調べ物の時間、メズールはお菓子を食べる時間、アリシアは皆と仲を深める時間が削られなければ減点されても良いと考えていた。

「組み分けは帽子をかぶるだけらしい。先輩に聞いた」

「先輩？誰だ？」

「セドリック・デイゴリーという人で、引越す前まで家が近くてね。まあ僕は恐らくレイブクローに行くだろうから、ハツフルパフに行ったらよろしく伝えておいてくれ、メズール」

「りよー…え、待って。なんで私がハツフルパフって確定してるの？」

一瞬間延びがなくなったメズールに、誰もが納得していた。お前は確実にハツフルパフだ、と。

待っている間にゴーストが出てきてマグル出身者のいくつかは悲鳴をあげていたが、これくらいで悲鳴をあげるのはメンタルが弱過ぎないかとレイルは思った。ともかくそれ以外には特に何も無く時間は過ぎていった。フィリップは城に施されて魔法を記憶しているようだった。

しばらくした後、マクゴナガルに呼ばれ、新生一同は大広間へと連れていかれる。

大広間は何千という蠟燭が宙に浮かび部屋を照らしていて、中央には大きなテーブルが四つ置かれ、新生を上級生が見ながら座っている。上は本物の空のように星が煌めいていた。

「綺麗ー！すーいー！」

「やっぱり、この規模の魔法となると現実からかけはなれてくるわね」「マグルからすれば僕らも十分現実からかけ離れてるけどね」

新生達が魔法に魅入られながら待っていると、マクゴナガルが椅子をおき、その上にボロボロのどんがり帽子を置いた。何が始まるんだ、という時に、帽子が急に歌い出した。

『わたしはきれいじゃないけれど』

人は見かけによらぬもの

私を凌ぐ賢い帽子

あるなら私は身を引こう

山高帽子は真つ黒だ

シルクハットはスラリと長い

私はホグワーツ組み分け帽子

私は彼らの上をいく

君の頭に隠れたものを

組み分け帽子はお見通し

かぶれば君に教えよう

君が行くべき寮の名を

グリフィンドールに行くならば

勇気ある者が住まう寮

勇猛果敢な騎士道で

他とは違うグリフィンドール

ハッフルパフに行くならば

君は正しく忠実で

忍耐強く真実で

苦労を苦労と思わない

古き賢きレイブンクロー

君に意欲があるならば

機知と学びの友人を

ここで必ず得るだろう

スリザリンではもしかして

君はまことの友を得る

どんな手段を使っても

目標遂げる狡猾さ

かぶってごらん！恐れずに！

興奮せずに、お任せを！

君を私の手に委ね（私は手なんかないけれど）

だって私は考える帽子！』

一通り歌い終わった帽子はまた唯の古帽子に戻り、在校生と教師から拍手を送られた。新入生達は組み分けの仕方が帽子をかぶるだけ

と分かり安堵しているようだった。

「アルファベットの順で名前を呼びます。帽子をかぶって椅子に座り、組み分けを受けてください」

「アボット・ハンナー！」

金髪のお下げの子が帽子へと向かい、被って座った。数分すると帽子から反応があった。

「ハツフルパフ！」

彼女はそのままハツフルパフへと向かった。レイルの苗字はCから始まるので、割と直ぐに呼ばれた。

「クローター、レイル！」

「行ってくる」

「行つてらっしゃい」

アリシアからの返事を受けたレイルは組み分け帽子の方へと歩いていった。在校生の方で、クローターという苗字に既視感を覚えた者がいた。

「クローター？どつかで聞いたような…」

「俺知ってるぞ、幻の生物とその生息地でニユート・スキヤマンダーがベタ褒めしてたんだ」

「苗字が同じってことは、彼は未裔なのかしら？」

「あたし、彼の論文見た事あるよ。なんか脱狼薬の改良をしてるって」結構ひそひそ声で話していたためレイルには届かなかった。レイルは組み分け帽子を被って椅子に座り、その上にフォウがちよこんと

鎮座する形になった。

（これはこれは…かのクローター嬢の未裔様とは、運命は数奇なものだ）

（え、なに、有名すぎじゃないか？僕のご先祖様は）

（如何にも。彼女が作り上げてきた功績はホグワーツにも及んでおる。上にいるプライミッツ・マードーを発見したのも彼女だ。私もクローター嬢を組み分けし、グリフィンドールへと入れた）

（なるほどなあ…で、組み分けは？）

(おお、そうであった。狡猾さも、優しさもある。だがそれは人には振るわれん。故にスリザリンやハツフルパフではない。勇気もある、グリフィンドールでも良いが……ここは)

「レイブンクローツ！」

拍手と歓声に包まれる。その多くはレイブンクローであった。フォウと共にお辞儀をして、レイブンクローの席へと向かう。

「良く来てくれた。レイブンクローの監督生のユーリ・フェニコバスだ。君が勉強に励み、偉大な魔法使いになることを期待してるよ」

「ありがとうございます、フェニコバス先輩」

「フェニス、ないしはユーリでいい」

レイルの頭を撫でたユーリはレイルを席につかせた。しばらくした後、Dの番になった時、レイルは驚きで吹きかけた。

「デイマイント、ヘルミオネ！」

少女が出てきた時点で、広場は静まり返った。数秒後にスリザリンの誰かが漏らしたお陰でざわめき声が酷くなった。

「デイマイントって……魔法省のお目付け役!？」

「嘘っ!?!てことは彼女、凄いで令嬢じゃない!」

レイルが吹きかけたことに隣の女性上級生が心配してくれたが、レイルはそんなことよりも気になることがあった。

「レイブンクロー！」

とくに表情も変えずにレイブンクローの席まで来たヘルミオネはユーリの歓迎を受けた後、真っ直ぐにレイルのところまで来た。

レイルは横に座ったヘルミオネを横目で見る。どう見てもトランクにいるはずのヘルミオネがここにいた。

「どうやって抜け出したんだ? ヘルミオネ」

「姿現し」

さも平然と答えるヘルミオネ。その顔には悪意はなかった。それから彼女がホグワーツに呼ばれた経緯を聞き出したところ、どうやらレイルの手紙と同封されていたらしい。

「グレンジャー、ハーマイオニー！」

コンパートメントであったハーマイオニーが呼ばれ、彼女も帽子

をかぶった。彼女の組み分けはゆうに五分ほど費やした。

「レイブン：いや、グリフィンドールッ！」

高らかに宣言され、彼女はグリフィンドールの席へと向かう。確かにコンパートメントでもかなり知識欲が高かったのでレイブンクローでもおかしくはない。

「キラグリード、メズール！」

「ハッフルパフ！」

メズールは帽子をかぶった四秒後にハッフルパフへ行かされた。ユーリの話では過去に帽子に被らずに組み分けされた人がいるらしい。

「レツカ、フィリップ・ハワード！」

「レイブンクロー！」

当たり前、と言うようにフィリップは悠々とレイブンクローの席に着いた。フィリップはレイルの右に座った。左はヘルミオネが座っている。

「同じ寮になったね。よろしく頼むよ、クローター」

「こちらこそ、フィリップ」

軽く握手をし、今後のことについて色々と話をした。フィリップは休み時間の合間を縫って図書室の本を脳内にインプットする作業をするらしい。因みにレイルはネズミたちに手伝ってもらって校内地図を作るつもりだ。

「ポッター、ハリー！」

かの生き残った英雄の名が呼ばれた瞬間、シン、と場が静まり返った。彼がどの寮に所属するかを誰もが注目して見ていた。

「グリフィンドールッ！」

英雄の行き先となったグリフィンドールの席から爆発的な歓声が上がった。グリフィンドールの双子が騒いでいるが、レイルはそんなのを気にせずにフォウを撫ぜていて、フィリップも帽子の魔法式の解説に一生懸命であった。ヘルミオネもレイルをじっと見てハリーなど眼中に無いようだった。

それから次々といいいテンポで生徒達が各寮に運ばれている時、ある

女生徒の名前が上がった瞬間にもう一度場が静まり返った。

「ティファール、アリシア！」

「ティファール…だと!？」

「聖二十八一族総督家のあの!？」

「今年はどうだけビッグネームが入学するんだよ!？」

魔法使いなれば誰もが一度は耳にするビッグネームに大広間が一斉にざわついた。レイルは正直だからどうした的な感じで受け止めていたが、フィリップだけは舌打ちをしていた。

「ハワード?」

「ん、ああ、気にするなよティマイント嬢。こういう反応をアリスは最も嫌う。今頃この会場を全て破壊できる存在を思い浮かべているだろうな」

アリシアの組み分けはハーマイオニーよりも数分長かった。恐らくレイブンクローかスリザリンかで迷っていたらしいのだが、帽子の出した判決は。

「……スリザリンツ！」

スリザリンだった。当のスリザリンは純血一族の最高峰であるティファール家の一人娘を手にしたので大歓声に包まれた。

最後の一人が終わった後、ダンブルドアからの簡単な挨拶があり、テーブルの上には多種多様な料理が広げられていた。生徒達はそれらを自由に食べ始めた。

レイルの周りにはレイルを知っている人やクローターを知っている人が集まっていた。それでも隣はフィリップとヘルミオネだったが。

流石はレイブンクローと言えるのか、以前レイルが出した守護霊薬や脱狼薬の論文は結構知れ渡っていた。やがてレイルへの質問攻めからどの研究を真つ先にすべきかという議論へと話題がシフトして行った。

「大変だな、研究者サマは」

「そんな柄じゃないし、君の方が知ってるだろうフィリップ」

「僕は知ってる訳じゃない、調べられるだけさ」

フィリップの茶化しに愚痴をひとつ零せば、ヘラヘラとした笑い方でこちらのペースを上手く揺さぶる。恐らく人付き合いは上手いが面倒くさいタイプだとレイルは確信した。

壁に体重を預け、軽く仰いだ時、ヘルミオネがレイルの様子を心配して左手を両手で取った。

「レイル、大丈夫？」

「ああ、そんなに大丈夫じゃない」

「後でココアを入れておく、ね」

フツと微笑んだヘルミオネの顔は、皆に見せる仏頂面よりも何倍も可愛く見えた。しかしレイルが彼女に欲情することは方に1つもない。

デザートを食べ終わり、各々が食事に満足してきた時にダンブルドアが立ち上がった。

「ふむ、全員良く食べ、良く飲んだことじゃろうから、二言、三言ほどこれから新学期を迎えるにあたってお知らせがある。一年生に注意をしておくが、校内の禁じられた森には決して立ち入らぬように。上級生も同じように特に注意しておこう。そのウィーズリーツインズなどにの。フィルチ先生から授業の合間に廊下で魔法を使わないようにと注意がありました。今学期の二週目にクデイツチの選抜会があるので、寮のチームに参加したい者はマダム・フーチに連絡するように。ああそれと、禁じられた森じゃが儂が発行する特別許可証があれば条件付きで入ることを許そう。引率には森番のハグリッドが付く。危険じゃが森には神秘的な生物がおる。許可証が欲しいものは各寮の先生に相談しておくれ」

一息で言いたいことをあらかた言ったダンブルドア。レイルはそのうちの一つにしか耳が傾いてなかった。禁じられた森への特別許可証である。

「最後に……」

と、ダンブルドアが先程までの緩い雰囲気壊すように真剣な目付きで

「とても痛い死に方をしたくない者は、今年いっぱい四階の右側の廊

下には入らぬように」

この注意には誰もが疑問を感じた。だが有無を言わさぬように、ダンブルドアが杖から黄色いリボンをだしてそこに歌詞を浮かばせ校歌を歌った。但し誰一人として統率は取れてないものとする。

最後にウィーズリーツインズと呼ばれた双子が葬送行進曲のリズムで歌い終え、ダンブルドアの最後の締めくくりでそれぞれが寮へと帰って行った。

レイルはヘルミオネとフィリップと共に寮へとついて行こうとしたが、寮監督のフリットウィックと副校長のマクゴナガルに止められた。

「ミスター・クローター、少々お時間を頂戴していいですか？ 校長先生がお呼びになってます」

入学早々に老耄が何の用だ、と不思議に思いつつ、マクゴナガルが有無を言わさぬ感じだったのでフィリップとヘルミオネに先を行ってもらい、レイルは二人について行くことにした。

クライアント

フリットウィックとマクゴナガルに連れられたレイルは校長室の前まで来た。目の前には魔法で固められたガーゴイルが鎮座している。

「ピーナッツバター」

恐らく合言葉なのだろうが。ガーゴイルが目を開き、横へとその体を退けた。二人が中に入って行ったのでレイルもあとに続いた。

自動螺旋階段を登って校長室の扉をマクゴナガルがノックし、ダンブルドアに確認をとる。

「校長先生、ミスター・クローターをお連れしました」

「おお、ご苦労じゃったミネルバ。さて、レイル・クローター君、いや、レイルと呼び捨てにしているのか？入学おめでとう。夜も老けてきたので用事をさつと終わらせることとしよう」

レイルは頷いて了承の意を伝えた。そろそろペッツ達が餌をせがむ時間になってくるのだ。最悪ヘルミオネが何とかしてくれるだろうが、トランクの中にいるかはわからない。

「歓迎会の時に注意をした四階の廊下、あそこにある物を置いてそれを守ろうと計画しておるのだが、その手伝いをしてもらおうと思ってる。具体的にいえば、君の魔法生物をいくつか貸して欲しいということになるが、引き受けてくれるかね？勿論対価は払おう。要望があるならば可能な限り応えよう」

その言葉にレイルは列車内での信号を思い出した。確かにH・Nも四階だと言っていた。

「なるほど、その前に校長先生。守るもの、とは賢者の石で間違いないですね？」

「分かっておるならば話が早い。しかしその情報はどこで手に入れたのかね？」

途端、レイルは心の中に何かが入り込んでくるような感覚を覚え

た。だが昔ならば常日頃から受けていたものであり、真実ではない情報を送り込むことなど造作もない。

造作もないが、口では一応真実を言っておこうとレイルは思った。ポケットから砂打ち式通信機を取り出してダンブルドアに見せた。

「ここに通信が入りましたから。実はフラメル氏とは面識がありません。それと、断りもなく開心術を使うのは協力交渉において最も悪手であると警告します」

「なんの断りもなく開心術を使ったのは許して欲しい。これはそれほどの問題なのじゃ。ふむ、確かに防げておる上に偽の情報を混ぜ込むことも、か。この技術はどこで得たんじゃ？」

「開心術をしてくる魔法生物がいるので、それに耐えていればいつの間にか」

ダンブルドアはこの技術が独学であることに驚きはしたが、確かにそういう魔法生物は確認されているゆえに深くは問わなかった。

「そうか。それは一先ず置いておくとして、防衛対象は君が言った通り賢者の石、そして奪おうとする者の名は、名前を言っではいけないあの人じゃ」

予想以上の大物相手にレイルは一瞬眉をひくつかせた。だがこれまでの彼の行動、そして倒されたという情報から一瞬で全てを繋げたレイルはそこまで驚くことは無かった。

「なるほど、賢者の石による復活ですか。分かりました、協力しましょう」

「感謝する。では、対価は何を望むのかの？」

「ひとつは、禁じられた森への付き添い無しで自由に出入りできることを。自由に使える部屋をひとつ要求します。所属はそのままレイブンクローでいいですが、寮ではなく自室での生活の許可を。それと、そこにヘルミオネも入れることを許可してください」

「禁じられた森についてはハグリッドに話を通しておこう。部屋については、そうじゃの。大広間の玄関ホールを挟んで左側の部屋を使うと良い。空間拡張呪文を使用するのもいいじゃろう。実をいえば、魔法省からも君を自由に研究させてやってくれという指示が入ってお

る。君の提案はどこにとつても悪いことにはならん。しかし、そこに何故ミス・デイマイントが関わってくるのじゃ？」

一瞬どう説明したものか、と迷ったが、見せた方が早いとしてレイルは指を鳴らした。それと同時にヘルミオネが姿現しで校長室に入ってきた。

「呼んだ？・レイル」

「呼んだよ」

ヘルミオネはいつもの癖でレイルの左手を取ろうとしたが、今は自重しろ、と目でメッセージを送ると伝わったようでヘルミオネは何もしなかった。

さも平然と入ってきたヘルミオネにフリットウィックやマクゴナガル、果てはダンブルドアまで目を見開いた。

「ホグワーツでは姿くらましは出来ないはず……ミス・デイマイント、どうやったのです？」

「そもそも、私は人間じゃない、から？」

「多分それで合ってるよヘルミオネ」

マクゴナガルの問いに人間ではない、と返したヘルミオネ。先生ら三人は頭に疑問符を浮かべた。

「普通の姿、見せてやってくれないか？」

「……やだ」

「じやなきや証明にならないんだ。頼む」

渋々と言った感じで、本当に嫌そうな顔をしながらヘルミオネは目を閉じた。瞬間、黒いローブのようなものが内側から出てきて彼女を包んだ。その時にはもう足は地面についていなかった。

「これは……、なのですか？」

ヘルミオネ、その実態が——であることにフリットウィックが杖を抜こうとする。その前にレイルが無言呪文でフリットウィックの杖を奪った。

「何故止めるのですミスター・クローター！」

「そういう反応をする輩がこの世界にごまんといえるからですよマクゴナガル教諭。それにヘルミオネは俺の唯一の家族だ、殺させはしな

い」

少し素が出たレイルからは普段ならば絶対に見せない覇気があった。それこそ、物理空間に干渉しヘルミオネを守るように風を出現させるほどに。

レイルは二人が手出しできないように杖をフリットウィックの杖に向けた。これだけで警戒して手出しは出来なくなる。ヘルミオネはその間に人間の姿に戻った。

「杖を抑えておくれ、ミネルバ」

「ですがっ!?!」

「もし儂らがヘルミオネを亡きものとしたとしよう。となればすぐさまトランクから本来危険な生物たちを解放するだろう」

「ええ、当たり前でしょう。なんならハンガリー・ホーンテールやウクライナ・アイアンベリーでも呼びましようか？ああ、ズーウーの方がいいですかね」

「止よしてくれ、老耄おいぼれには荷が重い。それにそれ以上のものもいるんじゃないろう?」

「あまり外界には出したくないですが、ね」

マクゴナガルが杖をしまったのを見て、レイルはようやっとフリットウィックの杖を手放した。投げ渡すのではなく、直接手渡しで。

ヘルミオネは本来の姿を見せなくなかった故か、先程からレイルの胸に隠れている。

「レイル、後で貰うから」

「分かってる、それくらいなら甘んじて受ける」

三人には二人が何を言っているのかは聞こえなかったが、二人が離れた瞬間に風がなくなつた。レイルも杖をホルスターに納めた。

「杖を納めてくれて感謝しようレイル。本題に戻るが、石の守りについてを話そう。森番のハグリッド、各寮監の先生、闇の魔術に対する防衛術のクイレル先生、そして最後に儂がそれぞれ防衛用の罫をはっておる。君にはその罫の改良を頼みたいんじゃない」

「分かりました。後でリストを下さい。内容次第にもよりますが、早ければ一ヶ月、遅くても四ヶ月で終わらせましょう」

「二学生の身でそこまで出来るなら上出来じゃよ。一応最終確認をしたいので、出来上がればわしかフリットウィック先生に報告しておくれ」

「全力を尽くしましょう。ところで、一つ確認をしたいのですが」「何かね?」

未だ身体が震えているヘルミオネの右手を左手で握りながら、レイルは先程の覇気を纏いながら、瞳を蒼から金に変えて、言った。

「対象の全力排除、で宜しいですね」

「構わん、あらゆる手段を行使してくれ」

まさかの指示にフリットウィックもマクゴナガルも息を飲んだ。レイルはひとつ頷いて了承の意思を示した。

「ではフリットウィック先生、彼らを専用の部屋へ案内しておくれ。寮内で生活せずともお主の寮生には変わらない」

「分かりました。ではクローター君、デイマイントさん、こちらへ」

「はい、では御二方、お休みなさい。行こう、ヘルミオネ」

「……ん」

レイルはヘルミオネの手を引いて、校長室をあとにした。

フリットウィックに連れられた部屋にはベッドが二つあったが、どうせならとレイルがダブルベッドに形を変えた。部屋の改造は後回しにするとした。

トランクもここにあったおかげで面倒なことにはならなかった、とレイルは心から安堵すると共に、急いでトランクの中に姿を消した。

「ヘルミオネ、夜行性みんなの餌を頼む。俺はリルのところに行く」

ヘルミオネは分かった、とだけ答えてムーンカルフ兄弟姉妹達にえさやりを始めた。レイルはヴィーラの知人に作ってもらったワンメイク品の箒「ライトニングボルト」を呼び寄せ、最大戦速で雪山エリアへと向かった。

雪山の洞窟を抜けて、地下深くに隔離された一室にレイルは入った。そこにも雪が降っていた。

レイルは箒を降りて、少女が入ったシャボン玉に近づいた。起こさないように、機嫌を損ねないようにゆつくりと。実際にはレイルが

荒々しくしたとしても、シャボン玉が割れたとしても少女がレイルを傷付けることはないのだが、レイルはせめてでもと言える礼儀としてゆっくりと近づいた。

目標まで数十センチもなくなれば、レイルは右手をそつと少女の頬に添えた。そしてまた割れないように、シャボン玉に頭を入れた。

「待ったよね、ごめんリル」

「ううん、レイルが来てくれるだけで嬉しい」

少女はレイルの頬を両手で優しく撫ぜた。それだけで、レイルの心は彼女にそわれれて行く。リルはレイルには悪いがその心の揺らぎが何よりも心地よかった。

「今度、ホグワーツにヴォルデモートが賢者の石を奪いに来る。闇に当てられたら絶対に暴走する。だから、少しの間だけでいい、眠って欲しいんだ」

「……外には」

「……」

「外には、出られないの?」

「……君が望めば。いい景色は見せられないけど」

レイルは包帯だらけの体を優しく撫でる。本当は外に出したくないのだが、この子はレイルの贖罪の一つ。

こんな状態にした自分を殺したいまでであるレイルは唇を噛み締める。壊れんばかりの力を込めて握りしめる両手は爪がくい込んで血が滲んでいた。

そんな様子の子のレイルをリルは微笑んで額に唇を落とした。レイルはゆっくりと顔を上げてリルを見た。

「そんな悲しそうな顔をしないで。そとにでられなくても、私はレイルと話が出来ただけで嬉しい。また会えるなら、私はなんだってするよ」

上半身をシャボン玉の中に突っ込んでいるレイルを、リベットは抱きしめた。まるで割れ物を包み込む梱包材のように、ゆったりとした動きで。

レイルはかなり強い睡眠誘発呪文をリルにかけた。その後、レイル

は箒で雪山エリアを出て、いつもの小屋へと戻った。ちょうどヘルミオネが餌をやり終えたところだった。

「ありがとう、ヘルミオネ」

「これくらいはいい。より、約束」

「あー、ここじゃアレだし、部屋でやろう」

「だめ、今」

レイルが何かを言うよりも先に、レイルの唇をヘルミオネが奪った。じつくりと奥底まで舐れるように、舌まで入れて。息継ぎのために幾度か離しはしたが、それでも直ぐに唇を合わせた。

そうすること実に十分、ようやく身体を離れたヘルミオネは何処と無く艶がかかっていた。二人の唇は既にふやけていて、レイルに至っては腰が抜けている。

「ご馳走様」

「……お粗末様。ご馳走ついでにベッドまで運んでくれないか？」

「わかってる。そうしたの、私だし」

ヘルミオネは一度レイルを浮かせてから横抱お姫様抱っこきの姿勢でトランクから出て、ベッドに寝かせた。レイルは既に眠りについていたので、魔法を使って着替えさせてから布団をかけた。

ヘルミオネも着替えてレイルの隣に寝転んだ。レイルの顔を確認し、額と額を合わせた。

「大丈夫。貴方は私が、私達が守るから」

ヘルミオネはもう一度、今度はさつきよりも優しく、舌も入れずに、キスをして眠りについた。

授業開始

レイルとヘルミオネは同時に起きた。ふたりは目覚ましがなくとも起きられる体質だったのだ。起きた時に違和感を感じたが、昨日のやり取りを思い出し、ここがホグワーツであることを思い出した。

大広間が近いおかげで既に出来上がっている朝食がこの部屋まで届いていた。言ってはなんだが、朝食だけはイギリスも他国には負けてはいない。他は目を瞑り現実逃避をするものとする。

既に家族柄なので羞恥心もへったくれもなく、二人同時に着替える。さすがに局部などを見られるのは抵抗があるので、二人とも背中合わせで着替えた。

着替え終わった二人は大広間に行き、朝食を食べるためにレイブンクローの机へと向かおうとした。すると何やら先に食事をしていた生徒達がひそひそ声で話し始めた。

「ヘルミオネ、なんて言ってるか分かる?」

「自室を与えられた事が噂されてるみたい。どうする?」

「いや、放置でいいよ。与えられたのは事実だし、根も葉もない噂があるなら確認に来るだろうし」

二人は隣に座って一緒に朝食を食べる。小さい頃から一緒にいる二人のメニユーは必然的に同じになってくるが、そこでまたひそひそ話が多くなった。

またヘルミオネに聞いてもらおうと思ったが、その前にアリシア、メズール、そしてフィリップが二人の前に来た。彼らも噂を聞き付けていたのだ。

「おはよう三人共」

「ええ、おはようレイル。自室の噂って本当なの?」

「ああ。玄関ホールを挟んで左側の部屋が僕とヘルミオネの部屋だよ」

「となると、あの噂も本当か?」

フィリップは何やら右手を顎に宛てがい、ニヤニヤとした顔でレイ

ル達を見た。首を傾げる二人にメズールもニヤついて教えた。

「二人が出来てるー、って話だよー。男女七歳にして席を同じゅうせずとは言ったけどー、絶対二人はBまで行ってるよねー」

「最悪Cまで行っている可能性も出てくるからな。で、実際は？」

フィリップやメズールは顔を赤らめずにさも平然と言っているが、アリシアはほんのりと頬を紅く染めていた。結構レイルの知人は感覚がおかしいのかもしれない。

「そういうことをこんな場所で言うんじゃない。ほかの人たちに迷惑だろ？」

「おっと待って待って、質問を質問で返すなよ。質問文に質問文で答えるとテスト0点なの知ってるか？」

「知らない」

「無知は頂けないな」

この話をやめようと思ってもフィリップが直ぐに揚げ足を取る。こと尋問においてはかなりのエキスパートだ。魔法省に行けば上まで行けるとレイルは予想した。

答えを言い淀んでると、レイルの肩にヘルミオネの手が添えられた。

「三人は金曜日の放課後に私たちの部屋に来て。話すから」

ヘルミオネはそれだけ言うと言とレイルを残して先に部屋に帰ってしまった。レイルも「そういう事だから」と言ってヘルミオネを追いかけた。

歩いて行く途中にハーマイオニーがレイルに挨拶してきた。こういう所はマグルの美点だとレイルは思う。

「おはようレイル」

「おはようグレンジャー」

「ハーマイオニーでいいわ。別々の寮になったからには寮杯をかけて勝負ね。負けないわ」

「と言いたいところだが、僕は別に寮杯には興味がなくてね」

「あらそう？：そういうえば自室を与えられたらしいじゃない。ヘルミオネとの二人部屋。私も遊びに行っていいいかしら？」

「僕かヘルミオネが暇な時間なら、いつでもどうぞ」

そのあとは少しだけ授業の話をして、ハーマイオニーはグリフィン
ドールの席へ。レイルは荷物を取りに自室へと向かった。

授業開始となる今日だが、最初の関門は授業難易度でも宿題の多さ
でもなく、「道に迷わずに教室へとたどり着けるか」である。

別に複雑という訳では無い。ただ、曜日によつて位置が変わる階
段、隠し廊下などが新入生の往く道を阻むのだ。

上級生は助けられないのか、と聞かれれば助ける者もいるが助けられない者
が大半だ。まずは自分で道を覚える、それが真つ先に新入生に求めら
れるものだった。

しかし、そんな中で二名だけ他とは全く違う動きをするものだ。

誰であろう、入学初日に特例措置として二人部屋を与えられ、一緒に
住んでいるレイルとヘルミオネである。

彼らはネズミに頼んで作ってもらった地図を五分間で叩き込み、覚
えた道を宙に浮きながら移動したのだ。

「この道で大丈夫？」

「ああ。ネズミだけじゃなくネクサスにも行かせたから間違いない
よ」

他の生徒はその様子を口を開けて見るしかなかった。施錠された
扉にも行先が変わる廊下も引つからずに突き進み、最短距離で教室へ
と向かう。

二人は遅刻することはなかったが、他の生徒は時間を思い出し教室
へと全力疾走する羽目になった。

最初の授業は魔法史だった。

担当の先生がゴーストのビンズの語り方は凄く単調で睡眠欲を誘
発してくることとなった。結論的にレイブンクロー生からはこの時
間は自習ということになった。それはレイルもヘルミオネも例外で
はなく、レイルは罫の改良作、ヘルミオネは魔法省へ提出するレポ
トを書きあげていた。

一応覚えておいた方が良いかと思い、レイルは録音機にビンズの語
りを入れて置いた。

二つ目の授業は薬草学。

ハツフルパフ寮監。ポモーナ・スプラウトが仕切るこの授業では、どこか皆が期待していた。恐らく初めの授業があまり宜しくなかったせいだろう。

今回は初回ということで簡単な説明と薬草についての知識を皆から絞り上げていた。

レイルに至っては七年生で学ぶものを答えていたお陰で、レイブンクローにこの授業でレイルだけで三十点も稼いだ。

三つ目の授業は闇の魔術に対する防衛術。

正直あまりレイルはこの授業を楽しみにしていなかった。クイレルの罫はただトロールを当てるだけというヴォルデモートに対する罫とはとても思えないのだ。

そういう楽観的思考を持っているならばいざ知らず、朝食の時に姿を確認したが、あまり健康体ではなかった。

而して、あまりクイレルの授業が良くないという予測は当たってしまった。

教室に入ってくるなり飛び込んでくるのは胡ニンニクの匂い、終始オドオドして授業になってない授業。

これではトランクでヘルミオネに学んだ方がよかったと思えるほど酷かった。

授業開始初日の三つのうち二つが期待外れだったお陰でレイブンクローの新生生たちはかなり落胆していた。

しかしその落胆も、次の日で授業がクソという認識が改められることとなる。

二日目の一つ目の授業は変身術だった。

が、教室に入っても担当のマクゴナガルはどこにも見えず、いるのは教壇の上で欠伸をする猫一匹のみ。レイルが話しかけようとする寸前に、フィリップが手を出して止めた。

「御機嫌よう、マクゴナガル教授。流星の変身ですね、今度僕にも教えてくださいませんか？」

その言葉に誰もがフィリップがイカれた、と思ったが、レイルとへ

ルミオネだけはその真意を理解した。目の前の猫が動物もどきであることに。

変身を解いたマクゴナガルはフィリップに五点を与え、生徒に席に着くように促した。

「最初に警告します。変身術はホグワーツで学ぶ魔法の中で最も複雑で危険なものです。中途半端に私の授業を受けるつもりのある生徒は出て行ってもらいますし、二度と教室にも入れません。まあ、知識に貪欲なレイブンクローは大丈夫でしょう。では、授業を始めます」
予め決められたペアでは、授業が開始した。レイルのペアはスリザリンのブリーズ・ザビニだった。

先ずはマクゴナガルが実演し、理論を教えるからマッチ棒を針に変える課題が始まった。ヘルミオネの予習もあって、レイルとヘルミオネは一発で成功させた。

他に一発で成功させたのはフィリップだった

「素晴らしい完成度ですミスター・クローター、ミス・デイマイント。レイブンクローに1人ずつ五点上げましょう。ミスター・レッカは装飾も施してあるので七点です」

その後はレイル達にコツを教わりに沢山の生徒が群がった。机1つでは処理できなかつたのでマクゴナガルに許可を取って教壇を貸してもらった。

「大切なのはイメージ、確かに理論を理解することも重要だけど、それは二の次にしておこう。まず、薪をくべられるような炉をイメージする。そこを魔力源として考えるんだ。位置は心臓の隣ね。そしたら、そこからの熱を魔力と想定して、血管でも骨でもいいけど、その熱を腕から手へ、手から杖へと流す。利き腕だよ。で、形、長さ、硬度、光沢を想定して、呪文を放てば、ほら。フェラベルト^{変化せよ}」

レイルは自分が変えた針に変化魔法を当てて針から槍へと変化させた。それを手に持つと、それを見ていた生徒から拍手が起こる。マクゴナガルも手を叩いていた。

「人が空想できる全ての物事は起こりうる現実である、フランスのマグルの作家、ジュール・ヴェルヌの言葉です。マグルにとってはドラ

ゴンに乗る、なんてことは無理ですが、僕ら魔法使いならば可能です。僕らでもドラゴンに乗ることは少し夢が遠いですが、そう考えるとマッチを針に変えることなんて簡単に思えるでしょう？…その君、やってみて」

「はっ、はいー」

奥出そうな銀髪の子が言われたことをイメージしつつ変化呪文を唱えると、見事針に変えることが出来た。他の生徒も負けないうように自分も、と変化していく。

最終的にはレイブンクロー全員のマッチが同じような針になっていた。スリザリンの方も全員ではないが八割方がマッチを針に変えられていた。

「素晴らしい授業でした、レイブンクローとスリザリンそれぞれ五点。その手助けをしてくれたミスター・クローターには十点を上げましょう。今日行った課題は変身術の初歩の初歩であり、また変身術の全てが詰まっています。皆さん、ミスター・クローターの考え方を忘れぬように」

マクゴナガルは自分の授業が少し潰れたことに後悔しかけたが、これだけの内容を一生徒がやってのけてくれたとプラスに考えることとした。

二日目の二つ目の授業は呪文学、レイブンクローの寮監フリットウィックの授業だ。

フリットプが例のセドリックという人から「フリットウィック先生の授業はとてもわかりやすい」という話を聞いていたので、レイルも内心無意識でワクワクしていた。

実際、フリットウィックの授業はとても分かりやすかった。今回の課題は杖の先端を光らせる、だったのだが、変身術でのレイルのイメージの仕方、フリットウィックの理論を考えながら呪文を唱えた結果、レイブンクロー全員が一発で光らせることが出来た。同室授業となるグリフィンホールは半数以上が上手く光ってなかった。

物覚えが早すぎると思ったフリットウィックが何故そこまでできるかを問うたところに、レイルがアドバイスをくれたことを話した。

「なるほど。クローター君のお陰でしたか。それでも皆良い理解力だ！レイブンクローに十点を与えましょう！」

授業の時間が余ったせいで、どうすべきかを悩んだ挙句、フリットウィックは決闘というものについて軽く講義をした。なんでも、昔はチャンピオンだったらしい。

最後の授業は魔法薬学。

受け持ちはスリザリンの寮監であるセブルス・スネイプだ。レイルはセブルスと面識があるため、真っ先に行って軽く挨拶をした。

「お久しぶりですスネイプ教諭。ここで貴方の授業を受けられる事を誇りに思います」

「久しいなクローター。その誇りを大事にしてくれたまえ。ところでユニコーンの血は余っているかね？そろそろ在庫がつきそうなのでな」

「分かりました、夕食の際にお渡しします」

「感謝する。では座ってハツフルパフを待っている」

合同で授業を行うハツフルパフを待っていると、横にメズールが座った。やはり友愛を大事にするハツフルパフはその全てがレイブンクローとペアになった。

一度退室したセブルスが戻ってくると、出欠をとり、演説を始めた。

「この授業では杖を振るうなどという馬鹿げたことはしない。それが魔法であるか、と思うかもしれないが、沸々と揺れる大釜、立ち上がる湯気、人の中を巡る体液の繊細な力というものはいとも簡単に人の心を揺らし、感覚を狂わす魔力となる。君達がこの技術を真に理解することなど私は期待していない、私が教えるのは名声を瓶に詰め、栄光を醸造し、地獄の釜にさえ蓋をする方法である。もともと、君達がこれまで私が教えてきた連中よりもウスノロでなければの話だがな。ああ、たった一人は違うか。クローター」

「何でしょう？」

急に名指しされたことに対しても普通に対応するレイル。この位はレイルの想定範囲内である。

「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎したものを加えるとど

うなる?」

「生ける屍の水薬が出来上がります。強力な睡眠薬で、加熱段階での失敗が多数起こります」

「加えて問おうミスター・クローター。ベゾアール石を探せと言われるらどこを探す?」

「ベゾアール石は山羊の胃の中に存在するあらゆる毒に使える解毒剤です。大人の山羊は胃酸が強いため石の解毒効果が薄まっているので大人と子供のちょうど間位の時に取り出すのが最適かと」

「更に問おう。マフルリート薬に水魔のD型の血液を入れると変色の仕方はどうなる?」

「北半球水魔と南半球水魔の血液の色は異なり、北半球側が薄い青に、南半球側が紫に変色し、どちらも三十分経てば透明になります」

最後の最後に専門知識が必要になってくるのを歯噛みしそうになりながら、全てを完璧に答えたレイル。セブルスはレイルの目を数秒見て、教壇にゆっくりと歩いていった。

「ふむ、満点回答だ。レイブンクローに各質問ずつ一点をやろう。名声だけが全てではないと証明された瞬間だな。そしてレイブンクローは流石だが、ハツフルパフ。何故今の質問と回答を羊皮紙に移さないのか私には理解できないな」

レイブンクローの皆とメズールは羊皮紙に回答を書いていたが、他の生徒は何もしていなかったので直ぐにペンを持ち紙に向き合うこととなった。

しかしその心は羊皮紙ではなくセブルスに向いていた。先輩に「スネイプが他寮に得点するのはありえない」と聞いていたので驚愕したのである。

「ああ、クローターは私の助手をしてくれ。魔法薬に関しては私と同等かそれ以上の立場にあると言って良いのではな」

「了解しました」

レイルは立ち上がり、メズールに謝罪してからセブルスの隣に立った。メズールはフィリップとペアになった。

それから二人組を作るように指示された。変身術でレイルにそれ

なりの知識があることが分かっていたレイブクロー生はレイルと組みたがっていたのだが、先にセブルスに取られたために別の人とペアを組んだ。

調査を開始してから一番早くに作ったのはフィリップ・メズールのペアだった。それ以外のペアにはレイルがアドバイスをしながら回って行った。

「時間だ。出来たものを机の上に出せ」

セブルスとレイルは薬の評価を始めた。いくら同じ寮といえども、こんな所で最良はしてられないのでどこが良かったか、どこが悪かったか、次はどうしたらいいか、の三つの要点を伝えて合格か不合格かを伝えて行った。

「ふむ、クローターのお陰かほぼ全てが合格ラインに達しているな。そして一番初めに仕上げたハワード、キラグリードペアに一点を与えよう。レイブクローとハツフルパフに一点だ。主体になっていたのはハワードだな。どこで知った？」

「僕の本棚を活用しましたスネイプ教授。そこに全てがありますので」

「なるほど、その本棚については後々詳しく聞こう。では片付けを始めろ」

用具や材料の片付けの後、もう一度魔法薬について演説した後、今日の授業が終わった。

帰り道、フィリップとレイル、ヘルミオネ、メズールが歩きながら大広間に向かってしていると、前方からハーマイオニーが走ってきた。どうやら四人を探していたようだった。

「貴方達、スネイプ先生から点を取ったって本当なの？」

息切れしながらも声を届かすハーマイオニーにフィリップは頷いた。

「四点のうち三点はレイルだが」

「それでも凄いことなのよ！私達の時はハリーばかりに当てて勝手に減点したのよ。私は手を挙げたのに……」

息が整ってきたハーマイオニーだが、今度は別の意味で息が上がっ

てきていた。レイルは彼女を落ち着かせようとしたが、いい案が浮かばなかった。

そこに指に飴を三本挟んだメズールが言葉を挟んだ。

「きつと意志を示して欲しかったんじゃないかなー?」

「意思?」

「そー。あたしはそのハリー某さんのことは知らないけどー、確か生き残った男の子って呼ばれてるんでしょー?」

「え、ええ」

ハリーを知らない、という言葉がハーマイオニーは「ハリーのことを知らない」と捉えたが、メズールが言いたいのは「ハリーの人物性を知らない」である。

「そんな後付けの名声に振り回されてるだけなのかー、はたまた名声に相応しいものなのかー、確認でもしたかったんじゃない?」

まー、あたしは美味しいものさえ食べられればなんでもいいけどねー、とだけ言って締めくりメズールは先に行った。後を追うようにヘルミオネ、レイルも続いた。フィリップだけがそこに残った。

「まあ、メズールの言い分はただの推測だ。余り真に受けないようにした方がいい」

「ええ、そうするわ。貴方は行かないの?」

「いや、一つ勧誘でもしようかと思つてね」

フィリップの言葉に疑問符を浮かべるハーマイオニー。歩きながらにしよう、ということと二人は共に大広間に向かった。

「実は、レイルの部屋で勉強会を開こう、という話になつててね」

「勉強会?」

「そう。レイブンクローが更なる高みへと目指せるように、とね。時間は土曜日的一天中、いつ入るか、いつ出るかは自由だが、一人2時間までだ。他寮の生徒の出入りも自由だから、君も来るといい。適正あるんだらう?レイブンクローの」

「そういう話しなら勿論行くわ。レイブンクロー以外で行くのは誰なの?」

「今のところ決まっているのはハツフルパフからセドリツクやメズー

ル達、スリザリンからはアリスかな」

「分かったわ。ありがとう」

「これくらいはどうともないさ」

フィリップはハーマイオニーと別れ、大広間で夕食を摂った後、それぞれの寮へと戻った。

畏怖の象徴

アリシア、フィリップ、メズール、ハーマイオニーがレイル達の部屋に着くと、ヘルミオネが土曜日の勉強会のための部屋を製作していた。奥に扉をつけ新たな部屋を作り、その隣を寝室とするようにしたのだ。

「ヘルミオネー、来たよー？」

「うん。待ってた」

メズールが無限飴玉を口に含めながら挨拶すると、無表情に答えた。しかし、肝心のレイルが見当たらない。

どこに居るのか探そうとした時、机の横にあつたトランクが独りで開かれた。中からはレイルが顔を覗かせていた。

「来たんだ。ヘルミオネ、皆を中に入れて」

レイルはそれだけ言ってトランクの中に戻って行った。トランクを閉じたヘルミオネはゆっくりと三人に近づいて行った。

「付き添い姿くらましをするから捕まってる」

「了解」

「分かったわ」

「れっつごー！」

「行きましょ」

ちょうど一周するように、ヘルミオネ、フィリップ、アリシア、メズール、ハーマイオニーの順に円並び、ヘルミオネは姿くらましをした。

次の瞬間にはトランクの中に入っていた。四人はある違和感を感じた。一番初めに気がついたのはハーマイオニーだった。

「今のとて姿くらましよね。慣れてないと吐き気がするって聞いたけど……」

「未熟者だけ。ちゃんと使えば弊害はない」

ヘルミオネは七つの肉塊を浮遊呪文で浮かせた。何をするのか疑

問の中、ヘルミオネは四人を手招きした。

ちようどいい位置に浮かべたヘルミオネは説明もなしに地面に座った。それを見てアリシア達も座るが、フィリップだけは立っていた。

「ところでヘルミオネ、レイルはどこなの？」

「あの辺」

アリシアが問うたレイルの位置は、ヘルミオネが指さした雲の上らしい。数秒凝視していると、そこから八本の飛行機雲らしきものが飛び出した。その先頭には箒に股がったレイルがいた。

その後ろをつくのはどれもドラゴンだった。中には希少価値の高いものまでいた。

「ちよつ、あれ大丈夫なの!？」

「大丈夫。妨害禁止レースだから」

「ドラゴンに妨害禁止を命令できる…クローターの才能は凄まじいな」

マグルのモータースポーツで例えれば、彼らは今バックストレッチに差し掛かったところである。レイルが先頭を走っているが、彼からはスリップストリームは得られないだろう。

数秒後、レイルが正面を突っ切って行つたと同時に七体のドラゴンが肉塊を掴みレイルを追うようにして飛んだ。そのレイルは上へ向かってバレルロールをして、最後はヘルミオネの元へと降り立った。

「判定は？」

「二着から順にレイル、エラクレス、フレアーズ」

レイルは小さくガッツポーズ、エラクレスと呼ばれたドラゴンは高々と吼え、フレアーズという赤いドラゴンは悔しそうに脚を地面に叩きつけた。

そこでアリシア達が気づく。これらのドラゴンの名称を。

「これ…ハンガリー・ホーンテール!? しかも右のはチャイニーズ・ファイアボールじゃない!？」

「後ろのはスウエーデン・ショートスナウト、緑色のはウエールズ・グ

リーンか」

「その後ろはノルウエー・リッジバックに、アイルランド・マリ
ジョールだねー」

「最後に飛んできたの、ウクライナ・アイアンベリー!?!? どういうこと
!?!?」

どれも有名なドラゴンな上に、ドラゴン最強と呼ばれるハンガ
リー・ホーンテールを飼い慣らしている。普通はこんな光景は見れな
いだろう。

ドラゴン達は肉塊を持って空へと帰って行った。レイルは箒を立
てかけて、本題に入るために小屋へと入った。

客席用の椅子に四人を座らせ、ヘルミオネはベッドに、レイルは作
業用の椅子に腰掛けた。数年前に作成したものだが、中々の出来で気
に入ってるのだ。

「で、話すって言われてたけど、何を話してくれるの?」

「ヘルミオネが僕と一緒に居なきゃ行けない理由」

レイルがそう言った瞬間、ヘルミオネが震えた。だがそれは微々た
るものであったし、事実レイル以外は見えなかった。

レイルはヘルミオネの横に座り、震えを抑えるためにその右手を
取った。大丈夫、と、暗に語りかけるように。

「今からヘルミオネの本当の姿を見せるけど、絶対に杖を抜かないで
欲しいんだ」

「杖を……って言われても」

「本来ならば人に危害を加えるけど、ヘルミオネは何もしないから。
頼む」

「レイル……」

しっかりと、頭が膝に着くまで腰を折ってレイルは頭を下げる。ヘ
ルミオネもレイルに続いて未だ震える体を押さえつけて頭を下げる。

ハーマイオニーは突然の懇願に頭を混乱させ、メズールは何が何だ
かわかってなかった。事の重大さを理解しているアリシアはフィ
リップに視線を送った。

もしヘルミオネの本当の姿が人外であるならば、フィリップの目に

何かが映っているはずと思ったのだ。フィリップからの反応は、アタリ。

未だに頭を下げ続ける二人の手を取り、顔を上げさせる。

「コンパートメントでも言ったでしょ？そんなに心配しなくても大丈夫よ。仮に私たちが貴方の言う邪な考えを持っているならもう既にトランクをパクってるわよ」

「こちらとしてはトランクの隅から隅まで全部調べ尽くしたい、君は情報秘匿できる。Win-winと言うやつさ」

「そうでなくても、私はヘルミオネを守るぞー！個人的に仲良くしたいですしー」

「え、ちよ、三人とも、いいの？」

二人の言いたいことを理解したメズールは二人に合わせた。唯一わかっていなかったーマイオニーが戸惑うが、アリスアの「大丈夫よ」という声に、何も言えなくなった。

アリスアがヘルミオネの左手を両手で包むと、視線を合わせた。

「あなたの正体は正直気になる。けど、大丈夫って気がするのよ。会って一日も経ってないけどね。それに結構いい噂が立っているレイルのお墨付きよ？なら何も心配はないわ」

フィリップとメズールが頷いて同意を示した。彼らは茶化しに來ただけなのだろうが、この雰囲気に乗じてそれっぽくしているだけだった。それでも先程メズールが言った「個人的に仲良くしたい」というのは本当であった。

「だから、貴女に危険が及べば私たちが守るし、貴女に仇なす者は私達が排除するわ」

「……あり、がと」

ティファール家のカリスマか、基本的に感謝を述べることの無いヘルミオネがアリスアに頬を赤らめながら感謝の言葉を口にした。アリスアはヘルミオネの頭を撫でて、ベッドから立たせた。

「じゃあ見せてくれ、デイマイント嬢。君の本当の姿を」

「大丈夫だよー。もしフィリップが何かしようとしたら必要以上に縛るからー」

「それ、あんまり大丈夫じゃないと思うのだけれど……」

自信満々に言うメズールにツツコミを入れるハーマイオニー。しかし本気でやりかねないのがフィリップなのだ。

ヘルミオネは息を整え、内側から黒いローブのようなものを出し自らに纏わせる。みるみるうちにその姿を人間から忌々しい姿へと変えていく。

「……なるほど、これは杖を抜くなど警告するわけだ」

「なんか、体感温度が下がったんだけど。気の所為？」

「いえ、部屋の温度の方が下がってるわ」

「本でしか読んだことがないけど、これが、——……」

まさかの怪物の登場に四人は目を見開いた。ハーマイオニーなんかは冷気の濃さで動けなくなっている。

アリシアはどこことなくヘルミオネが泣いているような気がした。人間体でもこの体でもなく、彼女の心が泣いている気がしたのだ。

アリシアは両の手をヘルミオネに伸ばし、その体をゆっくりと抱き締めた。なにかされないか心配になったハーマイオニーが杖を抜こうとしたが、それをフィリップが止めていた。しっかりと杖を抜かず、腕だけで。

「なんで止めるの？」

「君はデイマイント嬢の決意を無駄にする気か？」

今朝の自分の言葉が今ブーメランとして帰ってきたが、でなければハーマイオニーはヘルミオネに向かってあらゆる使える呪文を試すだろう。だがそんなことをすればハーマイオニーはヘルミオネの決意を無為に振る事となる。フィリップはそれだけは避けたかったのだ。

ヘルミオネはアリシアに抱きしめられたまま、その姿を人間に戻した。その顔はアリシアによって隠されてるが、肩は先ほどより震えていた。

「大丈夫よヘルミオネ。ここには貴女を傷付けるものは居ないわ」

「……」

ヘルミオネは黙っていた。だが僅かに頷いたのか、アリシアがその

微笑みを深めて更に抱き締めた。

ヘルミオネは落ち着いたのか、レイルの胸に頭を埋めていた。そこでハーマイオニーが何かを思い出したように「あ」と呟いた。

「どうした？グレンジャー嬢」

「いや、ハリーとロンよ！あの二人、マルフォイの罠にかかってるかもしれないの！」

「どういうことー？」

ハーマイオニーによれば、金曜日から始まった箒の訓練の際、ネビルの思い出し玉がドラコに取られ、それに怒ったハリーとロナルドが喧嘩を売ったらしい。どう見ても罠だと感じるものを忠告も聞きもせずを受けて立つと言ったらしいのだ。

「止めに行かないと！」

「残念だけどー、遅いんじゃないー？」

「そうだね。君が今ポッターとウィーズリーの所に行ったところで管理人のファイルに捕まって減点されるだけだ。報告は寮監に行くだろうから、マクゴナガル教授なら一人五十点は引くだろう」

だから行かない方がいいよ、とフィリップは諭した。ハーマイオニーは落ち着いたが、それでも自分の寮の大幅減点には軽く絶望していた。

「そんな・・・寮杯が遠ざかっちゃうじゃない」

「ああ、減点に関しては僕らも危険性はある。何せここは寮の外だからね」

「それは大丈夫でしょー。レイルがここに泊めてくれればー」

「泊めるよ。ベッドも用意してあるし」

レイルが天井を開けると、そこには蜘蛛の糸のハンモックが吊り下げられていた。

「ありがと、ミネマ」

「これくらいは御安い御用だ」

天井から顔を覗かせたアクロマンチュラは鼻を鳴らして戻って行った。ミネマは喋ることが出来るアクロマンチュラだった。

「非粘性の糸だからそのままかけてもらっていいよ。僕とヘルミオネ

は外で寝るから」

「僕とヘルミオネは」という言葉に、フィリップとメズールが反応した。加速魔法ヘイストを使ったかのような速度で小屋を上がろうとしたレイルの腕を掴んだ。

「何?」

「待ちなよー。まだ噂の確認ができてないんだからさー」

「どれの事?」

「君とデイマイント嬢が出来てる、って話だよ」

思い出したらしいレイルはブリキのように重い首を二人の方に向けた。そこには清々しい笑顔が二つほど張り付いていた。アリシアもハーマイオニーも呆れてはいたが、興味が無いわけではなかった。

レイルが言葉を探していると、ヘルミオネ突然に

「……………レイルは私の知人で、友人で、親友で、幼馴染で、家族で……………大切な人」

とだけ残してさっさと外へと出ていった。今の言葉を言及するようレイルを捕まえたままだった。

「と、言っていますか?」

「本当のところはどうなんだ?クローター」

「……………まあ、ヘルミオネが言った通り、かな。もういいでしょ、離して」肯定されるとは思わなかった二人は一瞬力を緩めた。その隙を見逃さず手を振り払うとトランクの外に出て行った。

そのあとはなし崩しに全員が寝ることとなった。ヘルミオネも寝たが、レイルだけは徹夜で起きていた。

「そりや、ね。ヘルミオネは、僕の知人で、友人で、親友で、幼馴染で、家族で……大切な人だよ」

怒れる鴉

ハリーとロナルドがドラコの罠にかかった翌日、グリフィンボールから130点の減点がされていたことに大広間は大きくどよめいた。

ハリーら二人はまんまとドラコにしてやられた事をグリフィンボールから強く非難された。また、同じく30点を引かれたネビルについては理由を説明したところそこまで言われなかった。

マルフォイは釣れた鯛を自慢するようにハリーとロナルドがいかの間抜けかを大広間で大声で演説していた。それに対してスリザリンの全員がはやしたてた。

実害のないレイブンクローとハツフルパフは興味なしと言ったところでそれぞれの席で料理を食べていた。レイル達に至ってはいつものメンバーでレイル達の部屋で食べていた。

この騒動の結末は、マクゴナガルの一喝によって終わった。

「よく言って勇敢、悪く言って蛮勇とはよく言ったものだね」

「まあこの年齢じゃ仕方ないでしょー。馬鹿だけどさー」

「ドラコはこれからもなにかするでしょうね」

「次はピーブスの前に突き出すのかな？」

「ありえる」

「ホントに行かなくてよかった……行っていたら180点減点だったなんて」

と、ファイリップとメズールからは辛口評価、アリシアとレイル、ヘルミオネはドラコの次の行動を予測、ハーマイオニーは止めに行った未来を予測して安堵していた。

その後は特に変哲なこと無く日が過ぎていった。今年のレイブンクローはレイルやファイリップといった秀才がいるおかげで例年よりも勉学に取り込む量が多くなっていた。

即ち、高い壁への結託。目標へと近づくために互いの能力を全て活用してレイルのとファイリップに挑もうという訳だ。共通の敵が現れれば争いは収まる。無くなりはないが。

土曜日の勉強会は、大体グループで来るものが多かった。時間が被りすぎて部屋を広くしなければならぬということとは意外になく、予定していた一教室分で事足りた。

基本的にレイルとヘルミオネが彼らの勉強に触ることはなく、各々が自身の知識を使い課題などをこなして行つた。当然質問などは飛んでくるのでその時はしっかりとヒントと考え方のアドバイスを与えた。

フィリップが個人の魔力の癖を見抜き、ヘルミオネが理論を説明し、レイルが纏める。レイルとつても新しい発想が得られる、彼らは更なる高みを目指せる、と言つた具合にこの教室はかなり成功を収めていた。

それからまた暫くして、十月末。所謂ハロウィーンである。

朝食からかぼちや尽くしで、正直夕食までに飽きそうであつた。

とはいえハロウィーンだからと言ってやることは変わらず、今日も今日とて授業である。

そう思い授業へと向かおうとした時、廊下に二人の赤毛がいた。顔の特徴があつているところを見るに、どうやら兄弟らしい。

そしてそこでレイルは思い出した。歓迎会の時に禁じられた森への侵入を念を押して禁止していた、ウィーズリーツインズなる存在を。

「トリック・オア・トリートだ、レイル・クローター！」

「つと兄弟、どうやらレイブンクロウの秀才様はお菓子を持っているとお見受けする」

「ああ。なれば！」

「二問答無用でイタズラ開始だ！」

どんな暴論だ、と言いたくなつたが、それより前にウィーズリーの二人はイタズラを開始した。催涙ガスに始まり自動でワイヤートラップを貼る箱などなど、迷惑極まりないが、アイデア自体はかなり褒められたものだった。

一通りいたずらを終わったのか、息を切らせながら立っていた。レイルはと言うと、何かやらかすだろうと予測し予め張っていた防護

魔法で全てを防いでいた。勿論後ろのアリシア達に被害が及ばないように、である。

「っと、防がれたか?」

「全部だな。ちえつ、不意つけばいけると思ったのに」

「またリベンジするからなー」とだけ残して片付けもせず授業へ行ってしまった。レイルは呆気に取られつつ、アリシア達と清め魔法を駆使して片付けてから授業へと向かった。

ウィーズリーツインズの突撃もありつつ、一時間目の変身学は普通に終わった。やはり一番初めのレイルの考え方が上手くいつているようで、詰まることも無く終わった。

呪文学の時間は、今回は浮遊呪文を学ぶようだ。今回はレイブンクロー全員が一発でとは言わないが、それでも数回のうちに成功させていた。レイブンクローに二十点が入ることになった。

「クローター君、浮遊させてから一回転とか出来るかな?」

「バレルロールって事ですか? 分かりましたけど。」

「^浮インガー^遊ダイヤモンド・^せレヴィオー^よサ」

なかなか上手くないかないグリフィンドール勢にと思い、フリットウィックからの指名を受けてレイルは先ず羽を浮かせた。そこから一度後ろに後退させ、速度をつけて一回転させた。

見事に宙を飛んだ黒い羽根はレイルの机に着地し、皆から拍手を受けた。

「ほら、ウィン『ガー』ダイヤモンド・レヴィオーサよ。あなたはガで伸ばしてないのよ」

「そんなにご存知なら君がやってみなよ!」

椅子に座ると同時に聞こえてきたそんなやり取りに、レイルは視線を向けた。どうやらロナルドが上手くとばせない理由を述べるが、ロナルドには不評なようでまだ手本を強請った。

ハーマイオニーは溜息をつきながら浮遊呪文を唱え杖を震えば、羽は彼女の頭上1メートル程に浮かび上がった。

「素晴らしい! マグル出身といえどもこの短期間で浮遊呪文を使う人は少ないのです。グレンジャーさんに五点、そして見事な手本を見せ

てくれたクローター君に十点を与えましょう」

結局最後までできなかつたロナルドは再び拍手されるふたりを苦々しい気持ちで見ている。

その後、授業終わりにロナルドがこんなことを言った。

「だから誰だって我慢できてないって。悪魔みたいなもんだよ、アイツ」

その言葉をギリギリ届く範囲で聞いていたらしいハーマイオニーは駆け出した。ハリーは追いかけてしようとしたがロナルドにとめられていた。

それに反応したのは、以外にもフィリップだった。

「デイマイント嬢」

「何？」

「グレンジャー嬢を呼び戻してくれ」

ヘルミオネはそれに頷いて姿くらましをし、フィリップの横に再び現れた。何故かハーマイオニーを羽交い締めにしていった。

ヘルミオネは無言のままロナルドに近づいて行った。自然に二人の間には道ができていた。

「な、なんだよ」

突然の登場に若干怖気づいているロナルドだが、そんなことはどうでもいいと言わんばかりに鼻を鳴らし、フィリップは杖を抜いた。

「先程グレンジャー嬢が言ったことだが、魔法を口にするのと杖の動きは飽くまでもイメージの確立だ。どの動きがどの魔法、と覚えることで魔法を打ちやすくしているだけのこと」

「だから何だってんだよ」

「つまり確かなイメージさえあれば杖を向け、念じるだけで魔法を放てるのさ。こんな風に」

フィリップは無言呪文でロナルドの杖を取りあげ、束縛呪文で縛り上げた。突然の事で目が点になるだけのロナルドはバランスを崩して転んでしまった。

「クローター」

「自分でやりなよ……」

レイルは終了呪文を無言で放ち、ロナルドのロープを消した。そこにいた皆は無言呪文をこの年で使えるものが二人もいた事に驚愕していた。

「さて、僕は今非常に機嫌が悪い。これを直すためには君をボコボコにしなければならぬのだが、無防備な君を叩きのめしたとしても周りは誰も納得しないだろう」

フィリップはロナルドに杖を渡し、無理やり立たせた。そしてレイルを間に互いに5メートルになるように位置し、杖を払った。

「決闘をすることにする。僕が負ければ君には金輪際変わらないし、グレンジャー嬢をどれだけ悪く言ってもノータッチだ。だが君が負けた場合、グレンジャー嬢に頭を床につけて謝罪し、今後僕らには関わらないでもらおう。ルールは互いが戦闘不能になる、または降参するまで。闇の魔法は当然使用禁止。なんなら武装解除呪文のみでもいい」

「受けない方が懸命だウィーズリー。君はまだグリフィンボールから敵視されてるだろう？ 負ければ地位はドン底だ。しかも聖二十八一族であるウィーズリー家の顔にもドロを塗ることになる。そんな汚名を被せられるより尻尾まいて逃げた方がいいよ？」

レイルの忠告も耳に入っていなかったのか、フィリップの煽りのみを聞いていたらしいロナルドは立ち上がった。その目には確かな怒りがあった。

正直に言えば、フィリップは怒っていた。だが、それを理解できるのはこの場ではヘルミオネとレイルだけだった。

「私、フィリップ・レッカ・ハワードはロナルド・ウィーズリーに対し決闘を挑みます」

「では私、レイル・クローターが立会人を務めましょう」

「ぼ、私、ロナルド・ウィーズリーはフィリップ・レッカ・ハワードからの決闘を受けます」

互いにお辞儀をし、杖を構えた。レイルは指を鳴らし、決闘開始の合図を打った。

カウントもなかったというのに、その場にいた者の予想を外すよう

に先手をとったのはロナルドだった。

「エクスペリアームズ！」

恐らく呪文系はある程度知っているのだろう。聖二十八一族は伊達ではないことを証明したいらしい。

しかしフィリップにはその目でロナルドの放った武装解除呪文に綻びがある事を見抜いている。半身になり呪文を避けて、近場の床を粉々呪文で粉砕し煙幕を上げさせた。

「ウインガーデリアム・レビオーサ、フェラベルト、インクルージオ、エンゴージオ」

丁寧に、これが魔法の神髄だともいうようにフィリップは杖を振る。粉々呪文で出た岩の欠片を浮遊させ、変化させ、増幅させ、巨大化させ、出来た宙に浮く巨大な四本の剣はロナルドには見えていなかった。

「フリペンド」

射出呪文で放たれた剣はロナルドの足、腕、首、鳩尾の順で突き刺さり、向こうの壁まで勢いよく吹き飛んで行った。その外見から、一部の女子が悲鳴が上がっていたが、レイルは何も言う訳もなくただじっとロナルドの方を見ていた。

やりすぎだと感じたハリーが助けに行こうとするが、それはヘルミオネに邪魔された。

「邪魔するなよ！」

「だめ。決闘に邪魔出しも代行もない。ウィーズリーが降参しない以上、決闘は続行」

「死ぬかもしれないんだぞ！それにさつき剣で切られた！」

「刃を潰してある。酷くても骨折で済む」

話を通じない、とヘルミオネを押しつけていこうとハリーが進むと、無言呪文でヘルミオネが失神させた。フリットウィックは悪いと思ったが、ここは決闘のルールに従わなければならなかった。

元チャンピオンだからわかる事として、このルールはどう足掻いてもフィリップの方が有利だ。知識量として先ず知っている魔法の量に軍配が上がる。更には頭の回転、激昂しても冷静さを失わないメン

タルの強さなどもフィリップが勝っている。しかも立会人は完全にフィリップ側である故、フィリップが負ける要素はないのだ。
立会人レイルがロナルドの元へ行き、意識を確認する。首にあたり強く頭が揺れたことで起きた脳震盪のせい、彼は完全に伸びていた。

「ロナルド・ウィーズリー戦闘不能。よって、この勝負をフィリップ・レツカ・ハワードの勝利とする」

フィリップは今一度お辞儀をし、伸びているロナルドの胸倉を掴んで言った。

「君が馬鹿にしたグレンジャー嬢は、私よりも弱い、確実に君よりも強い。君が馬鹿にしたのは、彼女の報われた努力だ。それを侮辱するのは、誰であろうと私が許さない」

後にハーマイオニー・ハワードは語る。

「いつあの変わり者に惚れたかっていえば、確実にあの時ね。今でもカッコイイけど、私的にいえばあの時が一番かっこよかったわ。当時の私は否定するだろうけど」

トロールの倒し方

ロナルドを打ち負かしたフィリップはフリットウィックに五十点の減点と九十点の加点がされた。曰く、

「確かに急に決闘を挑み、ウィーズリー君を下したことの理由は正当で、しかし結果として彼は気絶し、重度の打撲と骨への罅を与えました。それは余り褒められたものではありません。しかし彼の戦術やメンタルは素晴らしいものでした。先ず煙幕をはる、ということは無言呪文使用者にとつて最大のアドバンテージです。なにせ相手に何をするか伝えない訳ですから。そこから呪文を使用したただ相手に怒りをぶつけるならば失神呪文で吹き飛ばせばいいのです。ですが私怨と粛清の意が彼にはありました。かつて私の友人が『最大の教育法は飴のタイミングと鞭の強度、そしてほんの少しの恐怖だ』と言っていたことがあります。飴のタイミングは決闘直前のクローター君の忠告、鞭の強度は彼の戦術、そして恐怖は彼の言葉です。粛清の意味を込めて、物理攻撃をした点は人間として合っています。ですので総評として、ウィーズリー君に危害を加えた事と私闘を行ったことについて各二十五点を減点し、彼が人間として出来ていたことと魔法の戦術の組み上げる早さ、それを実行するメンタルを各三十点の加点をし、合計して四十点をレイブンクローに与えました」

とのこと。長つたらしく言ってくれはしたが、フィリップからすればあれはハーマイオニーの報われた努力を馬鹿にしたことを後悔させてやるためである。勿論本人は人間としてできているとは思っていないし寧ろ破綻してるとまである。

結局、ロナルドは次の授業を休んだ。それに対してスリザリンドのラコ当たりがフィリップを囓り立てたが、事事の起承転結を話したところハツフルパフ、レイブンクローが味方に着いたおかげで何も言えなくなった。

ウィーズリー・ツイーンズやその兄のパーシー・ウィーズリーもなにか言おうとしていたが、アリシアの「あなた方は自らの努力を否定されて怒らないのですか？」という言葉に引っ込んだ。

夕飯はやはりレイル達の部屋で食べた。今回は更にトランクの中で談笑しながら食べていた。しかし今回はいつものメンバーに一人増えていた。

「えーっと、どうしようか。私が言おうか？」

「いえ、アリシア様のお手は煩わせません。私が自分で自己紹介しますので」

「あらそう？じゃあお願い」

「わかりました」

金髪の少女はひとつ咳払いをし、真面目そうな顔で自己紹介を始めた。

「今回はこの輪の中に入れていただき有難うございます。スリザリン所属の一年生、ダフネ・グリーングラスです。聖二十八一族のうち、グリーングラス家の長女になります。アリシア様からは幼い頃から良くしていただきました。今後とも長いお付き合いになることを期待します。よろしくお願いします」

レイルやヘルミオネは言葉と佇まいから聖二十八一族であると確信していたが、まさかのグリーングラス家であることに驚いた。ハーマイオニーは何故ここにスリザリンがいるのか不思議でならなかった。アリシアもスリザリンだが。

そして先程から肩を震わせ俯くフィリップとメズールは反応していなかった。ハーマイオニーが起きているかどうか確認しようとするといきなり起き上がって大笑いした。

「な、中々上手いじゃないかダフネ！お父様から叩き込まれたか？ふははははははは！」

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！ダツフィー、練習お疲れ様ー！イメージ付けのつもりなら私たちがいないとこでやればよかったネー！」

「うっさいソコ！アリシア様の前で何か不手際をすれば恥で死ぬのよ

私は！それとフィリップ！お父様を侮辱するならその歯ア全部叩き折るわよッ!？」

「ほら綻びがでたぞ？やっぱり完璧じゃないな！ははははははは！」

「アリスの従者を目指すなら怒りを出さなくらいもつと完璧で瀟洒なになんないとー、まだまだダメBad appleネだネ！あひやひやひやひやひやひや！」

「やっばー一回死ねあんたらアアアアアッ！」

素をさらけ出したダフネはフィリップとメズールを叩きのめすため杖を抜かんとローブの中に手を突っ込んだ。いきなり素を出したダフネに呆気にとられていたレイルは、この小屋でレイルとヘルミオネ以外が杖を出せないことを言えなかった。

ダフネが杖を出そうとした瞬間に何かに杖を取られた。その取られた杖は宙に浮遊し、レイルの手元までやってきた。

「あー、ネクサス。その杖をグリーングラスに返してやってくれないか？」

「仕事したのは、えらい」

レイルが苦笑いし、ヘルミオネが何も無いところを撫でた後、杖はダフネの手元まで戻ってきた。

「え、何、どういうこと？」

何をされたか分かっていないダフネは杖を手にとってもポカンとしたままだった。それが何の仕業によるのか理解しているのはレイルとヘルミオネを除きフィリップとハーマイオニーだけだった。

「デミガイズね。本での知識しかないけど、姿を自由に換えられて、透明にもなれるっていう猿の見た目をした魔法生物。毛皮が透明マントの原料になってるって話ね」

「そのせいで乱獲が行われた哀れな種族。今では保護が広まって数は前ほどまでに戻ってるけどね」

ダフネとアリシアは言われてその存在に気付いた。メズールだけがまだ首をかしげていた。

「グリーングラス、ここでは杖の使用を控えてほしい。薬品とか素材とか結構数あるから、壊れたら後処理が大変なんだ」

「ダフネでいいわよ。後処理が大変って言うけど、例えばどんなのがあるの？」

レイルはどれを見せるか悩んだ挙句、手元にいた蚕のようなものを手に取った。その尻尾を中指にまきつけてスナップをしながら手を開いた。

中の繭が大きく開き、緑と赤の羽の蛇のような顔をした生き物がダフネの顔寸前まで近づいた。それは数秒そこにとどまった後、レイルの掌に戻って行った。

「お、スウーピング・イーヴルの亜種かい？」

「そう。ミローって言うんだけど、こいつの毒は少量でも垂らせば肌が溶ける程に強い。だけど、薄めて使えば調合剤として使えることがわかってる。様々なものに使えるから原種より使い勝手がいいんだ。勿論原種もいるけどね」

レイルはミローを元いた位置に戻した。ダフネは毒の危険性を認識しながらかぼちやタルトを口にした。やはり昼食も夕食もかぼちや尽くしだった。

レイルとヘルミオネが席を外しトランクから出ていくと、やはりフィリップとメズールはダフネを笑った。ついていけなかったハーマイオニーにアリシアは謝りながら状況を説明した。

「置いてけぼりにしてごめんなさいねハーマイオニー。メズールは元々家が近くて、フィリップも幼い頃に私の家の近くに引っ越してきたのよ。子供って好奇心旺盛でしょう？だから同年代の子供と遊びたくなって、お父様が近所の子なら、ってフィリップとメズールと一緒に遊んでたのよ」

「へえー。じゃあダフネは？」

「それは私の家柄。聖二十八一族総督家なんて立場だから、そういう場所にはよく立ち入るの。ダフネはいつも私のボディガードを請け負ってくれたの」

「いい子なのね。スリザリンだからって身構えてたわ」

「聖二十八一族といっても色々あるのよ。ウィーズリーみたいにマグルの人を家に迎え入れるところもあれば、マルフォイのように完璧純

血主義の家だつてある。私やダフネのところは婿嫁は半純血までね」
聞いていて微笑ましかつたり、上流貴族の間柄を見ることが出来る
ような会話だが、その目前で行われていることが些か物騒である。杖
の使用禁止を言い渡されているからというのもあるが、ダフネは拳と
脚を使っていた。

ジャブにストレート、後ろ回し蹴りに果ては踵落としまで。これが
魔法使いのすることなのだろうかどと割と困惑しそうである。

「いい加減当たりなさいよ！」

「当てているだろ？君のチンケな拳を右手で受け止めている。ほらほ
らどうした？両方使えるとはいえ僕の利き腕は左だぞ？」

「人を煽んなきゃ死ぬのかアンタは！アガルタおば様からアンタの性
格矯正頼まれてんのよこっちはアツ！」

「およー？おばさんそんなことしてたのかー。諦めた方が早いっての
にー」

「全くだな」

気付いていないが、ダフネは先程からパンチの度に拳に微量の魔力
を纏わせている。それによってフィリップの目が解析し、どの方向に
どの速度で振るわれるかが分かっているのだ。物理攻撃に魔力を込
めるのは割と高等技術だけあって、ダフネも優秀なのだろう。

結局彼らのじゃれ合いは、レイルが帰ってくるまで続いた。

一方、外に出たレイルは共に来ていたヘルミオネに生気を吸われて
いた。勿論接吻である。

レイルは自分のベッドで休息を入れていた。ヘルミオネは傍に
座ってレイルの頭を撫でていた。この時間が彼女にとって一番幸せ
を感じるものだった。

だがそれは不意に終わることとなる。大広間の扉が勢いよく開け
られた後、悲鳴などが連呼され、その後誰かが爆音を鳴らしたのだ。
防音魔法を施していなかったレイルは当然起き、ヘルミオネは頬を僅
かに膨らました。

「何の騒ぎっ！」

「分からない。行ってみる？」

「そうしよう」

レイルが服を整え、いぎ扉を開けようとする。三回の高速ノックの後扉が開かれ、三人の生徒が顔を出した。一人は割と煽ることに定評がついてきたドラコだった。

「あー、ごめん。急用で。ファイを見なかった？レイブンクローの席にいなかったんだ」

「アリシア様やダフネもいなくなってるんだ。何処か知ってるか？」

「ハーマイオニーもメズールもないの！」

雪崩込むように各々の探し人の名を出す三人。急なことでレイルは少しフリーズしたが、直ぐに意識を戻した。この辺りの順応性は彼らとの生活で鍛えられたのだ。

「ファイ、というのがフィリップの事なら、全員トランクの中に居ますよ」

「トランク!?なんでそんな所にアリシア様が……いや、いい。あの方が安全ならそれでいい」

「マルフォイ、この騒ぎは何?」

過保護なのか、アリシアが無事だとわかった途端に安堵したドラコにヘルミオネが問うた。

「ドラコでいい。君たちは裏切り者の血やポッターとは無縁のようだしな。穢れた血とつるんでるのは余り気に食わないがまあ邪険にしないでもない。で、この騒ぎか?トロールが出たらしい」

「トロール? 知能上昇薬を飲ませてないトロールかホグワーツに入ったのか?」

「どうやらその様らしい。ボクもおかしいとは思ってるけどね。とりあえず、アリシア様をスリザリンに返してくれ。談話室で点呼がある」

「わかった、必ず送り届ける。ヘルミオネ、頼んだ」

ヘルミオネは頷いて、トランクの中に入っていった。レイルはそのトランクを鍵を閉めて持ち上げた。

「ドラコ達も寮に戻って。僕はトロールを処理してくる」

「殺すのか?いくら不法侵入したからって……」

処理という言葉に顔を曇らせたハツフルパフの先輩。レイルはこの人がフィリップの言っていた「セドリック」であると気付いた。「いえ、処理と言ってもトランクに入れるだけです。おそらく山トロールなので高山エリアにでも放っておきます」

「良かったあ。危険でも、殺すのはやだしね」

胸に手を置いて褐色の少女は息を吐いた。以前にメズールが言っていたパチルの片割れだろう。

レイルは人間には反応しない生物探知機を使ってトロールを探した。トランクは認識偽装をしているために反応しない。

「場所は、南東の下？ってことは地下廊下付近のトイレ辺りか」

レイルは加速魔法を自分にかけてその場所へと向かった。途中でハリーとロナルドが何やら誰かを探しに行くみたいなのを言っていたが、レイルはそれを無視した。

壁や天井を蹴っていきながら地下室に付くと、トロールがフラフラと彷徨っていた。まるでそうしなきゃいけないからそうしてる、というような雰囲気をかもしながら。

レイルはトランクの鍵を開け、出口を高山エリアに設定し、口笛でトロールを呼び寄せた。トロールは定評のあるアホ面を見せながらゆっくりと振り向いた。

故郷の匂いと同じようなものを感じたのか、トロールは誘導されるままに入口の広がったトランクの中に入っていった。ちょうどその瞬間、ヘルミオネが姿くらましをしてレイルの隣に立った。

「レイル、先生達が来る」

「なら急いで帰ろう。よろしく」
「任せて」

レイルはトランクを元の形に戻し、左手に持った。これより小さくできるが、やはりトランクの形が一番しっくりくる。

ヘルミオネはレイルの右手をそっと握り姿くらましをした。その数秒後にダンプルドア、マクゴナガル、スネイプ、クイレルが到着した。

彼らは報告にあったトロールがどこにもいないことに困惑し、報告

元であるクイレルの幻覚として処理した。クイレルはやはりオドオドしたままであった。

部屋に戻った二人は鉱山エリアに先程のトロールが居ることを再度確認した。先にいた山トロール達は降ってきたトロールを新たな仲間として迎え入れていた。

トランクを再び閉めて、レイルはベッドへと倒れ込む。急な保護が入ったために神経をすり切らしたレイルは直ぐに夢の中に入ってしまった。

ヘルミオネはレイルが寝たのを確認して、食べるようにはなく、包み込むようなキスをして今月分の生気を補給した。起きているならばともかく、寝ているならば起こすようなことはあつてはならない、と心に刻んでいるのだ。

レイルは世の男どもに背中から刺されそうなことをしている間、意

識を残しながら夢の中に入ってしまった。夢を見やすいのはレム睡眠だが、彼は話すならば意識がはっきりしているノンレム睡眠の方が良かったのだ。

『約一カ月ぶりか。調子はどうか？レイル』

「微妙」

『それはミオがキミの生気を吸ったからだろうか？ボクが聞きたいのはそこじゃない』

レイルの目の前にいるのは一人の少年。髪は白いが、先端になるにつれて青くなっている。瞳は人間ならばありえない紫色である。

少年の服装は白いシャツと黒のズボン、至って単純そうなもので、印象に残りにくいのが印象と言った顔立ちであった。

『キミの精神の調子だ。この世界では精神疲弊も魔力切れもないが、大事なのはイメージなのだろうか？』

「知ってるよ。精神の調子だっけ？良好だよ。君よりかは全然だろうけど」

『食料に困らないな、ココは。妬み嫉み疎みだのなんなの、ボクの糧となるものが多い』

「まあ、ヴォルデモートあたりがマグルを敵視してるからね。美味しい？」

『不味い』

「けどそれしか食べ物がないんだらう？」

『あれを永遠と食べるならまだただ甘ったるくしたみたらし団子の方がいい。セルフサービスの茶で舌を誤魔化せられる』

レイルと少年は訳もなく談笑をする。少年の見た目は高校生かそこらだが、少年はこれでも五世紀後半辺りから生きている。彼の言う別の世界も含めて数えれば千を超える。彼は1968回目の新年を数え終えたところで諦めたらしい。

「でも君の食料はそれらだけじゃないだろうか？美しいものだって」

『いいかレイル。それはダメだ。それを食べるのは、嘗て私が憧れた、私が倒された彼らに対する侮辱だ』

十メートルは離れていただろう二人の距離が、僅か鼻先数センチと

いう所まで近づいた。音もなく、風もなく、足元を一ミリだけ満たす水に波紋さえ出さずに、確実に瞬間移動してレイルのそばまで来た。これだけで、この行動だけで彼がどれだけ規格外かをレイルは再確認する。

『私はその世界で、糞を下水で煮込んだような性格をした花の魔術師のおかげで世界へと追いつ

出された。そこではアヴァロンの塔にはないだろう美しいものがあったのだ。刃を打ち合わずに悪を討ち、血を流さずに答えに辿り着く。彼らという存在は私にとって多大な影響を及ぼした。勿論いい方向にだ。そんな彼らを形容すべくして生まれたと言ってもいい「美しき」を私の糧にするなど、無礼千万もいいところだ』

レイルは何も言わない。彼の言っている「あの世界」というものを知らないし、以前の彼も知らない。先祖であるヘルミオネ・クロウターにも教えていない故に、知っているのは彼のみとのこと。

それに対して口を刺すのは、彼の言う「あの世界」の部外者であるレイルでは役不足である。少年が言った「彼ら」ならば或いは、と考えてしまおうが、ここに居るのは自分一人である。「彼ら」の力は借りられない。

「ごめん、無神経だった」

『……いや、ボクの方も素を少し出した。ここは互いに流そう』

少年はそう言うと、レイルから少し離れた。先ほどよりも少し近い5メートル辺りの距離だ。

レイルはその様子に少し口角を上げると目を閉じた。この空間は少年が作っているようなもので、ノンレム睡眠からレム睡眠に移行できる。

レイルは数秒もせずここから光となって消えていった。少年もそれを見届けてからこの場を去った。

君を孤独から救いに来た

クリスマス休暇なるものがあつたが、基本的にレイルがすることは変わらなかつた。朝食を食べ、トランクの住人達に餌をやり、昼食を食べ、トランクの住人達に餌をやり、夕食を食べ、ヘルミオネに生気を与え、眠る。気がつけばあれよあれよと休暇が終わっていた。

レイルは校内を歩いていた。校長室から出てきたばかりである。

ようやくと賢者の石の罫の改良案が纏まつたのでダンブルドアに提出しに行ったのだ。合言葉は変わらず「ピーナッツバター」だった。ダンブルドアからの了解と許可を得たので改良を始めなければならない。ひとまず罫はこうなつた。

三頭犬——フラツファイに知能上昇薬を飲ませ、地形を三頭犬が一番戦闘しやすいものにする。扉はフラツファイの背中に移動する。

悪魔の罫——感覚麻痺、目眩など体に異変はないが意識に異変がありすぎる植物を置く。ビリーウィグとスウーピング・イーヴルを放す。

空飛ぶ鍵——鍵の数の増量、並びに全ての鍵をトラバサミに変形させる効果を付与。ちぎれるまで離さない。

チェス——相手のターンを待たない「意思を持った駒」達による一斉攻撃。王が壊れるまで再生する。どんなに小さなミスでもやらかした瞬間に全ての駒が裏切る。

トロール——反射魔法をかけた鎧を着せる。武器も棍棒から鉞に変更。中のトロールが死んでも鎧が動く。

魔法薬クイズ——正解しても外しても焼かれる。水増しして消えうとしても消えない。

みぞの鏡——そもそもそこに賢者の石を置かない。レイルが所持しておく。

かなり鬼畜難易度だが、レイルからすればヴォルデモートの全力排除を目的としているならばあれぐらいなど生温いし、今回改良する罫の案もまだまだ足りなさすぎるのだ。

欲を言えば三頭犬を分霊箱にしたいし、悪魔の罫も一つ吸えば即死する魔法薬草を置きたい。チェスも最初から全部敵にしたいし、トロールじゃなくてズーウーにしたい。

しかし、自分だけが出入りするならいざ知らず、どこからか話を聞きつけたハリーとロナルドが入ってくる可能性があるるとダンブルドアに示唆された。レイルは難易度を落とす他なかった。

(同級生のお守りまでしなくちゃならないとは、あの老害は何を考えている?)

「言うなよネイキッド。こつちだつて参つてるんだ」

(ヘルミオネに吸われてる時の方が体力使うのにか?)

「ヘルミオネは僕の大事な家族だ。だからいいんだよ。ポッターとウイーズリーは他人だろ?」

(そうだな。しかもレイルとは比べ物にならないくらいに要らない子だ)

「相変わらず辛辣だなあ……」

レイルは胸ポケットに忍ばせている一匹の蛇と対話していた。レイルは蛇語使いではないが、彼とならば人語でも話せるのだ。

ネイキッドと呼ばれた小さな蛇はテレパシーを持つシリンドミッションという個体の雄だ。閉心術の効かないテレパシー故に、剥き出しネイキッドと名をつけた。

彼らはトイレに向かっていた。ただのトイレではなく、女子用で、使用されていない、しかもゴーストがいるトイレである。

以前にホグワーツの地図を作ってもらった時に、ある一定の場所で途切れていたのだ。ネズミたちに訳を聞けば、それ以上先にはある化け物がいて、そこから先は行けないのだと。

その場所こそが、3階の使用禁止トイレ。レイル達の目的地である。

「しかし、何がいるのやら。食べられたのが主に蛙や鼠ということは、化け物は蛇なんだろうけど」

(だから私を呼んだ、と?)

「でなきや意思疎通が出来ないだろう?」

(そうだがな。仕事をしたんだ、報酬はきっちり貰うぞ)

「分かってるよ」

レイルはネイキッドと彼の息子たちのことについて話していると、気づけばトイレに着いていた。やはり身内との会話は何物にも代えられないものがあると再確認した瞬間だった。

レイルは化け物が下水道の配管を通れる大ききだと仮定して、まずは手洗い場のあたりを探し始めた。が、やはりそれと言って特別なものはない。

特別な何かとは言い難いが、蛇口の取手に蛇が施されていた。探している動物ではあるが、レイルの探しているのは生きているものだ。「ねーアンタ。なんでこんなところいんの？休日だけど、使用されてない女子トイレに来てもの探しとか趣味悪いよ？」

不意に後ろから声があった。まだまだ若い、しかしわかる人にはわかる生気のない声だった。

振り返ってみれば、宙に浮かびながら仰向けになるおさげの眼鏡をかけた女の子がいた。レイルはこの子が嘆きのマートルであると確信した。

「趣味が悪いのは知ってるさ。トランクの中にスウーピング・イーヴルやズーウーを放し飼いにしてる奴が趣味がいいなんて言えないしね」

「え、ほんとに？こいつまじか」

まさか出てくるとは思わなかったマートルは一瞬でレイルから離れてトイレの個室まで後退した。言葉だけなら「またまたあ」と茶化しもできるが、タイミングよく、マートルからすればタイミング悪くズーウーの唸り声がレイルの持っているトランクから聞こえたのだ。「……いやまあ、アンタの趣味は分かったけど、一番初めの質問に答えなさいよ？なんでここにいんの？」

「そう言えばそうだったな。ある動物を探している。蛇なんだがな」

「あらそう？蛇なら蛇口の取手に付いてるじゃない」

「それは銀のだろう？僕が探すのは本物の……」

レイルはそこで留まった。マートルが「え、なになに。急に黙らな

いでよ」とか言っているが耳に入っていないかった。

その鼠のいう化け物が、下水道を通れる大きさだと仮定した。そこから1度はオカミーであると思った。

オカミーは入る穴の大きさに対して自らの大きさを変化させる特性がある。それなら蛇口から出入りできると考えたからだ。

だがもし、その化け物に人間との交流があつたならば。その存在を秘匿するため、その者にしか扱えない言語ならば？

「ネイキッド」

(何だ?)

「ちよつと、この手洗い場に向かって「開け」って言ってくれないか」
(構わないがな……「開け」)

ネイキッドがテレパスではなく自分の口で開け、と言ったことで、蛇口の取手の蛇は僅かに目を光らした。ズン、と重い音がした後、多くのブロックに割れた手洗い場の下に下水道が現れた。

「あー、ヤバイ。トラウマが再発してきたあ……」

「トラウマ？」

「アタシ、ここで殺されたのよ。なんでかは知らないけどね。いじめられっ子だったから、その個室でいつも泣いてただけどね。けどある日、誰が入ってきたのよ。何か言ってたけど、当時は外国語だと思ってたわ。それでさっきの手洗い場が変形する音が聞こえたの。鬱陶しくて『邪魔。出てって』ってことを伝えようとしたら……」

「ポックリ逝った、と」

「そういうこと。まさか蛇語だったとは……」

マートルは長年の謎が解けたようで、先程からトイレを右往左往している。レイルはそれに一瞥してから、開いた手洗い場を見た。

トランクの中からミローを出して、尻尾を指に括りつけずに放す。

狭いとはいえ久々の外に、かなりミローは上機嫌なようであった。

「……ほんとに居たよスウーピング・イーヴル。しかも亜種個体って。ほんとに興味悪いわね」

「お褒めに預かり恐悦至極。じゃ、行こうか」

「行ってらーい」

気怠い見送りを貰いながら、レイルはトイレを反時計回りに回るミローの背中に飛び乗った。ネイキッドがテレパスで指示を送り、ミローは下水道に突っ込んで行った。

下水道の本管に到着したレイルはミローをトランクの中に戻した。勿論お礼替わりの食料も忘れない。ミローには常日頃からお世話になっていてため、他と比べてほんの少しだけ優遇してたりする。

しばらく歩いていると、大きな扉があった。ヒュドラが造形された扉で、やはりこれも蛇語で開ける必要があった。

ネイキッドに頼みまた開けてもらおうと、その奥に大きな部屋があった。ある意味神秘的で、そしてある意味不気味な部屋だった。

奥に続く八対の柱、誰かを意匠しているだろう巨大な顔。そしてとぐろを巻いて寝る巨大な蛇がいた。

レイルはわざと靴底を鳴らすように歩いていく。僅かに足元が水に濡れているせいか、水の跳ねる音と靴の底が鳴る高い音が部屋に響いている。

「ネイキッド、同時翻訳で頼む」

(了解。オーダーに応えよう)

ネイキッドはレイルの胸ポケットから方へと移動する。何故かレイルのトランクの住人達はレイルの肩に居たがる。

「蛇よ。聞こえるか」

レイルの言葉をネイキッドが聞き、テレパスで蛇に伝える。蛇はネイキッドのテレパスにとろい動きで起き上がった。

蛇の体軀はレイルの身長を軽々と越し、ついには天井に当たろうという所まで来た。深緑の鱗、巨大な体軀、黄色の目から、レイルはそれがスリザリンの怪物、バジリスクであると予想した。

「起こして済まない。だが僕は貴方に話をしに来た」

『何用だ、小さき者よ。汝が我が主の継承者ならば話を聞こう。そうでなくとも、妾に意志を示せば、その話を聞いてやらんことも無い』

レイルはバジリスクが雌であることに驚きつつ、話を進めようと彼女の鼻を見た。目を合わせれば殺されると言われるバジリスクには、これが一番話しやすい目線の位置なのだ。

「僕は継承者ではない。主というのはサラザール・スリザリンなのか？」

『左様。我が主、サラザール・スリザリンはいつか来る継承者の訪問のその時まで妾をここに眠らせたのだ』

レイルはその言葉に、継承者がここを通るには蛇語使いである必要があることを見出した。ならばマートルが殺された時に、一度この場所が開かれている事になる。

『今から四十九年前、一人の男がここにやってきた。僕こそがスリザリンの継承者である、と』

「その時に、マートルを殺したのか」

『あの女生徒には悪い事をした。妾は無益な殺生は好まない。それは私の敬愛せし主もまた同じこと』

レイルはその言葉に疑問を覚えた。純血主義の先駆者であるサラザールがそんなことを思うとは思えなかったのだ。

『主はマグルを恐れていた。数ではない。文明の力を恐れたのだ。93年という大昔に何を恐れたかと言われれば、マグルとの共生を試みた未来を見たのだ。主は予言にも秀でていた。故にほんの興味本位であったが、もしヘルガ・ハツフルパフのいう共生した未来を見たのだ』

「……その未来は？」

『いいとはいえない。寧ろ酷すぎる。ただ魔法が使えるからと言って奴隷化し、それをどこでも容認している。主が生きていた頃でさえ魔法族はマグルに捕えられ、殺されるのが日常であった。そのころよりも酷いと主は言った』

「……だから純血のみを受け入れ、魔法族がちゃんと世間から消えた時にマグルを受け入れる」

『それが今の世に伝わるべきだった純血主義だ』

いくらなんでも拗れて伝えられすぎだろうとレイルは思ったが、当時の製紙率、また教育が行きとどっていない世の中では言葉などはどこまででも変わる。サラザールが本当はいい人であった、というのは今のスリザリン寮の偏見もあり、捻られてしまったのだ。

『49年前にこの部屋を開いた、自らを継承者と称する小僧は純血主義の根本を理解していなかった。それどころか奴はマグルや半純血を皆殺しにするとまでほざいた。妾は命を削って全力で反抗した。妾の寿命をすり減らし、命令を受けつけないように体を改造した』

「……あと、何年生きられる?」

『このような老耄を心配する人間がいるとはな……。恐らく百年も残ってはいまい』

レイルはネイキッドを介して話すバジリスクにとてつもない情を抱いてしまった。本来ならばここで殺すべきだろう。

だが、レイルは人間を除く全ての動物達の味方だ。それは例え、這いよる混沌であろうが、バジリスクだろうが関係ない。

「ネイキッド、翻訳お疲れ様」

(いいのか、レイル。蛇語使いではないのだろうか)

「いいよ。ここからは、俺の意思を示したい」

レイルはネイキッドをトランクの中に入れた。拡大呪文を起動させ、トランクの入口がバジリスクでも入れるようにする。

レイルはしっかりと、確固たる意思を持ってバジリスクに近づいた。バジリスクは少し後ずさりしたが、やがて動かなくなった。

「……俺が、君の運命を変えてみせる。もう誰も殺させない」

レイルはバジリスクの鼻先をそつと撫でた。数秒かけて、傷を癒すように、割れ物を扱うかのように。

彼にカウンセリングの才能はない。レイルにバジリスクの思いを理解することは、到底出来ないだろう。

だが、それでも、レイルはこのままバジリスクが死んでいくのが不憫でならなかった。

「君の目を少し弄って、その魔眼が発動しないようにする。けどいつもここに来る訳には行かない。だから、トランクの中に入れてくれ」

レイルはバジリスクから離れ、トランクの方へと後退する。バジリスクは惹かれるように、レイルのスピードに合わせてトランクへと這いずって行った。

「サラザール・スリザリンのように、君を完璧には理解できないだろう

けど、それでも俺は、お前を救いたい」

俺、お前。一人称と二人称が元の喋り方になるぐらいには、自分でも不思議になるくらいにレイルはバジリスクを救いたかった。もしもう一度継承者を名乗る者がいて、またホグワーツで殺しを始めたら、バジリスクはもう耐えられない。

命を賭して反抗して、それでもし彼女が死ぬのは。

それはとても、報われない。とレイルは思った。

バジリスクはレイルをじっと見た。もちろん殺さないように体をだ。

少しだけ筋肉質な、丈夫な体。その体が、バジリスクにはほんの少し大きく見えた。

やがてバジリスクは敬意の証としてレイルに向かって一礼し、トランクの中に入っていった。それを見てほっとしたレイルはトランクを元の形へと戻した。

レイルが自室へ戻ると、やはりヘルミオネが待っていた。自分の家ではないが、家族が待っているというのはやはり何物にも代えられないものだ。とレイルは再確認する。

ヘルミオネは「お疲れ様」とだけ耳元で呟き、ホットココアをテーブルの上に置いた。流れるようにヘルミオネはレイルの安否を確認するように優しく抱きついた。

自分で感じるよりもかなり疲れていたレイルは体から力を抜いてぐでつとヘルミオネに寄りかかった。ヘルミオネはしっかりと力を入れて、でもレイルに痛みが加わらない程度の力で抱きしめた。

「何かあったのね」

「ああ、マートルのいるトイレから秘密の部屋に行ってた。バジリスクがいたんだ」

レイルは一応防音呪文を施してヘルミオネに全てを話した。スリザリンの怪物の思いと、それに対して自分がどうしたかを洗いざらい。

話し相手がフィリップやアリスならば全ては話さなかっただろうが、ヘルミオネならば別である。

話し終わったレイルはいつの間にか浮遊呪文をかけられ膝枕されていることに気がついた。杖を抜いた気配も呪文を唱えてもいないが、ヘルミオネは人間ではない。その位はどうということはない。

「そう。バジリスクには名前をつけるの？」

「ソリダスが聞いてきたんだけど、フィリア・レギスっていう名前があるらしい」

「filia regis……安直でも、いい名前」
姫

「サラザールはセンスがいいね」

レイルはこのまま眠ろうか、と思いい地面に立ち、トランクを開けようとした。だがその瞬間に勢いよく扉が開けられた。

「ドラコ？」

「クローター……は、いるな。お楽しみ中でなくてよかった」

レイルはトランクを閉めてドラコに椅子を出した。ヘルミオネは魔法でホットココアを一杯入れてドラコに持たせた。

「ありがとうデイマイント。それで、話なんだが……」

「ドラゴンを、保護してくれないか？」

任務遂行

ドラコの訪問と依頼、そしてドラコの態度から見てかなり面倒な部類だとレイルは憶測をつけた。ヘルミオネは何も言わず、レイルの左後ろで背筋を伸ばして立っている。

「ウィーズリーとポッター、そしてグレンジャーがああ森番の家に向かっていくのが見えたから防音呪文と認識阻害魔法をかけて後をつけたんだ。結果は黒、ドラゴンの卵があつたんだ」

「……なるほど、確かにドラゴンキーパーでもない人間がドラゴンを所持、飼育するのは違法か。にしてもよく気づかれなかったな？」
「キミ達に勝てずとも負けたくなくてね。ダフネと一緒に頑張って勉強してるのさ」

ドラコはフンと鼻を鳴らした。しかし咳払いし、その雰囲気を変えに戻した。依頼の席で話すことではないと悟ったからだ。

「……まあ、無理やり取るのも億劫だな。ハグリッドには然るべき場所に行ってもらって、僕はそのドラゴンを保護しよう。卵の特徴は分かる？」

「そこまで大きくない。ちょうどボクが抱えられるぐらいだ。模様は白に灰色の斑点」

卵の特徴を聞いてレイルは冷や汗が出るのを感じた。ホットココアを口に含んで心を少しだけ落ち着かせる。

「マズいな。ノルウェー・リッジバック種だ」

「はあ!? リッジバックといえば、炎を吐くのが一番早いドラゴンだろ? 森番は本当に何を考えてるんだ!？」

「これ以降はハグリッドの意思を無視することにしよう。いくら何でも危険すぎる」

レイルは机から羊皮紙と羽根ペンを取り出した。ヘルミオネも同じように羊皮紙と羽根ペンを取り出して物凄い勢いで何かを書き始めた。

ドラコが困惑して数秒、レイルの部屋に次の客が現れた。ドラコの

話にもでてきたハーマイオニーである。

「……マルフォイがここにいるのはいいとして、レイル、力を貸して欲しいのだけど」

「ノルウエー・リッジバックだろう？ 今対策してる」

「え、なんで知ってるの？」

「ボクがクローターに頼んだのさ。ドラゴンを保護してくれってな」

ハーマイオニーは現場を見られていたことに不味いことがバレたような顔をすると同時に、既に対策が取られていることに安堵していた。一緒にいた二人には悪いが、ここは身の安全を取るしかなかった。

「ところでレイルにヘルミオネ、貴方たち何書いてるの？」

「嘆願書。魔法生物規制管理部の部長宛にノルウエー・リッジバックの保護許可を貰うために書いてる」

「私は、ゼノにダンブルドアを黙らせて欲しいって手紙」

ハーマイオニーは魔法生物規制管理部に連絡するのは分かったが、ヘルミオネのいうゼノという人物に手紙を当てる意味が分からなかった。しかし以前にゼノに認識があつたドラコは理解した。

「なるほど、確かにゼノおじ様ならあの校長を黙らせられるか」

「どういうことよマルフォイ」

「彼女の家さ。デイマイント家は代々アズカバン並びに魔法界の観測を生業としている。ゼノおじ様はアズカバン監視塔現当主なんだよ」
「ハグリッドが監獄に行くなら、ダンブルドアは絶対に噛み付いてくる。だから黙らせる」

「アズカバン……？」

初めて聞く単語にハーマイオニーは首を傾げる他なかった。嘆願書を書き終えたらしいレイルは椅子を百八十度回転させて教えた。

「アズカバン刑務所、北海に魔法で建てられた魔法使いにとつて絶対に行きたくない場所。光なき監獄。まあ、マグルの方にもあつただろう？ バスティーユ牢獄とか」

「……それ、ロンやハリーも食いついてくるんじゃない？」

「罪を犯して隠す方が正しいなんて思ってる奴なんかほっとけばいい

んだよ」

「グレンジャー、君は許されざる呪文を使って「使いたかったから使った」とか言って挙句の果てにその事実を隠蔽しようとするバカを擁護できるのかい？」

「ゴメンなさい、ムリだわ」

レイルの辛辣な言葉とドラコの正論にハーマイオニーは折れるしかなかった。ヘルミオネも書き終わったのか、ひとつの封筒に入れた。

「ドラコは君の父親に「上手く行けば飛ばせますよ」と伝えておいてくれ」

「それは別に構わないが、何故？」

「悪いがそれは機密事項だ。よろしく頼むよ」

レイルはそれだけ言ってトランクの中に入っていった。ヘルミオネは封筒のみを姿くらまして飛ばしたらしく、手には何も持っていなかった。

ドラコとハーマイオニーはひとまず寮に戻った。ハーマイオニーは以前フィリップに貰った幻の生物とその生息地でノルウェー・リッジバックの危険性を理解し、ドラコは梟に手紙を貼り付けて父親のルシウスに送った。

レイルはクロエに頼んで魔法生物規制管理部、ドラゴンの研究及び制御室のトップに座るメーラン・エルリックと管理局局長のフロー・ベアリングに手紙を持っていくように頼んだ。意思疎通役にネイキッドの息子であるヴェノムも連れていった。

数分後にクロエとヴェノムは二人を連れてきてくれた。やはり角水蛇は便利だと思った瞬間であった。

「こんばんは、メーランさん、フローさん。お忙しい中、呼び出ししですいません」

「いや、レイル君にはいつもお世話になってるからね。これくらいはどういうことは無いよ」

「私はフロー局長と違いそこまで忙しい訳では無いですが、ノルウェー・リッジバックともなれば即座に対策することが要求されま

す。無駄話もなんですし、早速本題に入りましょう」

レイルは頷いて、魔法で紅茶を入れながら話をすることにした。メーランはやはり魔法生物管理局にいるせいかな、近くを魔法生物が通るとそちらに目移りしそうになっていた。

「本件は、ホグワーツ魔法魔術学校の森番であるハグリッドが不法飼育をしているとの事だったが、それで違くないかね？」

「違いありません。不法飼育というより、これから産まれてくるので不法所持ですが」

レイルはドラコからの情報をできるだけそのまま伝えた。ハリーやロナルドのことはもちろん、ハグリッドのこともそのまま。

「問題は卵の大きさで、同級生のドラコ・マルフォイからの情報によれば、彼がちょうど抱えられる位の大きさらしくて。それに斑点付きということとは恐らく刷り込みが必要な個体かと」

「一年生が抱えられるほど……となると、孵るのは早くて明日ですね」「非常にまずいな。特令を出す他ないだろう。レイル君、羊皮紙とインクはあるかね？」

レイルは呼び寄せ呪文で羊皮紙とインクをフロアの前まで来させた。フロアはそれにひとつ頷いて、杖を振った。

『私、魔法省魔法生物規制管理部部长フロア・ベアリングの名の元に、魔法省魔法生物規制管理部部长フロアの研究及び制御室室長メーラン・エルリック並びにホグワーツ魔法魔術学校レイブンクロー寮所属レイル・クローターにノルウェー・リッジバック種の保護、及びホグワーツ魔法魔術学校森番ルビウス・ハグリッドの確保を命ずる』

すると甲高い音が鳴ると同時に紙はただの羊皮紙から特令書に切り替わった。それをフロアの手からメーランに渡ると同時に天井の扉、すなわちトランクがノックされた。

レイルはそれに3回ノックし入出許可の意を伝えると、1人の老人が入ってきた。

「ほっほっほっ、楽しそうじゃの。儂も混ぜてくれんかの？」

「これはこれは、ゼノ様。いつもアズカバンの監視、ご苦労様です」

「うむ、何やら新たに入監したい輩がおると可愛い孫娘に聞かされた

のでな。監視塔から出て運動替わりに来ようと思った次第じゃ」

「久しぶり、ゼノおじさん」

「うむ、久しいなレイル。挨拶は大事だと教えたが忘れてはおらんよ
うじゃな」

突如現れたゼノにフローは席を立って頭を下げた。ゼノはレイルの頭を撫でながら、空いた席に座った。

「さて、ルビウス・ハグリッドだったかの。巨人族とのハーフ、アルバス・ダンブルドアの懇意でホグワーツに身を置く、悪い言い方をすれば寄生虫。その投獄じゃったか」

「うん。頼める?」

「当然じゃろう。我らは自然の体現者じゃからな、ミオの願いなくとも確りと仕事を果たそう。儂よりも若いのが、あんな頭も回らん老耄を黙らせるなどわけないわい」

「ダンブルドアは味方やシンパは多いが、当然アンチも多いですし、それをどれだけ使えるかですね」

「ドラコにルシウスさんへ「上手く行けば飛ばせる」と伝えるように言ったので、恐らく聖二十八一族はこちら側に着くかと」

レイルは新しい紅茶を淹れてゼノに出した。ゼノはその言葉と紅茶の味に頬を緩ませた。

その後はハグリッドの禁固期間、ダンブルドアの処理、ドラゴンの保護法などを考えながら終わった。ドラゴンの保護の決行は明日にも行われることになった。

そして翌日。レイルとフロー、メーラン、ゼノ、ヘルミオネの五人はハグリッドの小屋を尋ねていた。部屋にはハグリッドとハリー、ロナルドがいた。

一応部屋を探してもドラゴンの卵は見当たらない。どうやらハグリッドが隠したらしい。

「こんにちはミスターハグリッド。いい天気ですね」

「あ、ああ。確かにそうだな」

メーランが当たり障りない笑顔で呼びかけると、ハグリッドは頬を少しだけ痙攣させながら対応した。何かを隠してます、と顔に書いて

ある程に態度に出ている。

その隙にヘルミオネが自分の気配を完全に消して小屋の中に入っていた。気付くのはレイルだけである。

ヘルミオネはひとまずありとあらゆる影になりそうな場所、引き出し、屋根裏を確認した。しかしどこを探してもドラゴンの卵は発見できなかった。

そこでハリーが透明マントを持つている可能性に気づきハリーの記憶を垣間見た。結果は黒、どうやら後ろで持っているものがそうらしい。気付かれずに卵を回収したヘルミオネは透明マントのみをハリーに返して卵をレイルに渡した。

「メーランさん、もういいですよ。回収完了しました」

「ご苦労様です。ヘルミオネさんもありがとうございます」

「これくらい、大丈夫」

「ん?…:…なっ?!?それは俺のドラゴンの卵だ!なんでお前が持つちやるんだ!?!」

ハグリッドは自分の大切な卵が奪われたと気づくや否や、取り返そうとレイルにつかみかかった。だがそれはヘルミオネの無手無言呪文に阻まれて失敗した。

「…:…確かに録音しましたよ、ルビウス・ハグリッド。自己紹介でもしましょうか。私は魔法省魔法生物規制管理部ドラゴンの研究及び制御室室長メーラン・エルリック、私の左におりますのは魔法省魔法生物規制管理部部長フロー・ベアリング、そして後ろにいるのはアズカバン監視塔の現当主、ゼノ・デイマイント様です」

「以後見知りおけ」

「こんなボンクラの自己紹介いるかのう?」

メーランとフローの所属を言われてもまだ冷や汗をかく程度で済んでいたが、ゼノの名前を出された瞬間に目を見開いて口を開閉させた。ボンクラなんて言っているが、ゼノの力はダンブルドアでも敵いはしない。

「こちらで匿名にドラゴンの卵の不法所持をしているという報告がありましたね。確認するまでもなくありましたね。アズカバン送りに

なつて頂きますよ。一応裁判にはかけられますが、ルシウスさんを始め、ゼノ様が既に手を回しています。それに先程、年端も行かない少女に手を出そうとした場面もしかと見届けました。暴行未遂、そしてドラゴンの不法所持、禁固何年になるでしょうかね？」

「俺は悪くねえ！ドラゴンと一緒に生活するのが夢だったんだ！好きなやつと一緒にいて何が悪いんだ！」

「許されざる呪文を使って「使いたかったから使った」なんて抜かすアホを捕えないわけがないでしょう？つまりはそういうことですよ」

レイルはまさかドラゴがハーマイオニーに言った説得材料が現実言われてしまうとは思わなかったので少しだけびくりした。メーランの言葉に反応したのはやはりというかロナルドだった。

「だったらこいつもそうだろう！前にハーマイオニーにドラゴンを七体もトランクに入れてるって聞いたぞ！」

「お言葉を返すようですが、レイル君は魔法省の許可を持っています。彼の体質もそうですが、トランクの中という外界に被害を与えない場所なれば安全だと認可しました」

ロナルドは何も言えなくなり、歯を食いしばり手を握り締めるだけであった。ハリーは何が何だかわからなくなっていた。

「の、ノーバードはどうするんだ！まだ孵っちよらんが俺が居なけりゃ死んじまうぞ！一人ぼっちにする訳にはいかねえ！」

「だからレイル君に依頼したのですよ。そのドラゴンの保護を。特令書も出ています」

メーランはフローが羊皮紙とインクで作り上げた特令書をハグリッドに見せつけた。ハグリッドは顔に絶望の色を乗せていた。

レイルは腕のあたりが揺れることに違和感を感じて卵を見てみた。すると僅かながらヒビが入り、もう一度揺れるとヒビは卵を一周した。

「あ、マズ」

レイルは今トランクを持ってきていない。さすがに早くても今晩だろうと踏んでいたからだ。それがこんなに早い時間になるとは思っていなかった。

ヒビが一周した卵は音を立てて割れ、中から出てきた小さな影がレイルの胸に張り付いた。影は素早く移動してレイルの肩にしがみついた。

即ち、ノルウエー・リッジバック種の雛。しかも最悪なことに、彼女は刷り込みが必要な個体である。

「……なんで。なんで僕に懐いたやつは皆して肩に乗りたがるのさ」

「下りれる？この子」

「筋肉がまだ未発達っぽいし、部屋まではこの状態で行くよ」

「……分かった」

ヘルミオネは不機嫌であった。レイルには分からないが、表情ではわからないが不機嫌な気がしたのだ。

一先ず懐いてしまったドラゴンを肩から胸の方に寄せ、指を近づけてみた。防衛本能こそあれど、まだまだ甘えたりなのか、指をチロチロと舐めた。

ハグリッドは既にゼノが連行したらしくここにはいなかった。帰ろうという時に、ハリーがヘルミオネに問うてきた。

「ねえ、ハグリッドってそんなに悪いことをしたの？特令書が出されるほどに」

あまりレイル以外と喋るのが好きではなかったが、皆が英雄と持上げる人間なので、仕方なしにヘルミオネは答えた。レイルと触れ合える時間が減ってしまったので少しだけ不機嫌になりながら。

「ドラゴンの飼育には魔法省の許可、それとドラゴンキーパーって資格がいる。レイルはいいけど、ハグリッドはどっちも持ってなかった」

「けど、危険と言ってもドラゴンだろ？ダンブルドアがいれば……」

「あの子はノルウエー・リッジバック、誰よりも火を噴くのが早いドラゴン。誰かが危険になってからじゃ遅いの」

「……でもー」

「でもも何もない。あなたは身近な人間が人殺しをして、それでも一緒にいられる？殺されたのがそのウィーズリーとかでも」

ハリーは反論する気が失せたのか、俯いてしまった。ヘルミオネはアフターケアも何もせずにレイルの方に駆けて行った。

レイルはハリーとロナルドとの関係性が劣悪化したが、ロナルドは元々いい印象を持たれていなかったし、ハリーも本人がそこまで強いわけじゃない。なんならズーウーをけしかけてやれば普通に倒せる相手であったので別にどうでもよかった。

そんなことよりもレイルの意識はドラゴンに向かっていた。このドラゴン、刷り込み持ちのせいで、レイルを親と認識してしまったらしい。

ドラゴンは基本的に本能で親を認識する生物だが、ごく稀に刷り込みが必要な個体が出現する。それがこのノーバードなんてセンスのない名前と呼ばれていたドラゴンの名前らしい。

「翼があるのに翼無しって、馬鹿なんだろうか……」

「雌だし、少しいじってノーベルタは？」

「いいねそれ、採用」

その後のことはゼノ、フロー、メーランに任せた。ゼノは恐らく禁固十八年になるとだけ言っていた。

レイルはひとまずノーベルタと同じノルウエー・リッジバック種であるノーバジルに任せて眠りについた。

ダンブルドアは、後悔していた。まさかレイルがハグリッドを追放するとは思わなかったからだ。

急ぎ支度をし、アズカバン監視監視塔内にある法廷に向かった。途中で大量の吸魂鬼が邪魔をしてきたが、なんとか守護霊呪文で切り抜けてきた。

しかしダンブルドアが到着した時にはもう遅かった。ハグリッドが投獄され、ダンブルドアが真ん中に経つその光景は新たな罪人が断頭台に到着したかのような雰囲気醸し出していた。

「ダンブルドア、吸魂鬼による熱烈な歓迎はどうじゃった？」

その向かいに立っていたゼノは私はやってませんよ、的な空気でダ

ンブルドアに話しかけた。悟られぬように閉心術を自らにかけた。

「こんばんはゼノ、できれば二度ともらいたくない歓迎じゃった」

「懸念しているんじゃないだろうが、儂は何もやっとならんよ。全ては彼らがやった事じゃ」

そう、今回ダンブルドアに吸魂鬼をけしかけたのはゼノではない。基本的に吸魂鬼は自らが嫌う存在を共有する。

ヘルミオネが嫌いなダンブルドアが皆の嫌悪対象となり、襲われただけなのだ。理由を聞かされても納得も理解も出来ないだろうが、ヘルミオネに嫌われていることを悔いた方がいいかもしれない。

ヘルミオネは何故か吸魂鬼に好かれやすい体質な上、確かにヘルミオネが嫌っていることを話していることは事実だが、吸魂鬼全員はもちろん、ゼノ自身もダンブルドアを嫌っていることもまた事実だ。他の吸魂鬼がダンブルドアを嫌う理由は、ここに来る用事が全て餌がここにいる期間を短くすることのみ。

「そして聞くな。なあダンブルドア、いつ貴様に我の名を呼ぶ権利を与えた？」

「これは済まぬ。老いると記憶力が無くなっていくのはどうやら本当らしいの」

「……」

ゼノが彼を嫌う理由は、愛する孫が彼を嫌うだけではなく、その在り方が気に食わないのだ。予言を信じ、自らが思うようにことが運ぶと本気で信じている。

その上誰にもそれを打ち明けず、ただ味方を作ろうとしているものばかり。正直に言つて吐き気が止まらない。

「……ソリダスは勿論だが、我の前で閉心術を使うとはいいい度胸だな。貴様の過去を欠片も残さずこの空間に映し出してもいいのだぞ？」

「……やめとくれ、そなた等がここを出てはどのにも出来なくなる」「何故貴様が懇願する？我が契約を結ぶはイギリスを初めとしたヨーロッパ諸国だ。そこに貴様の署名などなかりに凶々しくも願うか？」

レイルから「一番相手の心に入り込めるから」と言つてゼノに貸し

出したソリダスはダンブルドアの奥まで見てからずっと興味のない顔をしている。だがこれが主のためになるならば、と一先ずはゼノの肩に留まっている。

「まあ、儂らにとつて魔法界の未来などどうでもいいがの。ところで、何故こんな辺境の地まで来たんじや？まさかまた減罪交渉に来たのではあるまいて」

「……」

「沈黙は肯定と受け取るぞ？いつも儂らの餌や仕事を取りおつてからに。貴様の生氣など泥水の方がまだ美味しく感じるのな、磔10分か、記憶を貰うか好きな方を選べ」

「……はり、くうっ!？」

杖など不要と言わんばかりにゼノはダンブルドアに磔の呪文をかけた。ここにいる全員がダンブルドアにもつかず闇の勢力も興味が無い中立派のため、この処罰に誰も不満はない。世界最高の魔法使いだろうがなんだろうが罪を犯せば裁くのがこの場所だ。

きつちり十分間、磔の呪文を受けたダンブルドアはそのまま帰って行った。

「いつも本当にごめんなさいデイマイントさん、今回はありがとうございます」

「うむ、感謝の言葉こそ儂の最大の癒しよ。してアメリカ、禁固十五年じゃったか、儂の目論見より三年早く釈放するその意を教えてはくれんか？」

ゼノは振り返りながら、頭を下げる魔法法執行部部長であるアメリカ・スーザン・ボーンズに問うた。アメリカは頭を上げて、しっかりとした態度で答えた。

「はい。確かに私も十八年でもいいと思いましたが、暴行に関しては未遂なので。もし暴行を行えば十八、いえ、十九年にしていたでしょう」

「うむ、公正な判断感謝するぞ。儂がやれば二十年と言わずに永久投獄するかもしれんのでな。ついでにあの老害をコキユートスに落とすか」

「私もそうしたいところですが、世間が許しはしないでしょう。せめてコキユートス三年がいいところかと」

「じやろうな。では儂は愛しき孫と孫に等しき少年へ報告に行ってくる。あとは任せたぞ」

「お任せ下さい」

防衛作戦

ホグワーツの門番ハグリッド、ドラゴンの卵不法所持

そんな見出しで始まる日刊預言者新聞が魔法界にばらまかれた。当然ホグワーツにも届き、ここに届いたのはサイズを大きくしたワイド版であった。

大まかな内容を言えば、現行犯逮捕の写真、逮捕したその後も反省の色が見えないこと、レイルが保護することになったドラゴンの特徴などが書かれていた。

それを見た生徒の親族はフクロウ便をホグワーツへ送った。結果として、朝食の時間の大量の梟が飛び交うこととなった。

子供の心配は勿論、ハグリッドへの怒り、ホグワーツの安全管理についてや、ダンブルドアへの批判、レイルへの感謝など内容が多岐にわたる。実際レイルにも在校生から質問や感謝の嵐であった。

ハグリッドと仲の良かった主なグリフィンドール生、有り体にいえばロナルドあたりが反発してきたが、基本的に「常識ないのか」だの「何言ってるんだこいつ」としか思われておらず、全く相手にされてなかった上に更にヘイトを稼いだとまである。

レイルはこの件の早期解決にあたり、魔法省からマーリン勲章勲二等を授与されることになった。

土曜日の勉強会だが、遂に部屋を拡大することになってしまった。進級試験がやって来たのだ。

ヘルミオネ、レイルはホグワーツに来る前から魔法を扱い、更には知識も豊富なので余裕だった。フィリップも《地球の本棚》で知りたいうことはあらかた調べ尽くしたのでこちらも余裕だった。

そんな三人にレイブンクローは勉強を教えて欲しいと泣きついた。スリザリンの方はアリシア、ダフネ、マルフォイに、ハツフルパフはメズール、グリフィンドールはハーマイオニーに行っていた。

試験についてはレイルを初めとした秀才組は満点以上を普通に取っていた。あの普段のほほんとしたメズールでさえ、だ。

ヘルミオネはパイナップルを机の端から端までタップダンスをさ

せる試験ではパイナップルだけではなくその場にあつた全ての物品を使用した上で、タップダンスの後に社交ダンスもとり入れた。フィリップは鼠を嗅ぎたばこ入れにする試験では装飾と塗装を施し、壊れないようにと世界で最も硬い物質であるウルツァイト窒化ホウ素というもので作り上げた。

などなど、他にも色々あるのだが、ここでは省略することにする。一言で言えば、やりすぎたのだ。

「…やっぱ、ヘルミオネには勝てないか」

「まだ、負ける気は無い」

「トップスリーをレイブンクローが独占、って……」

「次はメズール、で、私、ドラコ」

「そのあとはグレンジャー嬢、でダフネか」

レイルとヘルミオネは身内で競い合って、フィリップがそれを追う形である。ハーマイオニーは自分で出来る限り頑張ったと思ったのにまだ届かない上に六人もの壁があることに軽く絶望していた。

試験も終わり、ようやくとゆつくり出来ると思ったレイルに一通の手紙が届いた。送り主はダンブルドアである。

端的に言えば、「試験お疲れ様、魔法省に呼ばれたから行ってくる。ヴォルデモートが取りに来るから全力で守れ。クイレル先生と共にくる。できればその場にいろ」とのこと。

レイルは恐らく今晚がその時だろうと思い、仕方なくクロエを使ってみぞの鏡がある場所に向かった。

クイレル、もといヴォルデモートに見つかってしまつてはいけないのでレシフオールドのメツサーに頼んで身を隠させてもらった。夕餉後ということもあり、真つ暗な部屋でレシフオールドはかなり隠密性が高かった。

流石に広範囲に索敵のような用途で開心術は使えないので人の気に敏感なソリッドをトランクから出した。トランクを閉めて、適当に腰を下ろした。

気がつけば隣にはちよこん、とフォウが座っていた。何かを見定めるように、ただ一点をじつと見つめていた。

視線の先にはみぞの鏡があった。そういえば、自分が持つてなければいけなかったなと思ひ出し、メツサーにどいて前に立った。

一応みぞの鏡がどういうものかをダンブルドアから教わっていたが、レイルの願いは前から決まっている。それはヴォルデモートから賢者の石を守ることで、無限の命を手にするよりも難しい。

鏡の中のレイルはヘルミオネとリルと肩を並べ、周りには今トランクにいるよりも多いだろう数の魔法生物達がいる。ヘルミオネとリルがそれぞれの手を握ってくれている。

レイヴェルが肩に泊まり、ノーベルタが腰にしがみついでいて、フォウが足元に鎮座している。ミローが頭上を旋回し、ドラゴン達はその上で滞空している。

これがレイルの望む未来、みんな一緒に暮らすこと。そのためにはしなきやいけない事が多すぎる、とレイルはため息をついた。

「……お前が望む未来は、どんなものなんだ？なあ、フォウ」

レイルは隣に座るフォウを一度撫ぜた。だがフォウはなんの反応も返さずに鏡を見続けていた。

レイルがもう一度鏡を見ると、先程までいたヘルミオネ達はどこかに消えた。鏡の中のレイルはふつと微笑んでポケットの中を指さした。

ポケットを確認すると中に赤い荒削りな石があった。おそらくこれが賢者の石だろう。

「メツサー、また隠れ蓑になってくれ」

メツサーは何も言わずにレイルに纏った。壁際まで移動し、また座る。

数分後、ポケットの中が少しだけ動いた。ポケットの中にいたソリッドは体を這ってレイルの肩まで移動した。

(来た)

「どつち？」

(吐き気を催す方)

「……そのボキャブラリ、どこで学んだの？」

ひとまず闇の帝王が来たらしいので、レイルはトランクにソリッド

を戻した。ソリッドは真つ先に家族の元へと向かっていた。

待っていると段々悲鳴が近づいてくるのが分かる。上手く意表をつけているらしい。

スウーピング・イーグルやビリーウイグ達が殺されていないのを願いながらじつと待つ。ハグリッドのフラツファイーは真面目にどうでもいいとさえ思っている。

仮にも闇の帝王などといいたいそれた名前を持っているにもかかわらず三頭犬だ、死の呪文アバダ・ケタブラで殺されるとは思わないのだろうか。

時間的に半時間ほどたっただろうか。悲鳴がまた近くなった。

フラツファイーの方はそんなに時間をかける必要も無いので、おそらく三つ目の空飛ぶ鍵に噛まれているところだろう。解錠呪文を受け付けないようにしたのでトラバサミのみを壊すか腕をちぎるかしなければ外せないはず。

クリアしたのか、叫び声はなくなった。今度は物が破壊される音が何度も続いた。

チエスは二人融和有限確定完全情報ゲーム。基本的に遊ぶ時は運という不確定なものが入り込む余地はない。

だが今回クイレルが行うのはボードゲームではなくストラテジーゲームである。要するにどれだけカリスマがあるかだが、残念ながら今の彼は戦闘狂にしか見えていないだろう。

核を壊すためにひたすら敵を殺していく。そこに大義名分など欠けらも無い。

手当たり次第に敵軍を亡きものにすれば、それに恐怖した自軍が反乱を起こす。駒の色も相まってヴォルデモートのフラストレーションは溜まるだろうとレイルは予想した。

今度は四十五分ほどした後、ようやくと爆音が止まった。ヴォルデモートが近づいてくるにもかかわらず、レイルの心境は至って平坦であった。

次は確かトロールが相手である。クイレルのメンタルはここで潰れるだろう。何せ自分が簡単に倒せると思っていた相手が予想以上のレベルアップを果たして立っているのだから。

トロールに鎧をかぶせるだけでは死の呪文で簡単に突破されてしまう。だからレイルが行ったのは動作の主導権をトロールではなく鎧側に渡したのだ。

これで本体が死んでも鎧が動き続ける。それも全てを同時に壊さなければ止まることは無い。

ここでクイレルが動かなくなれば万々歳なのだが、全てが上手くいくとは限らない。動かなくなった体をヴォルデモートが使う可能性だってある。

そしておそらくフラツファイを除き最も短い時間でクリアする。これは生物である故に分かり切っていることである。

そして数分後、ボロボロになり、既にターバンを外したクイレルが転がり込んできた。

.....

時は遡り、クイリナス・クイレルは扉の前にいた。自身の主、トム・マールヴォロ・リドルの命を果たすために。

この日のためにどれほど苦労したか。主の臭いを消すために態と吸血鬼にかすり傷を与えられ、大量のニンニクで授業部屋をうもらせ、誰にもバレないようにオロオロとした態度を貫き通した。

ダンブルドアに分からせないように閉心術の特訓をし、闇の魔術に対する防衛術の教諭に就いた。今、ダンブルドアはこの城にいない。計画の結構には打って付けだった。

「失敗は許されぬぞ、クイレル」

「分かっております、我が君」

クイレルは後ろから発せられる声に恭しく返事をした。ターバンを外したそこには、人とは思えない何かが張り付いていた。

比喻するならば、蛇を潰して後頭部にくっつけたようなものだった。それは人並みに目、顔、口があった。

この姿こそ、今のヴォルデモートである。醜いその姿を晒す訳にはいけないので、クイレルにターバンで隠すようにしていたのだ。

「ダンブルドアが帰ってくるのは早くても零刻。この奥に確かにあるのだろうか？」

「はい。この最奥に賢者の石と、それが入れられたみぞの鏡が」
「……」

ヴォルデモートはクイレルの返答に何も言わず、ただ目を閉じた。クイレルは解錠呪文で扉を開け、第1関門に入っただけだった。

そこは、さながら山岳地帯が連なる場所の狭間。有り体にいえば谷だった。

しつかりと空もある。だが先程までは確かにホグワーツ城内にいた筈だ。

「どういうことだ……ただの部屋ではなかったのか!？」

「そのはずですよ! ダンブルドアも誰も手を付け加えてないどころか、奴はここに来ていません!」

演技のオロオロとした様子ではなく、本気の素で動揺しだしたクイレル。手に杖は持っているが、かすかに震えていた。

「……ッ! クイレル! 後ろだ!」

「なっ!？」

声に従い避けると、大きな影が通り過ぎて行った。よく見てみれば、三頭犬、アズカバンへ投げ込まれたハグリッドのフラッフィーだった。

クイレルはすぐさま収納袋からオルゴールを取り出して増幅呪文で響かせた。これで眠りにつくはずだった。

しかし予想とは裏腹にフラッフィーは眠らなかつた。それどころか先ほどよりも唸り声を猛々しく上げている。

「仕方ない! 殺せ!」

「アバダ・ケタブラ!」

クイレルの杖から放たれた緑の光は一直線にフラッフィーの心臓へと向かった。これで先に進める、とクイレルは思った。

しかし、フラッフィーはかなり速度のある魔法を見てから避けた。これにはヴォルデモートですら驚愕の声を上げた。

「馬鹿な! 魔法を避けただど!？」

「魔法を避けるとは……まさか服従の呪文、いや違うな。クイレル、悪霊の火を使え! あれならば広範囲で攻撃を当てられる!」

言われた通りに悪霊の火を展開し、フラツフィーに当てる。今度こそ絶命したフラツフィーは呻き声を上げながら崩れ落ちた。

「……魔法も使わず突破するはずが、何たる失態か。罰を、我が君」

「よい、許す。魔法省に向かうギリギリにここを改造することを俺様も失念していた」

「感謝の極み……」

（ダンブルドアは全能ではない。確かに強力ではあるが、全てを知る訳では無い。三頭犬の弱点を無くす方法など、奴は知るはずがない。一体誰が……）

息を整えたクイレルはフラツフィーの背中に扉がつけられてることに気づき、扉を開いた。次の部屋は何も変わらないと初めは思ったが、どうやらそうではないらしい。

明らかに植物の数が増えている。それに本来の悪魔の罫

が減っている。

「ル^強ーモス・マキシマ^光を」

光を放ってみれば、退いたのは数本だけ。やはり抗体が既に入れているらしい。

「なかなか入り組んでいる……それに方向感覚を惑わす植物もあるな」

「ですが、スプラウトの奴はそんな植物を所持していませんでした、君」

「取り寄せた可能性もあるが……もしかすれば、生徒側に協力者がいるのかもな」

クイレルはその言葉を信じられなかった。確かに優秀なのは何人かいるが、ここまで知識を有している者はいなかったはずだ。

ひとまず迫り来る毒草達を焼却呪文で燃やしつつ、先へ進むクイレル。厄介なことに火が周りにいかないので一つ一つ駆除していくしかない。

数分後、ヴォルデモートはなにか違和感を感じた。道を覚えているはずのクイレルがあちらこちらへと向かう方向を変えているのだ。

「クイレル、貴様本当に道を知っているのか」

未だ全身に走る痛みを堪えながら、戻ってきた意識を確認しつつ、襲ってくる植物たちを燃やしながらか先へ進む。

その度に方向が違う、と主から叱責を貰うが、これも全ては主のためと思えばまだ楽だった。

二人は知らないが、実は燃えている植物の総数は少ない。というのも、炎の伝達がしないのもそうだが、それ以上にこの部屋の中に放たれているスウーピング・イーヴルたちが燃えたところを気づかれないように折っているのだ。だから燃えた回数以上の植物が残っている。

次の扉を開くと、何十もの鍵が部屋のなかを飛んでいた。この部屋もフラツファイがいたへやと同じように空がある。

壁がない、ということは鍵たちはどこまでも逃げていく可能性があるということ。即ち、見失えばもう見つけることは不可能である。

それに気付いたヴォルデモートは直ぐにクイレルに黒の飛翔を使うように指示、その状態で鍵の搜索を開始した。帝王故の感か、本物であるかそうでないかの違いは直ぐに分かった。

数十秒たったあと、一つだけほかの鍵より本の少し速く飛ぶ鍵が二人の目前を通りすぎていった。

「あれが本物だな。追えー！」

「はっー！」

直ぐに追い付き、杖を持っている手とは逆の手で鍵をつかんだ。瞬間、本物の鍵がトラバサミに変化、クイレルの腕に噛みついた。

それだけではない。今まで散るように逃げていた鍵たちが一斉にクイレルの方に飛んできた。等ゼナたった鍵は例外なくトラバサミに変化していく。

「化けの皮剥がれよ！剥がれよ！剥がれよ！剥がれよ！」

「クイレル！今お前の体に引っ付いている牙のようなものはいい！飛んでくるやつだけを処理しろ！」

「し、しかし！」

「なければ死ぬのみだぞー！」

クイレルは仕方なしに飛んでくる鍵だけを爆発呪文で破壊していった。クイレルは数える暇もなかったが、その総数は八十個。

飛んでくる鍵がなくなったのを確認し、自身に噛みついてるものを解いた。

「マグルの道具か……」

「は、はい。恐らくは、トラバサミと呼ばれる狩猟用の罫かと……」

「俺様は獲物とでも言うつもりか……そうはいかぬぞ、ダンブルドア」
執念の炎をさら燃やし、次の部屋へと向かう。ちなみに扉は本当の鍵を手にしたときに真下に出現していた。

部屋へ入ると、まるで競技場のようだった。正しくは四角い部屋なのだが、かなり雰囲気が違った。

手前と奥にそれぞれ配置された白黒合計十六の騎士の像。それぞれの甲冑が役職を示しているのかわからないが、姿かたちが違う。

一番他と違うのは、それぞれに一人だけ存在する女の像だ。目の前には、こんな立て札が刺してあった。

「これは、ただのチェスではない。互いの王のカリスマを計りあう、駒たちが意思を持ったチェスである」

かかっていた文字全てを目を通した瞬間に立て札は塵と化した。これ以上のヒントはもう望めない。

「意思を持ったチェスか。つまりは俺様が命令を下すまで決して動かないわけだな」

「いかがでしょうか、我が君」

「……癪ではある。だが、この駒どもが反乱を起こさない可能性がない訳ではない。素直に攻略するでしょう。a2ポーン、a3へ」

命令すると、ヴォルデモートの白いポーンが一步^{1マス}前進した。その瞬間、相手の駒がぞろぞろと動き出した。

しかもヴォルデモートの駒のように台座ごとではなく、台座から飛び降りた騎士像たちが一斉に襲いかかってきたのだ。

「ルールを知らないのか!? これはチェスだぞ!」

「いや、今回はこれが正しいぞ。ポーン、ルーク全体迎え撃て! キングとクイーンは待機、ビショップは各王の護衛だ! ナイトは相手の裏を ついて攻めてきたポーンどもの首を跳ねろ!」

今度はヴォルデモートの騎士像たちが台座から飛び降りてその指

示通りに動いた。ポーンとルークは攻めてきた的と交戦し、ナイトが外側から攻めに回り、ビショップはキングとクイーンに一人ずついた。

「我が君、これは……」

「これはチェスではなく、ストラテジーゲーム戦略的遊戯ということだ」

即ち、どれだけ自軍をまとめあげ、人の上にたてるか。まさにカリスマを計るにはうってつけのゲームである。

苦戦三十分ほど。ゲームには勝利したが、損失がひどかった。残っているのはキング、クイーン、日ツショップ一人、ポーン二人。

「…鍵が開かないということは、核は相手のキングではなかったということだな」

「どうしましょうか…」

「これ以上上下らぬ遊戯に付き合う必要もあるまい。爆破呪文で全て壊せ」

（自軍が白で、敵軍が黒。もしこの演出が現実に現れるのだとしたら、貴様は寿命で死ぬということか。そして、俺様が負ける、と？ふざけたことを……!!）

まるで未来を予言されているようで、ヴォルデモートは気分を果てしなく害した。憤怒と執念の炎の温度をさらに上げていく。

クイレルが爆破呪文で一体のポーンを破壊した瞬間、不思議なことが起こった。自軍が一瞬にして赤色に染まったのである。

赤色の騎士像たちは縦を構え、剣を抜き、二人に襲いかかってくる。

まるで禁忌をかけたように。

「レダクト！粉々になれボンバーダ！粉砕せよボンバーダ・マキシマ！完全粉砕せよコンフリンゴ！粉々になれレダクト！」

「…次は貴様のトロールだったな」

「その筈です」

「改造を受けているかもしれぬ。油断するなよ」

「承知しました」

奥にあった扉を開き、先へ進む。やはりトロールもその姿を変えていた。

全身を甲冑で包み、手に持っていた棍棒は鉞へと変わっている。

「死なぬことはないはずだ、クイレル！」

「はっ！アバダ・ケタブラ！」

緑色の光線はトロールの心臓をしつかりと射ぬいた。しかしトロールは立ち止まるもなく倒れるもなく、いまだその歩みを進めている。

「分霊箱ではないな。行動の主導権を鎧に渡したな。悪霊の火を使え！」

杖先から吹き出た炎は蛇の形を象り、鎧トロールに突進した。今度こそ歩みを止めたトロールは既に片腕しか残っていなかった。

「次で最後だな。行け」

「はい」

クイレルは既に限界に近かった。度重なるアクシデントに精神は刷りきれ、既に目に光は灯っていなかった。

今の返事だつてほぼ条件反射だ。聞かねば殺す、というような殺気を振り撒かれればこうなってしまうのもある意味当たり前かも知れない。

最後の部屋にはいると、一つの机があった。その上に文字が浮かんでおり、机の上に七つの薬品入れ、そして回りに五つの炎の輪。

「ここは魔法薬クイズのようであった。」

「この程度、俺様を舐めているのか？一番左の薬品、そして右から二番目の輪だ。はやく行け」

クイレルは後ろの誰かの言葉の通りにフラスコを口にして薬を飲んだ。その瞬間、クイレルは声を失った。

「————ツツツツツ！」

声が出したい、声に出したい、しかし声にならない。一気に飲んだそれはまるでクイレルの喉を爆発するかのよう襲った。

声をあげて気を散らしたい、しかし脳がそれを許さない。痛覚は休ませるようにして声をあげさせないが、息をする度に痛覚が反応する。

スピリタス。

それは、ポーランド原産の穀物と馬鈴薯じゃがいもを原料に蒸留を七十回以上繰り返して出来上がるウォッカ。そのアルコール度数は驚異の90越え。

クイレルが飲んだのはそんなほぼアルコールでできたスピリッツだった。しかもあるうことか、原液でイッキ飲みしたのだ。

それだけでは終わらない。正解の炎の輪を残して全ての炎の輪が襲いかかってきたのだ。

「クイレル、何があった！クイレル！」

当然そんなものは知りもしないヴォルデモートは薬を飲んでいきなり苦しみ悶えたと思えない。何が起きているかも当然知るよしもない。

自分の呼び掛けに答えないという不敬の上、なんの反応もしないという状況がさらにヴォルデモートをイラつかせる。最終的にクイレルはここで切り捨てるという選択をした。

「貴様はここで死ぬが光栄に思えよクイレル。この闇の帝王の復活の礎いしずえとなるのだからな！」

意識を前に出したヴォルデモートは襲い来る炎を消すためにその場にあった薬を全て飲み干した。効果はそれぞれ異なるが、全てクイレルの体を内側から壊していくものだった。

活動限界が近いヴォルデモートは最後に服従の呪文を自分にかけて。最後の扉を開くためだ。

表にも度されたクイレルは命令にしたがって扉を開いた。それと同時に膝から崩れ落ち、顔面を地面と合わせることとなった。

目の前に、賢者の石がはいっていないみその鏡をとらえながら。

一年が終わる

そして数分後、ボロボロになり既にターバンを外しているクイレルが転がり込んできた。息は絶え絶え、どこか遠くを睨みつけるが覇気もない。

急に痙攣したクイレルはゆっくりと立ち上がると後ろを向いた。

「まさかこの俺様がここまで苦しめられるとはな。それにこの体ももう限界だ。捨てるのが一番いいだろう」

そう吐き捨てたクイレルのもう一つの顔は次第に黒い靄に包まれてその形をなくし、宙に同じ蛇顔を形成した。

レイルはメツサーにトランクに戻ってもらった。

「気分はどうです？ヴォルデモート卿？」

「最悪の一言に尽きるな。こんな体では杖も持てん」

「でしょうね。それに賢者の石は鏡の中、その上あのご老体も丁度到着したようです」

「口惜しいが、負けを認めるしかあるまい。ダンブルドアではなく、貴様にだがな」

レイルは目を合わせられると同時にほんの少しだけ恐怖した。だがホグワーツに来る前に味わった恐怖の方がこれの何倍も恐ろしかった。

「貴様、名をなんとという。名乗らせるにはまず自分からとは言うが、俺様の名はもう知っているだろう？」

「当然ながら存じ上げておりますよヴォルデモート卿。では名乗らせていただきますよう、レイル・クローターと申します」

「ふむ、いい名だな。レイル、次はしっかりと体を取り戻した時に話し合おうか」

ヴォルデモートはそれだけ言って壁をすり抜けてどこかへ行ってしまった。ダンブルドアからは賢者の石の防衛のみを命じられていたので捕えなくてもいいかと開き直った。

あとはトランクからクロエを呼んで自室に戻った。集中が切れて倒れるように眠った。

当然、睡眠中にヘルミオネに生気を吸われた。

レイルがクロエによつて自室へ運ばれた数秒後、ハリーとロナルドが部屋に現れた。そこにあるのはボロボロのクイレルだけであり、何が何だか分からなくなつてしまった。

結局後から来たダンブルドアによつてクイレルは回収された。二人は胸のもやもやが晴れないまま自寮へと帰った。

防衛から数日明けた。

レイルは手紙で事の本末をダンブルドアに伝えた。口頭の方がいいとは思つたが、その場にいなかった上に自分にも手紙でその場にいる、と伝えたのだから意趣返しである。

クイレルが行方不明、ということ様々な推測がホグワーツを飛び交つたが、勘のいい物は大体察していた。

ダンブルドアからはクイレルは闇の帝王からの使者であり賢者の石を狙っていたが守りによつて死亡したことを告げた。その際に優秀な者の手を借りたと名こそ明かさずともレイルであることは一目瞭然だった。

そのレイルはというと、賢者の石を使ってあるものを作っていた。賢者の石の制作法や理論なんかは以前にニコラス・フラメルの方に遊びに行った時に教えて貰つていたので使い方はバッチリだった。

凡そ二年近くかけて作られるこれは、もちろんヘルミオネの手を借りながら制作される。それを夫婦の共同作業と囃し立てるものもいたが、そんなものに目もくれずにほとんど自室に籠っていた。

そして、学年末パーティー。

大広間は青と銅に飾り付けられ、レイブンクローのシンボルである鷲が描かれた横断幕が目立っていた。スリザリンの七年連続寮杯獲得が阻止されたのだ。

今年はレイル、ヘルミオネ、アリシア、メズール、フィリップ、ハー

マイオニーなどの秀才によって触発されかなりの得点が稼がれたが、やはりトップ三人組が全てレイブンクローにいてというのが決定打となった。身内最良がすぎるとされたスネイプから点を多く取ったのも大きい。

「また、1年が過ぎた」

ダンブルドアは演説台の上に乗って話を始めた。

「宴を始める前に、寮杯の点数の発表といこうかの。四位、グリフィンドール485点。三位、ハッフルパフ521点。二位、スリザリン669点。一位、レイブンクロー……753点」

レイブンクローの点数が告げられると同時にレイブンクローの席から爆発するかのように一瞬にして歓声が上げられた。レイルは普通に小さく拍手をする。

ハッフルパフもグリフィンドールもスリザリンの連勝記録が止まったために惜しめない拍手を送った。スリザリンも悔しいは悔しいが、それでも皆頑張ったと自分たちに拍手をした。

パーティーが始まり、生徒達は思うようにものをかき集めて食べていた。ウィーズリー Twins は食べ物で普通に遊んでいた。

レイルもこの時間はトランクの住人達の睡眠時間なので心ゆくままに料理を楽しんでいた。するとヘルミオネとフィリップと共に監督生であるユーリに呼ばれた。

「まずは、感謝を。最後の年に寮杯を獲得出来て嬉しいよ」

「いえ、これは皆の努力の賜物です。僕らだけが感謝を受け取る訳には」

「確かにそうだ。けれど切っ掛けを与えてくれたのは君達だ。君達がこの寮に入ってくれなければ、きっとスリザリンの手に渡っていただろうからね」

ユーリはレイルのゆっくり食事をしたい、という思いをくんでくれたのか、周りには人があまりいなかった。胴上げをしたかったらしいが、監督生権限で止めたらしい。

ユーリはどこか語るように、諭すようにレイル達を見た。勉強一筋なレイブンクローとは思えない、ハッフルパフと言われても遜色のな

い柔らかい笑顔だった。

「次は君たちは後輩であり、先輩だ。導く者もいることを忘れないでくれ。君達の明日に、導きの青い星が輝かんことを」

導きの青い星とは、ユーリの故郷にある謳い文句らしい。ユーリはレイル達を一人ずつしっかりと抱きしめた。

フィリップ、ヘルミオネ、レイルの順で抱きしめ、最後は全員を一思いに抱いた。だが上級生だとしても、体格的に全員の背中に手を回すことは出来なかった。

「今後とも、このレイブンクローをよろしく頼む」

「「はい」」

「うん、いい返事だ。来てくれてありがとう。あとは友人達と自由に食べてくれ」

その後、パーティーはつつがなく幕を閉じた。レイブンクローの談話室で寮内パーティーを開き、最後にユーリを胴上げして終わった。

レイルもヘルミオネも寮杯パーティーに参加した。逆に他の人から参加してくれという声が多すぎたのだ。

最終日。キングス・クロス駅に向かうホグワーツ特急に乗り込もうとした時、レイルの元にフクロウが飛んできた。

「このコノハミミズク、母さんのだ」

レイルの母親を知らない人々はどんな文章を書くのが気になり群がった。しかし速攻で四人用コンパートメントに逃げ込んだために中身を見れるのはレイル、アリシア、メズール、フィリップだけである。ヘルミオネは既にトランクの中に入っている。

アリシア達はワクワクしながら、レイルは中身の予想をつけ呆れながら手紙を開けた。開けられた瞬間、こんな文面から始まる手紙があっというのか、とアリシア達は硬直した。

「やあ（・・ω・・）」

ようこそ、バーボンハウスへ。

このテキーラはサービスだから、まず飲んで落ち着いて欲しい。

うん、「また」なんだ。済まない。

仏の顔もつて言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。

でも、この文面を見たとき、君は、きつと言葉では言い表せない」ときめき」みたいなものを感じてくれたと思う。

殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい
そう思っつて、この手紙を送ったんだ。

じゃあ、本文を述べようか。

クリードとコインヘンを追つて数年、魚の鱗を大海で探すような感覚に陥っている。だがピースはある。大事なものは額縁だ。

まともに母らしいことも何も出来ていないが、今年もだ。またゼノのところでお世話になってくれ。

もちろん紹介状は既に送っているが届くのは今日だ。だからほぼほぼアポ無しと言っつていい

こんな馬鹿な親でも、君を愛している。

ステファニー・クローターより」

レイルは全てを読み終わると同時に丸めて宙に放り投げて完全粉々呪文で手紙を粉碎した。これはレイルがいつもやっている事だ。

「…………お茶目、なのかしら？」

「いや、お茶目でクリードとコインヘンを探せるか」

「なんか、レイルが遅い理由がわかつた気がするよ…………」

さもありません。同時にレイルに結構同情してしまう三人であった。

レイルは杖をしまい、ため息を吐いた。手元には手紙を開いた時に突然出てきたテキーラがある。

当然ながらレイルは未成年であり、イギリスの飲酒可能年齢は1

8。飲めるはずがない。

ゼノへの手土産と思えばまだマシだが、こんな手紙は何回も続いている。その度にバーボンが送られてくるのだからいい加減飽きてくる。

(組み分け、防衛、初授業…………詰め込まれすぎた一年だなあ)

レイルはこの一年を回想する。アリシア達は既に疲れたのか眠っつている。

「来年は、どんな年になるかな」

傀儡人形と蛇の末裔

夏休み

有難くもないバーボンをステファニーから貰ったレイルは結局へルミオネと共にデイマイント家の別荘地へと向かうこととなった。キングス・クロス駅で出迎えてくれたゼノはこの展開を既に予想していたようで、「心配しなくていい」と言った。

イギリスからモナコまでの距離は約1,219マイル。車で移動すれば二十時間ほどかかるが、今回は姿くらましをして飛ぶので一瞬だ。煙突飛行をしてもいいのだが、あれば服だの何だのが汚れてしまうのでこちらを使う。

ちなみにいつも一緒にいる人達の予定はというと。

アリシア——聖二十八一族の会合、及びパーティーへ出席。その他各家との交流。

フィリップ——新たな魔法の研究、及び固有魔法の制作。魔法薬の短縮レシピの研究。

メズール——家族と共にアメリカ旅行。その後は寮のルームメイト共に泊まり。

ハーマイオニー——夏休み後半にフィリップ宅に行き魔法の勉強。それまでは自由。

ダフネ——聖二十八一族の会合、及びパーティーへの出席。またアリシアの護衛。

ドラコ——ダフネに同じ。

となっている。ちなみに監督生だったユーリは見事グリーンゴッツ銀行に就職が決定したらしく、今ではゴブリンと共に窓口、及び金庫の管理を任されている。

フィリップの盟友セドリックは家族と共にイタリアに旅行に行つたらしい。期間は長くはないそう。

モナコの別荘へ行くレイル達だが、実はゼノ、というかデイマイン

ト家は別荘をいくつか所有している。モナコ、ドイツ、アメリカ、オーストラリア、ブラジル、ロシア、ジャパンの計七つだ。

これらはモナコとアメリカ以外は全て贈与品である。そのどれもが一等地ながら賄えているのは流石魔法界の監視役といったところだろうか。

「忘れ物はないかね？2人とも」

「うん、大丈夫」

「いつでも行けるよ、ゼノ」

トランクの中に荷物を入れたレイルとヘルミオネ。もちろん拡張領域の方のクローゼットに入っている。

通常のトランクにも変えられるが、それでは普通にサイズが足りない。なぜトランクの中にクローゼットがあるかだが、一人旅などをする時に椅子では寝にくかったのだ。

ゼノは二人の返事を聞いて微笑み、手を取って姿くらしをした。人類という基準から外れているからか、吐き気もしなければ巻き込まれるような感覚もない。

瞬きを一度すれば、そこは地中海沿岸部、モナコのモンテカルロである。眼前に広がるは美しい街並み、カラーコード1E90FFの空と海、そして純白の別荘。

「うむ、ここに来るのも何回目かの」

「多分、私が生まれてから三回目」

「そんなもんかの。さて、まどろっこしいことはなしじゃ。ほれ、中に入ろう」

レイルは頷いて中へと入っていった。中も白く、埃など一切ない綺麗な部屋たちが三人を出迎える。

与えられた一室でレイルはトランクからビート、フォウ、レイヴェル、ヴェールヌイ、メデイクルス、ユミルを出した。どこかに行つて何かをやらかす前に全員を引つとらるつもりだったが、誰もそばを離れなかった。

「レイヴェル、ヴェールヌイ、メデイクルスはそこに止まり木があるから休んでくれ。魔法がある範囲内ならどこに飛んでも大丈夫だけど、

レイヴェル、君はダメだ」

レイヴェルはある意味では悲しそうな顔をしたが、レイルは苦笑しその体を持ち上げて体に寄せた。すると自然にレイヴェルはレイルに寄ってくる。

「君を思ってたなんだ。この別荘の敷地内ならいいよ。でもあんまり高く飛ばないでね」

レイルは耳を甘噛みしてきたレイヴェルの背中を撫でた。保護した当時は素っ気ない態度だったのに本当に甘え上手になったと心から思う。

メデイクルスは止まり木に行くのと直ぐに目を閉じて眠りについた。ヴェールヌイとレイヴェルは外に飛びに行ったが、どちらも賢いので与えられた範囲しか飛んでいない。

ビートは注意を聴き終わったと同時にレイルの肩へと移動していた。フォウはイスに座ったレイルの膝の上へ。

そして、まだ外を知らない一匹がいる。

「ユミル、ようやく外に出られた感想は？」

ユミル。

数年前に保護したオカミーが産んだ兄弟達の末っ子。兄弟の名前は上から順番にリユコス、アナキー、アブゾーブ、リベンジ、リラクサ、アリエツタ。初めが「リ」で始まるのが雄で、「ア」から始まるのが雌である。

彼女だけが銀卵だったので、特別に「ユミル」と名付けたのだ。名前の由来は北欧神話「スノツリのエツダ」に登場する原初の巨人だ。

ユミルはからだの調子を精一杯鳴いて伝える。産まれて間もないが、意欲旺盛な子である。

レイルはそんな様子に微笑みながら、ユミルを胸ポケットに入れた。身をおいた場所合うように大きさを変えるオカミーは大きなものに入れてはいけないのだ。

「レイル、荷ほどきはできたかの？」

「できたよ」

部屋を出れば、リビングにはコートを脱いだゼノしか居なかった。

レイルが返事をすると同時にヘルミオネも部屋から出てきた。

「どうやらヘルミオネも荷ほどきが終わったらしい。」

「一応年を押し言っておこう、君の家に届いたふくろう便は全てトランクに転送されることとなる。安心せい」

「毎年のことだからもうなれたよ」

ふくろう便の転送技術は数十年前に魔法省の神秘部、ぶつちやけて言ってしまうえばステファニーによって作られた。なんでもその時にいなければいけない案件を見逃さないように、このことらしく、今ではあたらしい家がたつとその転送魔法が施される決まりになってる。

「さて、ささやかながら農からの休暇のプレゼントじゃ。モナコの通貨はユーロじゃから、その両替機に突っ込めば勝手に出てくる。農は仕事はまだまだ残っておるので、二人で楽しみなさい」

「ありがと、ゼノ」

「何、将来が確定している二人のためじゃよ。ではな」

ゼノはそれだけいうと、音もなく姿くらましでどこかへいってしまった。きつと監視塔だろう。

「とりあえず、明日までの食料買わなくちゃな」

「安い店を知ってる。行く」

ヘルミオネが先に両替をしていたのか、肩掛けか版を引つ提げてドアの前にいた。レイルはうなずいて、ヘルミオネの手を取って外に出た。

ここにウィーズリー・ツインズがいたならばきつと囃し立てていただろうが、残念ながら彼らの家にモナコまでこれる金はない。これたとしても止まる宿を見つげられるかである。

食材の買い出しが終われば既に日も落ちかけていた。別にあつちにいたりこつちにいたりしていたわけではないのだが、いく先々で「はい、これサービスね」といって少し多目に何かをもらうか、別の何かをもらうのだ。それらを処理していく度に時間がかかり、遅くなってしまった。

別荘に到着したレイルは一先ずトランクを確認した。手紙がはいっていないかを確認するためである。

見てみれば二通、メズールとアリシアからであった。

「レイルへ」

やつほ、メズールだよ。手紙を出すのはこれと新学期前にもう一通だから君のポストが満杯になることはないよ。安心したまえ。

たしかモナコ公国だっけ？ やつぱ監視塔の管理者は違うね。

これを書いているとき、宿題を同時進行でやっています。二人も早めに終わらせなよ。

二人がモナコを楽しむように、あたしもアメリカで楽しんできます。お土産はみんなの分買ってくるね。

じゃ、くれぐれも節度を守るように。

君の盟友メズール・キラグリードより」

「親愛なるレイルへ。

いかがお過ごしでしょうか。私は初日に宿題をほとんど終わらせました。

きつと貴方たちもそうなのでしようね。レポート、私にも読ませてね。

さて、来週の週末、聖二十八一族の懇親会を行います。そこで、勝手ながら、貴方とヘルミオネの名前を出させていただきます。反対者はなし。貴方たちの合意さえあれば迎えを出します。参加は自由なので断っていたいただいても構いません。

個人的には、来ていただければうれしいです。いい返事を待っています。

よい休暇をお過ごしください。

貴方の友人 アリシア・ティファールより」

手紙はこんな感じの二人らしい文面だった。レイルはどうやってメズールが手紙を書くのと宿題を済ませるのを同時進行しているのかが個人的に気になった。

そして、アリシアからのパーティーの誘いだ、これはヘルミオネが了承しないとんでも、と言ったところだ。この家の権限は今のところヘルミオネが握っているし、それにヘルミオネの嫌がることはしたくない、というのがレイルの本音だった。

基本的に第一優先事項がヘルミオネである彼は、どんな物事であろうと全てを後回しにできる。いつかの生気補給も「場所を変えよう」としただけで後回しにした訳ではない。行動における脳内ヒエラルキーのトップは間違うことなく彼女なのだ。

ともあれ、そんな事情もあり、今すぐに決められないのがレイルという人間だ。彼は部屋を出て、まっすぐにヘルミオネのもとに向かう。

長年、といっても十年ちよつとの付き合いではあるが、「たぶんこの辺りにいるだろう」ということは自然にわかるようになってきた。恐らく、リビング。

その予想はズバリ当たり、ヘルミオネはリビングにいた。安上がりのできる簡単なカルボナーラを作っていた。

「どうしたの、レイル?」

物音はしなかったにも関わらず、レイルがリビングへと通じるドアを開いた瞬間に振り向いた。やはりヘルミオネもレイルの位置が何となくわかるのだろう。

「アリシアから手紙が来てた。聖二十八一族の主催のパーティーに参加しませんか、だってさ」

「レイルはどうするの?」
「行ってみたい気はあるけどね。でも、ヘルミオネも呼ばれてるんだ。君がいくなら僕もいくよ」

素晴らしいながら、レイルは冷蔵庫からサイダーをとりだし栓を開けた。ヘルミオネはずっとレイルを見ていたかったが、ベーコンを焦がしてはならなかったのでフライパンに目線をも度した。

「……行く」

「わかった。アリシアに返事しておくね」

少しだけ思考したヘルミオネは、賛同を示した。しかしその頭の中身は、「レイルが行きたそうにしているから」である。なんだかんだ言っこの二人、互いが最優先事項に入っているのである。

丁度焼きあがったベーコンをフライパンからまな板に乗せて包丁で短冊上に切っていく。それをソースとパスタに絡ませ、皿に盛れ

ば、完成。

「できたよ」

「ん」

飲みかけのサイダーを脇において、レイルはフォークを取り出す。始めてくる場所なのでフォークの位置がわからなかったので、呼び寄せ呪文で取り出した。

「いただきます」

食事をしている間、そこに会話は一切ない。そも、どちらも打ち明けるような性格ではないので、ただ食器と皿が擦れる音しかしないのはある意味必然だ。

きっかり二十分後、二人の皿からパスタが消えた。流石にソースは少し残っているが。

「明日はどうする？」

「宿題を終わらせよう。あまり量がなかったけど、スネイプ教諭から新薬のレポートを書けって言われてるし」

本来の課題の中にそんなものは無いが、列車に乗る前に姿くらましで現れたスネイプがレイルにこう言ったのだ。

「吾輩から貴様に特別課題だクローター。生ける屍の水薬を超える睡眠薬を開発し、そのレポートを提出しろ。もちろん現物も一緒にだ」
そのまま質問に答えるわけでもなく、現れたときのように直ぐに消えていったのだ。レイルはスネイプを自由人認定するのにそう時間はかからなかった。

とはいえ構成案事態は元々あったものなので、それほど苦にはなっていないかった。睡眠誘発薬といい、当たらに散布するだけで激しい睡眠に襲われるというものだ。割りと民間でも手に入れられる素材ばかりなのでできれば封印したかったのだが、仕方ないと諦めた。提出するのはこの薬だ。

ただし、まだレポートは書いていないものとする。

食べ終わった食器を片付けて、レイルとヘルミオネはそれぞれ自室に入っていく。ヘルミオネはすることもないのでそのまま寝るが、レイルは手紙の返事を書かなくてはならない。ベッドにタイプした

い気持ちをおさえ、机の羊皮紙を一切れ取って、羽ペンをインクにつけて書き始めた。

「親愛なるアリスへ。

手紙をありがとう。宿題はこれから始めるけど、きつと二日もかからないと思う。

レポートは懇親会の時にでも見せるよ。ドラコやダフネにもね。

懇親会の話だけど、喜んで参加させてもらおうよ。ヘルミオネも行くけどね。

そちらで会えるのを楽しみにしています。

貴女の親友 レイル・クローターより」

こんな感じの簡単なもので済ませ、メデイクルスの足にくくりつけておく。眠っている動物を起こすのは嫌なのだ。

レイルはそのままベッドに入り、流されるようにまぶたを落としたり。来週を楽しみにしながら、二人の夏休み初日は幕を閉じた。

聖二十八一族

手紙をもらったきつちり一週間後の週末。そう、聖二十八一族との懇親会である。

一応手紙に住所を同封しているので間違えることはない、と思われる。とはいえ場所がマグル側なので純血主義には堪えるかもしれない、というのがレイルの懸念材料だった。

もう一通、手紙が送り返されてきたのだが、場所が場所であるので普通に迎えに行くらしい。しかし、レイルは馬鹿親から聞かされていることがある。

「まー、これはマグルにもおける認識なんだけどさ。一般人と貴族みたいな所謂カーストみたいなものだけど、差がありすぎた場合、自分の常識が相手に伝わるとは思わないほうがいいよ。まえに神秘部に来た新人さん、それなりの貴族だったらしいんだけど、甘やかされてたらしくて、暴虐的な感じでソツコーで解雇だったよ」

と、あつげらんかと語る彼女の片手にはやはりバーボンがあつた。ともあれそんな話を聞いていたお陰でどうくるのかが分からないのだ。

とはいっても学校でのアリシアは割りと普通だった。そこまてぶつとんだ行動はしなかった。

そこに望みをかけるばかりである。

一応公式に新聞社も来るらしいので二人は着飾っているが、この年でドレスローブを着ることになるとは思わなかったレイルは急遽普通より物価が高いモナコでドレスローブを買うはめになってしまった。ヘルミオネの方は手紙に「こちらで用意する」とあつたのでいつもの通りのホグワーツのローブに身を包んでいる。

そうしたまま十数分後。遂に別荘の呼び鈴が鳴らされた。表面上は冷静を取り繕い玄関に向かう。

「どちら様ですか?」

「僕だ。ドラコだ」

「ドラコ?」

扉を開いてみれば、そこには見慣れた銀髪の少年が立っていた。言うまでもなくドラコ・マルフォイである。

「迎えは君だったのか」

「知らない人が来れば警戒するだろう? 君は。そんなことを見越して僕らがいつてくれとアロシア様がお下げなさったのだ。会場の人はこれを知れば大騒ぎだろうな」

「まあ、一令嬢がこんな一般人に頭を下げたと知れば……僕ら?」

今見えているのはドラコ一人のはずなのに、なぜか複数形である「僕ら」といった。疑問に思っていると、ドラコが体を半身にした。

奥に見えたのは、白銀、というよりもメタルホワイトカラーの髪の毛。またそばにたっているのはブロンド髪の貴婦人。

「父上と母上だ。話は皆のまえで、と心待にしている。できれば早く来て欲しい、だとさ」

「わかった。準備はできてるから、行こう」

いつの間にか―いることは気づいていたが―そばに来ていたヘルミオネの手を繋ぎながら、ドアの鍵を閉めて階段を降りていく。

「君らが、レイル・クローター、そしてヘルミオネ・デイマイントだな。ドラコから話は聞いている。私はルシウス・マルフォイ、マルフォイ家現当主だ。隣は」

「ドラコの母のナルシッサです。以後、見知りおきを」

ルシウスは手袋を取って握手を求め、ナルシッサは帽子をとって綺麗に一礼した。レイルはルシウスと握手を交わした。

時間もないので、ということ付き添い姿くらましをすることになった。ヘルミオネも出来るが、正確な場所がわからないので今回は付き添う方になる。

レイルとドラコがルシウスに、ヘルミオネがナルシッサに手を繋ぎ、バチン、という音と共に視界が暗転した。

次に気が付いた時には、そこは豪邸の前だった。一応ヘルミオネも

大きい家の娘であるが、この大きき家はなかなか見ない。

おそらくここがパーティー会場、即ちアリシアの家なのだろう。流石聖二十八一族総督家とでも言えるのだろうか、かなり資金を保持しているらしい。

「さて、行こうか。奥でアリシア様がお待ちだからな」

「言葉遣いはどうすればいい？」

「……一応、はじめはしつかりしておいてくれ。お許しがあれば普段通りに戻しても大丈夫だろう」

案内するからついてきて来てくれ、とレイルを呼ぶ声に、レイルは素直に従った。そんな息子の様子を見て、ナルシツサは優雅の微笑んだ。

ヘルミオネはそれを見て首を傾げた。ナルシツサは「いえね」と一泊置き、訳を話した。

「知つての通り、マルフォイは聖二十八一族。それ相應の態度で人接しなさい、とは言っていたのだけれど、そこにティファール様がご入学なさつて。誰が護衛を務めるか、っていう話になったの」

「自分の首を絞めるように立候補してな。見ての通りティファール様一筋だろうか？友人ができるか不安だったのだ」

なるほど、とヘルミオネは納得する。学校でのトロール侵入事件でも真つ先にアリシアが自分たちの部屋にいることに反応していた。

アリシアに対し盲目的ともいえる彼が友人を作る可能性を切るのは、ある種当たり前だったろう。

なんだかんだ言いつつ、やはりドラコも人の子で、二人も彼の親なのだ。自分の子の行く末が気になるのだろう。

「帰ってきて、あなたたちの話が出てきたときは素直にうれしかったわ」

「この際血の話は置いておく。君たちには、ドラコの良き友人になつてほしくてな」

「大丈夫」

息子の友人関係を危惧した二人に、ヘルミオネは即答する。自分の愛する人が、少なからず懇意にしている人を見放すことはない。

それが言外に言ったことがルシウスに伝わったのか、彼はうなずいて、ヘルミオネを会場へと連れて行った。

先にドラコに連れていかれたレイルは、聖二十八一族の時代投手が集まる部屋へと招待されていた。そこには学校で見たスリザリンスをはじめ、十五人の子供がいた。

ドラコ曰く、ほかの十五の一族たちは連絡がつかない、子供がいない、子供が参加拒否したなどの理由で、ここにいるのは親の命令できている者か、次代を継ぐ意思がある者、強制参加ではないけれど聖二十八一族である者の集まりだ。

「あら、レイル。来たの？」

レイルが呼ばれたほうを見てみれば、チープメイクをしドレスに身を包んだダフネがグラスを持っていた。ドラコの分として持っていたのか、グラスは両手に収められている。

「ドラコ用に使っていたのだけれど、あなたに渡すわ。いいわよね？」
「…まあ、いいだろう。僕は自分のを取りに行ってくる」

ドラコはどこか納得いかないながら、酔狂といえるほど慕う人が直々に呼んだ人がグラスの一つも持っていないのは流石にいただけないだろう、と理解してグラスを取りに来た。ドラコがいなくなつた瞬間に背中をたたかれた。

「よう！秀才様！」

「何でここにいるんだ？」

背中をたたいたのはいわゆるフレツジョだった。片側がフレッド・ウィーズリー、もう片方がジョージ。ウィーズリーだ。

確かに彼らは聖二十八一族であるウィーズリーの者だが、彼らには兄がいたはずだ。そちらが出席するべきではないのだろうか、と疑問を持ったレイルだったが、次期当主として定められている家の兄弟姉妹は任意で参加が可能であることを思い出した。

「彼とヘルミオネはアリシア様から直々のご招待を受けられています。一番の来賓にあまりちよっかいをかけないでいただきたいのですが、ウィーズリー・ツインズ」

「ほー、それはそれは」

外用の言動で適当にあしらおうとしたしたダフネだったが、逆効果だったらしく、二人の興味の対象となってしまう。二人はダフネの前から一瞬でレイルの両端に移動した。

「聞かせてくれよ秀才様」

「お前さんあのお嬢様とどんな関係なわけ?」

「ちなみに俺がフレッドで」

「僕がジョージな」

これが阿吽の呼吸とも言うべきか、互いの言葉の切れ目がわかっていくかのように二人はレイルに対し問うた。それに少し驚きながら、レイルはしっかりと答えた。

「別にそれといった関係は何も。気の合う学友、というのが一番しつくりきますが」

「本当にそれだけか?」

「お前さんとデイマイントのご令嬢との仲を疑うつもりはないが、薬指を絡め合う関係だったりしない?」

それでもなお門答を繰り返そうとする二人組にダフネが嫌気が刺してきた頃、妙に周りが静かなことに気づいた。気になって見回してみると、一組の少年少女がレイルの方へと近づいているのを確認した。

いうまでもなく、自分のグラスを取りに行ったドラコと、パーティーの主催者であるアリシア、そしてアリシア側で用意されたであろうドレスに身を包んでいるヘルミオネである。

「こんにちわ、レイル。ダフネも今日は会うのは初めてよね」

「はい、アリシア様。本日もお美しい限りで」

「お世辞なんて要らないわ。いつも通りでいいのよ。なんだったら昔みたいに『アリスちゃん』でもいいのよ?」

「私のようなものまで平等に扱ってくださることに感謝いたします。ですが今、あなた様は聖二十八一族総督家当主の身。ご自分の立場をご理解ください」

「もう……固くならなくていいのに。ごめんなさい、レイル。公の場ではいつもこうなの」

「いえ、構いませんよ、お嬢様」

「…ミオ、どうしようかしら。レイルが他人行儀なの」

「大丈夫。いつもより多目に吸うから」

「…ごめんって」

いつのまに渾名で呼ぶような仲に進展したのか、少しふざけただけなのに、と少しだけ後悔したレイルは改めてヘルミオネを見た。ウエディングドレスのごとく純白のドレスを着て、自らの象徴とも言えるローブもドレスに合うように白く、差し色代わりの浅葱色のショールを腰に巻いて、以前レイルからプレゼントしたバレツタで長い髪を留めている。

チープメイクでありながらきれいなそれは、まるでオーダーメイドの人形のように。故にレイルがアリシアの微笑ましい物を見るような目線に気がつかないのも仕方がなかった。

「…レイル、どう？」

「——あ、えつと、うん。綺麗だよ。傷つけたくないほどに」

「…あり、がと」

レイルのど直球な褒め言葉に、ヘルミオネは顔を俯かせた。無論、それが照れ隠しであることは誰の目にも明らかだった。

「さて、頃合いだし、本会場へいきましようか」

ブラックコーヒー上等な空間を作り上げそうな雰囲気壊してくれたのはアリシアだった。レイルは頷き、ヘルミオネもワントテンポ遅れて首肯した。

場所を移動し、大人も入る本会場に入った子供達はすぐさま当主のところへと向かった。だが、レイルとヘルミオネだけはアリシアのそばにいた。

主催者であるアリシアはカンペも読まずにつらつらと言葉を並べ、三分ほど語った後にレイル達と乾杯した。乾杯したあとは参加者が挨拶に来ていた。

そばでその様子を見ていたレイルだが、アリシアのその総督としての雰囲気を保ったまま、挨拶に来た参加者に述べる挨拶が何一つとして同じものがないことに驚愕した。おそらく、自分ではこういうこと

もできないだろうことも。

十数人挨拶に来て、気づけばウィーズリー夫妻と長男のビル、ツイ
ンズに赤毛の少女も来ていた。夫妻はアリシアの方にいていたが、
子供達は全員レイルの方に来ていた。

「ビル、こいつが」

「こいつこそが!」

「我らグリフィンドールの憎き好敵手スリザリンから」

「寮杯をかつきらつていったレイブンクローの若き天才!」

「クローター夫妻さ!!」

「結婚してないんですがそれは」

ノリノリでレイル達をあらうことか「夫妻」として紹介しやがった
ツインズにレイルは条件反射で突っ込んだ。レイルの妻と呼ばれた
ヘルミオネは耳を少しだけ染めて俯いた。

「あまり彼らを弄るんじゃないよ二人とも。一応初めましてだね、
ウィーズリー家の長男、ビル・ウィーズリーだ。で、こっちが——」
「末っ子のジネブラ・ウィーズリーです。あの……」

ビルとジネブラと握手したのもつかの間、マイナーではあるが有名
人なレイルを前にして一つ質問があるようで。しかしやはりツイ
ンズが邪魔をする。

「うちの末っ子はレイブンクローの秀才様に興味があるようで」

「ああお前さんは違うぞレイル。黒髪黒目の方だよ」

「…フィリップのこと?」

ジネブラはそれがお目当てなのか、ぱあつと顔を明るくさせる。ヘ
ルミオネは女性体であることからジネブラのその表情に納得する。

「ウィーズリーは元来グリフィンドール…頑張つて。ジネブラ」

「あ、はい! 私のご事はジニーとお呼びください!」

どうやらわ^{恋心を持つ女の}かり会える者同士の友情があるのか、ヘルミオネとジネ
ブラは先ほどレイルたちがやっていたような事務的なものではなく
好意的な握手をしていた。それを身ながらお兄^{ビル}ちゃん^{三人}達はうんうん
と頷いていた。

そんなことを話している隙に当主の方も世間話が終わったのか

ウィーズリー家はもとの場に戻っていった。それと入れ替わるようにダフネが来た。

「楽しめてない？」

「ボチボチ、かな」

「ひと、多い」

「それは予想より、って話ならアリシアさまの人徳のお陰ね」

ダフネはそういいながら両親が話し相手になっているアリシアを見た。その瞳はどこか悲しみと喜び、とかくそうといった複雑な心境が映されていた。

「ティファール家前当主、オーロック・ティファール様は元々病弱で、次へと託せないかもって言われてて。奥さまのラズリー様はアリシア様を産んだ一週間後にお亡くなりになって…その時はオーロック様もなにも出来ないからって近所のメズールのところに預けて…」
「で、ダフネが側近に選ばれて、フィリップが来たのか」

「大まかにはね」

少し、想像してみる。自分も父親がいない身だが、甘えの象徴とも言える母親がおらず、そのうえ父親が使い物にならないとなれば。

恐らく、自分では耐えられるものではない。レイルは自覚しているが、そこまでメンタルが強い訳ではない。

それが壊れずに済んだのはゼノやステファニー、そして何よりヘルミオネという存在がいたからであって、そういった類いもしもは…とても耐えられそうではない、とレイルは思う。

「けど、アリシア様は自分の前で無理をしてまで仮面をかぶり続けているオーロック様父親を見ていたお陰で、仮面の被りかたを熟知していた。してしまっていた。だから、少なくとも私はアリシア様が弱音をはいたところを見た記憶がない」

年数にして、実に十二年間。ハリ生き残った男の子・ポッターがのんびりと暮らしている間、彼女はずっと自分をひた隠しにしていた。

それは、とても一人の子供にできるようなことではなく。そうなれば、いつか内側から壊れていくのは必然で。

「私では、癒せなかった。アリシア様の傷を。ドラコも、メズールも、

フィリップでさえ」

だからこそ、ダフネは願う。いつかあの人が、あの人の傷が癒えたならば、と。

「だから、あの人のそばに居続けるの」

.....

懇親会も終わり、レイル達は一度アリシアの部屋にいた。所謂お嬢様らしい部屋を体現した部屋で、ベッドも大きく、椅子とテーブルまでおいてあった。

「御免なさいね、今日は突然。こんなことに呼んじやって」

「いや、割りと楽しめたから大丈夫だよ」

「よそ者を弾き出さないのは、少し驚いたけど」

そう。レイル達はパーティーの参加者達から何も言われなかったのだ。妬みが混じるような目線もなく、寧ろ感謝の意すら込めていたのだ。

「それ、割と答え簡単よ？キーワードは、『ハグリッド』」

グラスにある度数の低いお酒——当主という立場上、特定条件下で酒を飲まなくてはならなくなる故に——を飲み干し苦笑いするアリシアにレイルもなるほど、と頷いた。要は彼らはレイル達に恩があるのである。

前年度のドラゴン騒動で、事件の立役者は魔法省ではなくレイルであるとマスコミが上げたため、必然的にそれが彼らの目に留まり、恩を感じているのだ。今回のパーティーでも初めましてと自己紹介の後には感謝の言葉が述べられていた。

「それに、言ってしまうえばアレだけどミオの血筋も関係してるの」

「まあ、相手がデイマイントだからな」

デイマイント家を敵に回すとは、自分の家を絶命させる事と同義である、とは過去の規律を何よりも重んじる魔法界であるからこそ暗黙の了解となっている。なによりホグワーツ創始者達にが残した文献に書かれているのだから、信憑性はまず間違いないだろう。

アリシアは「それに」と付け加え、綺麗にウイंकをしながら、

「貴方達は、私が守るわ。今は余計なお節介でも、直ぐに隣に立ってみせる」

と言った。不覚にも、レイルもミオも見とれてしまった。

その後、十数分の談笑を終え、レイル達は帰って行った。

次会うときはホグワーツ。傍に居られるように、と更なる努力をすることをアリシアは決意し、夜は更けていく。

命短し

夏休みも終え、やはりひとつのコンパートメントにレイル、ヘルミオネ、アロシア、フィリップ、メズール、ハーマイオニー、ダフネ、マルフォイが集合しトランクの中に入ろうとして、レイルははたと気がついた。

「……いつの間にか部屋が大きくなっている」

部屋が、というのはトランクの最大容量の事ではなく、トランクの中の世界のど真ん中に立っている小屋のことである。小屋といっても中くらいのコテージぐらいの大きさだったのだが、今は一回り、いや二回りぐらい大きくなった。

別荘にいる間は生物水入らずで、自然に近い活動ができるように、と予め防腐対策などもして餌を置いていったので中には入っていない。ので、誰かが指示した、ということもない。

ヘルミオネも疑問に思っている中、その答えが天井が開くと同時に出てきた。

「私がやったのだ、主よ」

「ミネマ」

ミネマ。世界最大の蜘蛛アクロマンチュラであり、割とトランクの古参に入る住人。

なんでもミネマが言うにはフォウが外で割と知り合いが増えているからここも大きくしよう、ということでもボウトラックルやら角水蛇クロエ達やらその他もろもろに頼んで素材を調達してもらい、拡大工事を行ったらしい。

と、言うよりも。

「お前の仕業だったのか、フォウ」

「ンキユ？」

原因であるフォウは先程からメズールに撫でられていた。恐らくこの他にもきつとやらかしているだろう、レイルは早急にライトニン

グボルトで探索をすることを決めた。

そのままレイルのレポートの発表、お土産交換、パーティー報告などホグワーツに着くまでには話題は尽きない時間だったが、三回ほどトランクがノックされたのでレイルは梯子を登っていった。トランクを開け、客の顔を見たレイルは微笑んで「いらつしやい」と言いながら手を引いた。

そこから現れたのは新入生であるジネブラだった。

「紹介するよ。この子はジニー、ウィーズリーの所の末っ子」

「は、はじめまして、ジネブラ・モリー・ウィーズリーです！ジニーとお呼びください！」

勢いよく腰を直角に曲げ頭を下げるジネブラ。緊張しているのか、その声は少しだけ震えていた。

何故彼女が彼らがいるコンパートメントが分かったか、という事だが、実はヘルミオネがジネブラ宛に手紙を一通だけこしらえていたのだ。どの辺のコンパートメントに入るかだけを記載したのだが……よもや、フィリップでさえ一発で当ててみせたとは思えないだろう。

緊張しているのがわかるジネブラの様子にアリシアは微笑みながら近づいた。

「はじめまして、では無いけれど。アリシア・ティファールよ」

「私はメズール・キラグリードー！よろしくねー、ジニー」

「初めまして、ハーマイオニー・グレンジャーだわ」

「久しぶりね、ジニー。私の紹介は要らないでしょ？」

「なら、僕もだな」

アリシア、メズール、ダフネ、ドラコの順番で自己紹介（？）をしいった。そして、ジニーの^想大本命。

「まあ、はじめまして、だな。フィリップ・L・ハワード、好きに呼びたまえ」

「は、はい！では、僭越ながらお名前で……」

フィリップは始め存在を気づかないながら自己紹介をし、ジネブラはそれに頬を僅かに紅く染めながら返した。それを見てハーマイオ

ニーはどこか胸がモヤモヤしたような感覚を覚えるが、それは今は放置した。

一通り自己紹介が終わった後、バチンという音がした。数名はそれが何か分かっていなかったが、ドラコ、ダフネ、アリシア辺りの貴族層は一瞬でこの音の招待を看破した。

「レイル、雇ったのか？」

「雇ったというか……いつの間にか住み着いていたというか」

「けど、普通のとは確実に違う」

ヘルミオネが言った違う点は、その音の方を見ればすぐに分かった。普通ならあるはずのないパーカーとズボン、そしてスリッパを身につけているのだから。

「お、帰ってたのか、人間^{レイル}」

「……うん、ただいま、アリー」

「何やら客人も多いらしい。パイはいるかい？」

「お願い」

「了解、クイーン^{ヘルミオネ}」

割と柔らかな大きな目玉、とんがった鼻に羽ばたかせれば少しは受けそうなパタパタする耳、小柄でポケットに手をつ込んだ、どこかニヤついた顔のソレは、指を鳴らしてパイを用意した。この中でこの生物を知らないのは、恐らくハーマイオニーのみ。

「彼はアリー。屋敷しもべ妖精なんだけど……初めからあの格好だね」

「私のことをクイーン、と呼ぶのだけれど、それ以外は人間で統一してる」

「あのパーティーが終わった後にトランクに入った時にのんびり紅茶を飲んで……」

そう言いながらレイルはアリーを見るが、やはり足を組みながら紅茶を飲んでいた。ドラコもここまで気ままな屋敷しもべ妖精は見たことがないのか、あるいは自分の家のとを比べているのか啞然とし、口が開いたまんまだった。

という時に、やはりマグル出身のハーマイオニーはやはり分からな

かったようで、アリシアに問うた。アリシアは頷きながら説明を始める。

「屋敷しもべ妖精、見た目はこんなものだけど、基本的なのはボロボロの枕カバーを来てるのだけれど……」

「大体は一つの家に住み着いたら一生をそこですごし、あらゆる家事を賃金なしでやる。家政婦を雇うよりも遥かに効率的だ」

「何かミスをすれば自分から罰をかす、って言うこともあって、一部の魔法使いは屋敷しもべ解放を目論んでただけど、他ならぬ屋敷しもべ妖精達によつて鎮圧されたつていう歴史もあるわ」

「彼らにとつて人間への奉仕こそ最大の幸福、みたいな所があるから」
聴きながら、ドラコの際に一瞬だけ顔を顰めたハーマイオニーだったが、アリシアの「人間への奉仕こそ最大の幸福」という発言に非常に不服そうな顔をした。無理もないだろう、マグルの世界は働く者に賃金を与えることは常識と言つて過言ではないのだから。

しかし、それを鑑みてもアリーという屋敷しもべ妖精は常識から大きく逸脱していた。優雅に紅茶を飲む姿はとて^{ひたすら}も只管こき使われるためだけに生まれた存在とは思えず、普通の人間とさして変わらないように見える。

「おっと、お客さんの追加だな……二人か？」

アリーがニヤついた顔を崩さずに指パッチンでパイをもう二つほど用意する。レイルはため息を吐きながら梯子を上がって行った。

「ええつと……あなた」

「おうおう、普通にアリー、でいいんだぜ？それといった個性も何も無いんだからな。お前らのような人間と違つて」

「そう……じゃなくて。アリー、あなたなんで分かつたの？」

「このパーカーをくれた人^{ゴシユンサマ}間が変に弄つてくれたからな」

「なっ!？」

「冗談だ、悪いな人^{ハーマイオニー}間。答えは魔力反応さ」

トン、と一瞬でバチンという音を鳴らしながら姿くらましをしてハーマイオニーの目の前まで移動し胸のあたりを押すアリー。なんという魔力の無駄遣い。

「魔力の質が似ているから兄弟か、双子か……この中で一番質が似ているのはジニーおまえさんだな」

「……ごめん、普通に心当たりがあるわ」

兄弟、もしくは双子、という点だけでもジニーには心当たりがあった。そも、彼女にはホグワーツの知り合いが少ないのだが、それ以上に彼らは何かをやらかしてくれる可能性を失念していた。

「よう皆様方、邪魔するぜ？」

——すなわち、ウィーズリーフレッドとジョージ・ツインズである。

……

「しかしすげえもんだよな」

「この管理、お前達夫婦でやってるんだろ？」

「忙しいだろうにこの綺麗さ」

「ぜひロニー坊やに見習って貰いたいな」

上がってきてそうそう、二人は物色を始めた。危ないものは基本的にレイルの研究室に置いてあるものの、たまに失敗作も転がっているこの部屋を「綺麗」と称するツインズ。

逆にそこまで言わせるロナルドの部屋を見てみたい気もしたレイルだが、それはそれで何やら面倒なことになる気がしたので辞めることにした。

二人が入ってきてからしかめっ面なダフネとドラコを宥めるアリア、フオウを愛でるメズール、アリーとチェスを始めたフィリップとそれを眺めるジネブラ、という割とカオスなトランクの中。レイルは既に慣れてしまっている現状にため息が出そうになった。

「しかし悪いなハワード」

「うちの坊やが突つかかったんだっけ」

「形だけで悪いが謝罪はしよう」

「うちの弟が済まなかった」

「……フレッドとジョージが謝った!？」

けして謝ることがない、謝ったとしてもふざけてでしか謝らない、というレットルを自分で貼りに行ったツインズが、目の前で、妹がいる前で謝った光景を見たジニーは素直に驚愕した。フィリップはそ

れに一瞥し、ナイトを動かして答えた。

「別に、どちらかと言えば突っ込んだのは此方だ。貴方達が謝る必要は無い……ステイル・メイト」

「……マジか。一応負け無しだったんだがな」

「真つ先にフルーズを出してきた時は焦ったんだけど」

ステイル・メイト。それは、チェスのルール上どちらも手を出せなくなり停戦状態となる事を指す。

また、フルーズ・メイトとは、チェスの性質上相手が思い通りに動いてくれた場合発動する四手詰み。まさか屋敷しもべ妖精が頭がいいのは分かるがチェスに精通しフルーズを知っているとはフィリップもよもや思わなかった。

コトリ、とチェスの駒を置いたフィリップは立ち上がり、ツインズの方に向いた。

「あれはただの僕のわがままで、偽善なだけだ。それに関して第三者にどうこう言われる筋合いはないし、謝罪もはつきり言つてどうでもいい」

「それでもさ」

「こういうのは形が大事だからな」

「では、受け入れよう」

杖のメンテナンスをするのか、フィリップは杖を取り出して杖台に置いた。敬語も使わないようなプライベートな言葉だったが、ツインズはそれで満足だったようでアリーに二人1プレイヤーという反則ルールでチェスを挑んでいた。

結局、ツインズの頭脳を持つてしても6敗1引き分けを取るに止まり、そのあとは着替えてホグワーツ駅に着いた。男勢がコンパートメントに、女勢がトランクに、ということもなく、ミネマが客が多いことを思い、部屋を増やしたらしいのでそちらで着替えた。

ちなみにツインズがチェスで頭をひねらせてる間、レイルはアリーが何か大きな改造をしていないかを確認するため箒でトランクの中を一周していた。もちろんヘルミオネも一緒に行った。

途中、赤毛の同級生の馬の骨がフィリップに対し突つかかって行こうとし

だが、その前に自らの妹の神をも殺せるような目線に萎縮しそのままセストラルの馬車に乗って行った。件の妹は楽しんでボートのほうに乗って行ったが、あの兄はここ一年間はずっと沈んだまんまだろう。

結果先送り。どつてもいいことには関わらないレイルはヘルミオネと共にホグワーツの門をくぐった。

これは酷い

始業式が終わり、これから初めての授業になる。なるの……だが。それよりも先に、組み分けの結果だけを伝えるとなると……ジネブは血が争えず、もれなくグリフィンドールへと向かってしまった。その様子たるや、まさしく亡霊とも言え、あたり一帯がお通夜ムードとなるほどに落ち込んでいてツインズが珍しく兄らしく慰めていた。とはいえども別に会えない訳では無い。大体は部屋にこもりつきりというフィリップでも日光浴も散歩もするし、暇があればレイルの部屋に行く。更には今年も勉強会を開催する予定なので、会う機会がゼロでは無いことをツインズがジネブラに伝えると、目を輝かせて喜んでいた。

朝食を取ろうとレイルとヘルミオネが大広間へと行くと、何やらちよろどフクロウが手紙やら何やらを届けに来るタイミングだったのか、窓から一斉にフクロウがやってきた。レイルは以前も見た事があるが、やはりこの光景はいつ見ても壮観だ。

「おはようレイル」

「おはようフィリップ」

「どっちの親も薄情なもんだな。君の方は放任主義で、こっちは自由主義ときた」

挨拶を交わしつつ、新学年初とも言える皮肉を言ったフィリップの手元にはひとつの手紙。その内容は……まあ、少しばかりあどけない文字ということは弟妹なのだろうが、内容が本当にはつちやけているので、ここでは記さないこととする。

フィリップの隣にレイルが座り、その隣にヘルミオネが座ると共に、何やら一匹のフクロウがコースターチに顔面ダイブをかましたようで、グリフィンドールの机が散らかっていた。フクロウは赤い便箋をその場において、覚束無い飛行でどこかへ行ってしまった。

「……吠えメールか」

「どうするの？」

「無論、止めるさ」

そういったフィリップは杖を取り出した。どうならあちらもちょうど開けたところのようで、食欲不振になるほど馬鹿みたいに大きな声で吠え出した。

何偽りなし、だがどうならウィーズリーの母親は周りの影響を考えないようである。フィリップが無言呼び寄せ呪文で手紙を呼び寄せ、「目」でどこを潰せば静かに止まるかを見て粉々呪文で粉碎してしまった。

「今の時間にはいないだろうけど、本当にウィーズリーは周りを見ないのだな。食事を静かにする主義の人間だっているだろうに」

それだけ言って寮へと戻っていくフィリップに、皆から盛大な拍手が送られた。ロナルドはまたアイツか、と呪詛を送らんとフィリップを睨みつけていた。

約一名にとって最悪な始まり方をしたが、授業は別に滞りなく進んでいく。スネイプの助手になり、フリットウィックと共に魔法を教え、マクゴナガルとコツを教える。

と、考えてみれば割と教師側にたっているな、と思いつつ、闇の魔術に対する防衛術の教室に入る。クイレルがいた頃ニンニク臭かったようなものではなく、一応は清潔にしているようだ。

今年の闇の魔術に対する防衛術の教師は、クイレルが——言葉通りになるなら——殉職してしまったため変更、代役としてギルデロイ・ロックハートなる者が充てられた。

先に授業を受けたドラコ曰く——

「ああ、酷いってもんじゃない。今すぐにも辞めさせるべきだね」

また、同じく授業を受けたハーマイオニー曰く——

「一応ほかの女子たちがソワソワしてるからできる人なのかなって期待してたのだけれど……割と真面目にサボタージュを考えるわ」

と、辛口評価……といえは聞こえがいいが、単に言えば悪評しかないのである。一応世間からはなにやらチャホヤされているらしいが、教師の才はないらしく、ピンズやあのクイレルの方がマシだと言う。

どんな間違いを起せばそんなことになるのか、少しだけ気になったが、そんなに酷ければサボタージュでもしようかとレイルは考えた。といつても、別に酷いだろうことは教材の時点で察せていた。

ギルデロイ・ロックハート著作小説のオンパレードだったのだ。初めは彼のシンパかとレイルも思っていたが、まさか御本人だとはとても思わなかった。

一応、レイルも論文という体で文字をなぞったことはあるが、それにそこまで執着し、教え子までにも広めようとは思わない。せいぜい「そんなことも書いたな」ぐらいの認識である。

だというのに、彼は教材全てを自らの小説にしてしまったのだから、なんとという自意識過剰か。一応女子生徒からの人気はあるものの、新任紹介の時の男子達の目は冷ややかだった。

普通な目をして恋する乙女その1いるのはハーマイオニー、恋する乙女その2ジネブラ、興味欠けらも無い方々アリシアやメズール、レイルの奥様ダフネそして、ヘルミオネぐらいで、あとは既にそういう相手がいるぐらいの女子。恋は盲目と言うが、今回ばかりはその盲目さが一役買った言うのはある種の皮肉だろうかと考えてしまう。

因みにフィリップは——割といやいやに——小説を読んだ際、

「小説とは実際にあつたことを書き写したノンフィクション、またはただの空想なフィクションの二極化を指す言葉だ。こんなあつたようでないことを書かれても響くわけがない。これで心を奪われているのはただ文字をなぞるしか脳がないヒトゲノムだろうさ」

と、辛辣的な評価を下していた。彼がこうも誰かの物語を卑下することは珍しく、一番評価していたのが人魚姫の原作版であることからそも好みの問題であることが思われるが、正当な評価であることは誰の目にも明らかであるので、普通に見ればあれは駄作、ということだろう。

席につき、数分すると、教室の上の部屋のドアをわざとらしく大きな音を立てながらギルデロイが登場した。一部を除き、女子生徒は蠱毒にでもかかったように頬を赤らめた。

「私だ。ギルデロイ・ロックハート。勲三等マーリン勲章、闇の力に対

する防衛術連盟名誉会員、『週刊魔女』五回連続『チャームリング・スマイル賞』受賞。」

下手な芝居を打つように……ではなく、割と道に入ったような感じ
でその後も嘘か本当かわかりづらい自己紹介をしていくギルデロイ。
その後、殺意に目覚めたレイブンクロー生徒の目線から逃げるよう
に、ひとつテストをすると言った。

が、その内容は——どこまでもナルシズムを突き通しているよう
で、ギルデロイ・ロックハートの好きな色はなにか、といった自己愛
性人格障害といっても、差し支えないほどの自分に対する質問ばかり
であり、一貫として闇の魔術に対する防衛術には関係ない。優等生の
ハーマイオニーがサボタージユを考えるわけである。

とりあえずレイルもヘルミオネもフィリップもメズールも全員が
白紙で出した。フィリップは裏技地球の本棚を使ってもよかったのだが、こん
なつまらないことに本棚を使いたくはなかった。

何やらギルデロイはテストの結果にご不満のようだが、何故これで
満点者が出ると思っているのかが不思議でならないレイル達であつ
た。そんな四人を他所に、ギルデロイは鳥籠のようなものを布をかぶ
せた状態でどん、と置いた。

「気をつけなさい……魔法界で最も穢れたもの達との戦い方を教える
……それが私の使命なのです！」

どこまでも三文芝居を続ける気なのか、彼をどうでもいいと思つて
いる人間からは確実に演技だと見抜けるような言葉を綴りながら、勢
いよく布を放った。中には青い体軀に大きな耳、そして額から生えた
ふたつの触覚が特徴の小人が大量に詰め込まれていた。

「こいつらは「レイルー……これなにー?」」

ギルデロイが説明しようとしていた時にパドマからの横槍が入つ
た。レイルはひとつ頷いて、割と単純に説明した。

「コーンウォールのピクシー。性格は狡猾でいたずら好き。魔力反応
のあるものを壊すことを生業にしているところが少しあるから、杖と
かは折られないように守った方がいいかな」

「よっ！モンスターマスター！」

「補足しなくていいのか？大図書館！」

「それをもし僕のことを言っているのなら、別にこれといったことはないよ。強いていえば、硬直呪文でも唱えてやれば何が何だかわからなくなつて固まるからその隙に集めてしまえばいい」

いつの間になあだ名がついていたのか、と少しだけ驚くふたりだが、外面的にはいつも通りである。説明を取られたギルドロイは左目を痙攣させながら、それでも笑顔を絶やさず「ありがとう」と言った。

「では……今ので彼らのことを知つた君たちの、お手並み拝見という！」

合図もなしに鳥籠を開けた結果、一応杖を構えていた生徒達もびつくりしてしまい、杖や教科書などを何人が奪われてしまった。フィリップとレイルは溜息をつきつつ、メズールは飴玉を舐めながら、ヘルミオネはレイルに寄り添うように立ち上がった。

「「イモビラス」」

四人の杖が同時に光ると共に、硬直呪文を実に四回分くらつたピクシーはその場で完全に止まってしまった。呼び寄せ呪文でピクシーに奪われた杖などを取り返し、ギルドロイの方へと向き直つた。

「あー、つと……うん！素晴らしい！私ほどでないが、素晴らしい技量の持ち主たちだ！皆、ヒーロー達に拍手を！」

何とか、といった表情で馬鹿なことをしてくれた、という目線を逸らすために、不本意ながらという内心を抑えつつギルドロイはレイル達を称えた。一応それにならつてか、生徒達もレイル達に感謝を述べた。

と、ここでヘルミオネがひとつの箱を取り出した。なんだなんだ、と野次馬根性なのか、ざわつく生徒を他所目に、ヘルミオネは箱を開けた。

「ふう……いかなのう、ロックハートとやら。確かに嘘と八百長と責任転換は人間の特権じゃが、それで悪事を働けば無問題で罪なのだと、教わらなかつたのだな」

「なつ!?……誰です？貴方は」

箱から黒い煙を吐き出しながらローブを身にまとった老人が呆れながら出てきた。それに全員が驚きながら、真つ先に平静を取り戻したギルデロイが問うた。

しかし、彼の顔を知らずとも、名前だけを知っているだろう者は「こんなことが出来る人は限られる」ことを知っている。そこから、ヘルミオネやレイルと関連付けた時に誰かが呟いた。

「――ゼノ・ディマイント……」

世界の見張り役の登場に、教室内はざわついた。ゼノは何も言わず、レイル達以外に忘却呪文を無言で施し、速攻でギルデロイを回収。本来出来ないときれる姿晦ましをしてどこかへと消えた。

一瞬にしてレイル達4人以外に忘却呪文を施したにも関わらず、しつかりとギルデロイが来てからゼノとともにどこかへ行くまでが調整されて消えているあたり、ダンブルドア最強説を唱えているダンブルドアのシンパはこれを見れば自ずと彼が最強であることは認めざるを得ないだろう。いつまで経ってもギルデロイが来ないこと、レイル達が立っていることに疑問を持ちつつ、生徒達が再びざわめき始めた。

「あー……」

「対策、ないよ?」

「ディマイント嬢、箱を開けるとしか言われていなかったのか?」

「うん」

「……まずいねー。どうしようこの空気」

どうやらゼノはなんの対策も考えないままギルデロイを捕まえただけで、この微妙な空気までは予測できていなかったそうだ。その時ボタン!と大きな音を立てながら一人の女性が飛び込んできた。

全員見覚えのない人であり、約一名だけ、怪訝な顔をしながら杖を取り出した。女性は杖を取り出すと、積み上げられていたギルデロイ著作の小説を浮かび上がらせ、あとかたもなく消した。

それにより女子生徒たちからはブーイングが起こるが、レイルが杖を振り失神呪文を飛ばすと女性は見向きもせずそれを防護呪文で霧散させた。それによりレイブクロー生は、彼女がいかに有能かを

理解すると共に、なぜレイルが攻撃を仕掛けたのが分からなかった。当のレイルはというと杖を女性に向けたままワナワナと震えていた。女性はパン、と手を打ち鳴らすと共に深呼吸し、笑顔でこんなことを抜かした。

「ゴメンなさい！ ロックハートはちよつと来れなくてね。新任紹介の時にいなかったけど、私が補助で来てたんだ。準備に手間取っちゃって、あとホグワーツの中で迷ったからさあ……だから時間ないけど自己紹介をば……」

女性は杖で空中に筆記体で文字を描き、くるつと反転させて生徒へと見えるようにする。だがそれはレイルにより爆散してしまい、見えなくなってしまった。

我慢の効かなくなったレイルは杖を下ろしたが、鬱憤とともにこう叫んでしまった。

「なんで……いるんだ！ 母さん！」

「皆が知るだろうレイル・クローターの母親、ヘルミオネ・デイマイントのお義母さん——ステファニー・クローターです。よろしくね、みんな！」

母親とは

ギルデロイ・ロックハート、失墜

デジャヴのような気がするが、そんな見出しがデカデカと書かれた預言者新聞は、瞬く間にイギリス中に広まり、そして一部例外はあるものの、ありとあらゆる女性を恐怖のドン底へとたたき落とした。小説家にして勲三等マーリン勲章を授かるに値すると言われた魔法使い、ギルデロイ・ロックハートが魔法界史上最大の詐欺師であると多少尾鱗びれを大きくして、ゴシツプを書かせたときの内容の捻れ様には右に出るものはいない、と言われているリータ・スキーターに吹聴したのだ。

なお、吹聴した人物はゼノであるが、その全ての責任を「捕まえるためだけにホグワーツに就任させたダンブルドア」だけに擦り付けたため、デイマイント家はノーダメージ、代わりにダンブルドアが全てのヘイトを請け負うこととなった。哀れとも言えようが、元々行政府などからいい顔をされていなかったでその辺の人間からは今回のことは割と「いい事」としてカウントされているようだ。

もちろん預言者新聞はホグワーツにも来るので、女生徒がこのことを知らないわけではない。故に大広間はまさに阿鼻叫喚となっていた。想い人がいる女性生徒は多少同情し、男子生徒にとつては「まるで意味がわからんぞ」とも言える光景だった。

全員のヘイトを持っているダンブルドアだが、実は諸事情でいまホグワーツにいない。さすがにこんな状況で世間に身を晒すのは良くないと判断したのだろう。

よって、本来校長席となる場所は空席となっている。ダンブルドアに恨みを持つ者達からすれば不完全燃焼もいい所だろう。

ギルデロイがいなくなったことにより、闇の魔術に対する防衛術の教師がいなくなった訳だが、それに関しては一部の生徒しか知らない

わけであり、その事についてマクゴナガルから連絡があるようで、今日の大広間には生徒全員がいた。悲しみに明け暮れるものが多すぎるが、何とか平静を保ったまま、マクゴナガルが正面にたった。

「皆さん」存知の通り、前闇の魔術に対する防衛術教諭のギルデロイ・ロックハートの功績は全て偽りのものでした。彼が執筆した物語の元となる人物の元に赴き、記憶を抜き取り、忘却術をかけていたようなのです。その執筆能力と忘却術だけは天才的でした。今は昨年ハグリッドが連行されたアズカバンの裁判所にいるはずです。ちなみに校長先生は諸事情によりホグワーツを開けています。少しすればまた帰ってきますから」

真実を再度突き付けられた故か、理想像を壊されてしまったためか、すすり泣く者、号泣する者、果ては気絶する者、と中々の力オスとなっていた。気絶者はマダム・ポンフリーによって運ばれて行った。

あたりを見回せば、レイルの部屋に入り浸るメンバーも友人の慰めに手一杯だった。アリシアとダフネは頭を撫でたり背中を摩ったり、メズールは抱きしめてあげたり、ハーマイオニーやジネブラも手を握ってあげたりと、対応に困っていた。

皆がみな恐慌となっている時に、裾口から一人の女性がでてきた。レイルはそれを確認するなり杖を持って魔法を放とうとするが、ヘルミオネに宥められて渋々杖を下ろした。

突然現れた女性に戸惑う生徒達が落ち着くのを待って、マクゴナガルは一度頷いてから、彼女を横に立たせ、言葉を発した。

「さて、当然のことですが、闇の魔術に対する防衛術の教師がいなくなったので補填しなければなりません。そこで私は個人的にも交友があり、尚且つ優秀な魔法使いということ、彼女を推薦しました。名を、ステファニー・クローター。皆が知る、ホグワーツでも十本指に入るほど優秀な生徒、レイル・クローターの実母に当たります」

レイルの母親と聞いて、再びざわついてしまい、今度は収集がギリギリつくかどうかと言うぐらいになってしまった。無理もないだろう、上級生ですら数人実力を認めているレイルの生みの親であるから

には、彼女もまたトンデモ性能なのかと疑ってしまおう。

マクゴナガルはその後の流れを全部投げ捨て、ステファアニーの紹介にあてた。ステファアニーは微笑みながら、教師席の前に立った。

「あー……レイル？レイルー！ちよつと出てきてー？」

いきなりのご指名にイラツときながら、渋々レイルは杖を持って大広間の通りに出た。ざわつきが収まらぬ中、ステファアニーも杖を出しながらレイルの前に立つ。

「……形式は」

「円状制御飛翔^{サークルロンド}、武装解除呪文、防御呪文縛り」

「時間は」

「50秒ほどでいいわ」

なんだなんだ、と騒がしくなっているが、今のステファアニーの単語二つで理解できるのは数人だろう。マグルの知識に富んでいる者、あるいは……世界の全ての知識を持つ者。

ステファアニーは増幅呪文^{ソノラズ}を使い杖を喉に押し当て、声を拡大させた。が、1度目は大きすぎて外にまで聞こえるかもしれないほどの爆音となってしまった。

「今からちよつとしたデモンストレーションを行います。私がずっとここにいるかはわかりませんが、もし今の一年生を卒業まで見届けることになるのなら、君たちにはいずれどこまで来てもらいます。こんなことが見れるのは少ないだろうから、目に焼き付けるように！」

喉から杖をどけたステファアニーはレイルの方に向き合う。レイルも杖を握りしめ、そしてステファアニーと同時に空へと飛んだ。

急な事だったので、全員が啞然としてしまった。いや、レイルが飛んだのは前年度で見た覚えがあるものはそこまでの衝撃はなかったのだが、問題はそちらではない。

ステファアニーも空を飛翔していることと、そのあとを追うように付随する白い煙のような何か。

それに反応しているのは、教員席のスネイプただ一人であるが、今はそれに関して何も言うまい。本当に気にすべきことは、先ほどから繰り返される赤い閃光の応酬だ。

「結局、見つかったのか？母さん」

「ええ、お陰さまでね。今年が終わり次第回収しに行くわよ」

「どこにいるの？」

「伝承どおりの場所に」

そんな世間話もしつつ、しかしやることは互いに本気。ぐるぐると円を描きつつその場をずっと回りながら、合間合間に武装解除呪文を放ったり、それを上下に避けたり、防護呪文でさばいたり。

この結末は、どちらも杖を奪えずに引き分けという形になった。思わぬデモンストレーションと、箒が使えなくても空を飛べる魔法があることに夢を抱いた少年少女には大ウケのようで、生徒達からは盛大な拍手を送られていた。

地面に降り立ったレイルはそのままステファニーの方に見向きもせずに、ヘルミオネのもとへと向かった。ステファニーはそれを少しだけ物憂げに見ながら、しかし数秒後にはそんな表情を隠すように微笑みながら、広間の自分の席へと戻っていった。

翌日からはステファニーの授業が始まるのだが、これがとても大好評となった。わかりやすく、丁寧で、しかしユーモアもあり、目線は自分達と同じというとても心身になって教えてくれるとてもいい先生という評価をステファニーは生徒達からもらった。

先生からの評判も良く、特に用務員のファイルチから信頼を勝ち取ったことが功績だろう。流石モンスターマスターの母親というべきか、ミセスノリスとも仲良くなっている。

そんな一方で、やはり完璧に誰からもすかれる人間はいないのか、一部の生徒から反感を買っている。それはやはりいつも通りのスリザリン生複数名と、あいつの母親なのだからろくなこともないだろうと勝手な言いがかりをつけているロナルド、そして、一番以外とも言えるのが――

「ねえレイル、ちよつと部屋行ってもいいかな」

「却下」

「……」

「ねえレイル、お茶しない？いい茶葉が「要らない」……」
「レイル、少し話を「暇じゃない」……」

何を隠そう、実子であるはずのレイルだったのだ。これには多くの生徒が難色を示し、なんならセツティングしようかと心優しき生徒が協力をしようと躍起になるのだが「いいの」といって疲れたような笑みを浮かべながらステファニーは断るのだ。まあ、それもそのはずである。

彼女はレイルが生まれて、食料が母乳であるとき以外の全ての子育ての行程をディマイント家に任せていたのだ。アホらしくなるほどに、故に自分のことを放っておいたままだこかへと姿をくramしている母親に心身になれるか、と問われると、大体の人が首を傾げるだろう。

レイルが彼女を毛嫌いする理由はこれだけではないのだが、これ以上書き記していくと割と面倒なことになるので割愛する。

とはいえそのような家庭事情を持っているゆえに、レイルはステファニーをどうでもいいものとして扱うこととなっている。ハリーのような心温まるかもしれない何かを持っているならば、会えなかった分しっかりと甘えるのも吝かではないのだが、残念ながら彼女がレイルを放置した理由は「息子よりも未知」を取ったからであり、ならばとレイルは反面教師からわざと教わり、「^{母親}家族よりも^嫁家族」を取っただけである。

インガオーホー、結論的に、神秘部とかいう変人共の巣窟を現場にするだけあって、それは子育てにおいてもそうらしく、ここまで完全な放任主義も今日日見ないだろう。それを知った生徒達は、皆口を揃えて

「あんたが悪い」

と言うので、この件はステファニーの力だけで解決しなくてはいけなくなった。それでも彼女を応援しつつ手助けしないのは、親を嫌っているレイルへのささやかな謝罪と有り余るほどの同情があるのだろう。

そしてこれはバカバカしい噂だが、とある男教師が女教師に呑み

に付き合わされているらしい。その酒は決まってバーボンだそうだ。

「ねえ先輩、なんでこんなにうちの息子は反抗的なんですかね？」

「私に聞くな」

「連れないこと言わないでくださいよ……同卒の好じよしみやないですか」
「知らん」

不思議少女は密かに笑う

母子の仲が邪険なまま過ぎていくが、別に誰もそれを指摘も仲介もしないのでどうしようもなく。レイルも自分から歩み寄ることをかくなり捨てているため、ぶっちやけステファニーが根気よく続けていくしかないのだ。

現在レイルは一年前に取得した禁じられた森の無許可入出権を行使し、土曜日だから、というのを口実にトランクの住人の一部をここへと放そうとやってきている。一応勝手に出入りできるとはいえなんの報告もなしに行くのは心配をかけるかと思いたたまたま出会ったスネイプに告げている。

「さてと……カム、ノノ、コール、ライナー、ナリフォーレ、フリーヤ、リデイ。みんな出ておいで」

トランクをあけ、杖で二回叩く。それが外出時の合図だ。初めに出てきたのは大型の雌雄つがい番の狼、ヒップグリフ二匹、ズーウー、サンダーバード、ニューレール・ユニコーンの計7体だ。

カムとノノは響狼と呼ばれる基本的に沼地に生息し、広範囲を番とともに旅をする巨大な狼で、二匹は旅をしている最中ノノが大怪我をした際、レイルに助けられてトランクの住人となった。見た目もさながら、牙や鬣は美術品として飾られていたこともあり、現在はそのままで個体数が多い訳では無い。

トランクの中には響狼の番は彼らしかいないので、子供が出来るとしてもトランクの子孫は親近相姦の成れの果てなので、いずれは外に放すことも彼らと約束している。因みにコミュニケーションツールはやはりネイキッドたちシンドミツションである。

コール、ライナーは以前にゼノが「トランクの中の賑やかしに」といってオークションで売られていたので保護するために従者を買わせたものだ。一応隷属扱いではあるが、そのような縛りはないに等しく、トランクの中では四足獣の纏め役のような立場にいる。

コールは普通のヒツポグリフの雌なのだが、ライナーはヒツポグリフとグリフオンのハーフという希少種にも等しい。因みにライナーは雄である。

雑学程度にヒツポグリフとグリフオンの違いを解説しておく、グリフオンが「鷲の頭と翼を持ちライオンの胴体をもつ獣」で、ヒツポグリフは「グリフオンと馬を交配させた動物」である。結果として突然変異なのか馬とロバの交配種であるラバのように「鷲の頭と翼と鉤爪を持ち、馬の屈強な脚をもつ獣」というありえないものへと進化した。

現在でも交配成功例はライナー以外におらず、どこからかデイマイント家が保有しているという情報をリークした金持ちが金をつぎ込もうとしているが、さすがに蝮蛇と分かっているからか直接的に手を出そうとしている輩は少ない。それでも現在魔法界でデイマイント家以上の財力を有している方が少ないのだが。

ナリフオーレは二年前、すなわちホグワーツに入学する少し前にトランクの中に入った新参者のズーウーである。中国旅行の際、やはりサーカスの一員として虐待にも等しい状態で飼われていたのでデイマイント家が買収、レイルに預けたのだ。

未だ人間に臆病なのは変わらないが、激昂すればありとあらゆるものを駆逐する生きる兵器と呼ばれる攻撃力は健在である。が、一応言うことは聞くのでそういうことは滅多にない。

フリーヤは絶滅危惧種サンダーバードの生き残りであり、さらにこの個体は昔、ニュート・スキヤマンダーが保護した個体の子孫に当たると言われている。幻の生物とその生息地であとがきの方にちよこつと書かれていたが、ニュート・スキヤマンダーが「なお、私が保護し、とある一件でアリゾナに帰ることになったサンダーバードのフランクの子孫は私の盟友であるヘルミオネ・クローターに保護されている」とあり、フリーヤはその子孫、という説はあながち本当であると言えるだろう。

最後にでてきたリデイだが、ニューレル・ユニコーンという世にも珍しい「雄が白の体毛」を持ち、「雌が黒の体毛」を持つユニコーンだ。

そして特徴的なのが、激昂すると雄は赤の、雌は金のラインが背中に走る。

前年度、スネイプに「ユニコーンの血を提供してくれ」と言われた時に提供したのがリデイの血である。そして、ヘルミオネの正体をダンプルドアに明かした時に言った「読心術をしかけてくる動物」というのも彼らである。

ユニコーンといえば基本的に処女にしか心を許さないことで有名だが、ニューレール・ユニコーンは比喻表現なしに心を読み、心が綺麗であると判断した者だけに懐く。結果としてレイルとヘルミオネに懐いたわけだ。

そしてこれは文献にも載らず、レイルでさえわかっていない事だが、ニューレール・ユニコーンは「永遠に愛する者」がいるならば、真なる忠誠を主人に与える。だからヘルミオネもレイルも、普通以上に懐かれているのである。

リデイはそんなニューレール・ユニコーンであるが、他の個体よりも些か激高しやすく、よく背中にラインが走っている。仲間思いといえど聞こえはいいが、それで約一名を殺しかけたことがあるので、その戦闘能力は確かにユニコーンなのだ。

彼らは悠々自適に久しぶりの生の自然というものを堪能している。それと同時に、レイルは後ろの少女へと振り返った。

「これでいいか？ルーナ」

「うん。大満足」

プラチナブロードのボサボサの髪を揺らしながら、目をキラキラと輝かせながら少女は頷いた。

ルーナ・ラブグッド。スネイプに禁じられた森へ行くことを告げる時に偶然にも会ってしまった今年入学した1年生で、何やら魔法動物に興味があるということらしく、スネイプに同伴を任せられたので一緒に来たのだ。

初め会ったときもどこかふわふわしていたが、リデイに懐かれるくらいには心は綺麗な綺麗らしいので、一応の警戒心は残しているものの触らせるぐらいならばどうとでも、というぐらいには触れ合いを許可して

いる。

今でもノノやリディといった雌個体に囲まれながら、先天性的な読心術を使えるのか、はたまた噂で聞いた「空想的発言」というやつなのか、それでも彼女らと話が出来ているというのは、一種の才能なのだろう。雄個体組は、羽を休ませたり、妻を見守つたりと各々がしたい事をやっている。

レイルはそれを目尻に、トランクをもう一度開けた。ルーナがこちらに気がついたが、それを無視して杖を取りだした。

「……プロテゴ・トラタム。
敵を警戒せよ。サルビオ・ヘクシア」
インペディメンタ。

守護系の、何かバレてはいけないようなものがあるように、一帯に結界を張るレイル。十分だと判断したのか、レイルはトランクから一人の少女を引き上げた。

「……景色は悪いけど、ごめんね……君が望んだ外だよ、リル」

前と同じように、やはりシャボン玉のようなものに包まれたままだが、それでも彼女を外に出す。これが今年中の目標だった。

リベット・ガードナー。

ある事情で、絶対に壊れない泡沫から出ることの叶わない悲劇の少女。定期的に、有り体にいえば月に二日ほど様子をレイル達が見に行っている。

今回、カム達を外に出す、というのは仮の目的で、一番外に出したかったのは彼女なのだ。

「……これが……」

「どうかな？お気に召した？」

「うん。ありがとう、レイル」

リベットはシャボンから出ずに、レイルに抱擁した。因みにこのシャボンは割れこそしないが、特定の間人間が近づくと中に入るようになってる。

ルーナが特別な事情があるのかと幼いながら理解し、ノノの毛皮に包まれていた。ノノも子供のように扱っているのか、ルーナに割りとは好意的である。

その後、ルーナは動物達と共に自然を満喫し、レイルはリベットと心行くまで一緒にいた。

・・・

「でもすごいね、ズーウーなんて初めて見たよ」

「まあ、その年で見ている方が少ないとは思うけど」

リベット達をトランクに戻し、ホグワーツに戻る途中、レイルとルーナは普通に談笑していた。空想的な発言も、裏を返せば「自分のやりたいようにやっている」だけなので、今のところ自由とは縁遠いところにいるレイルからすれば羨ましいものであった。

「基本、魔法動物を目にする機会というのは人の死を見ることよりも低頻度。だから、本当はこんないきものなんだよ、って世界に伝えると同時に、虐待や隷属化しているような動物達の解放を目標としている。まあ、ようするに正しい知識を身に付けましょう、ってことなんだけど」

「いいことじゃないかな。偽善の押し付けでもないし」

まっすぐとしたことを言ったつもりだったが、やはりこの不思議少女には解釈のしかたが違うようで、それを問おうとしたときに、前から知り合いが歩いてきた。

「およろ？レイルー。やつほー」

「こんにちはメズール」

「飴ないかなー？切らしちやってー」

「僕が持っているはずないだろう？無限飴玉はどうしたのさ」

「飲み込んだじゃったー」

あいかわらずなのほほんとした、されど取っつきにくいようなしやべり方をするメズール友人にレイルは思わずため息を吐きかけたが、隣にいる少女に紹介をすることを忘れていた。しかしやはり天然というのは行動が読めず、メズールは既にルーナの前まで瞬間移動していた。

「おー？可愛い娘だねー。一年生かなー、お名前はー？」

「初めまして、ルーナ・ラブリット。ルーナでいいよ」

「ルーちゃんかー、私はメズール・キラグリードだよー、よろしくねー。それとレイルー？浮気は良くないよー？」

「何でそうなるのさ。彼女とは今日初めてあったばかりだよ」

自己紹介をしていたはずなのに、なぜか浮気を疑われげんなりするレイル。一応弁明しておくが、レイルの行動するに当たる脳内ヒエラルキーの最上位はヘルミオネで不動なので、彼に浮気を疑っても仕方がない。

だというのに平然と浮気を疑ってくるあたり、流石は同年代一のかみにくさである。しかしそんなメズールも、天然同士繋がるところがあるのかルーナと意気投合していた。

彼女らはそのまま話ながらどこかへ行っただので、レイルはやるせない気持ちになりながら部屋へと戻った。

なお、その日の生気の吸引は、いつもよりも少し多目であったことをここに記載する。

いつそ清々しいまでに

レイル達は、突如としてフィリップに呼び出された。

とは言えども、やはり集合場所はトランクの中。なので、授業終わりに食事にも出ずにレイルの部屋へと向かうように指示された。

一応このことは先にアリーに言っていたようで、レイルがアリーへと伝えると「まだ聞いてなかったのか？」と少しだけ驚かされていた。いつ聞いたかと問えば「一昨日のチェス勝負の時」だそうだ。

詳しい話なんて誰も聞かされていない。とりあえず集まったのはアリシアとメズール、ドラコ、ダフネ、そして……

「うむ、集まってくれて感謝する」

まず初めにフィリップがそう切り出すと同時に頭を下げた。レイル達は早く本題に入って欲しいので何も言わない、のだが。

「えつと……フィリップさん、なんで私まで……？」

また面倒事のたぐいか、それともこのメンツでなければ出来ないことなのか、まだ詳細を話されていないために定かではないが、それでも何故か一年生のジネブラがここにいるのはやはり何かを疑う他ない。アリシアとメズールを見ればうんうんと頷いており、ダフネに關しては溜息をつきながらフィリップに目を向け、ドラコは裏切り者の

血と同じ空間にいるのが少しばかり気に入らないようだ。

頭を上げたフィリップはひとつ頷き、杖を取りだした。

「マルフォイとジニーには言っていないが、僕にはひとつ特異体質がある。魔力を目で確認見することが出来る」

「魔力を目で？ どういうことだ？」

「厳密には、戦闘用呪文、すなわち武装解除のような対象が生物であったり、もしくは当たれば直ぐに効果が発揮される粉々呪文のようなものを除き、人の魔力を色、形、大きさから判断することが出来る。網膜が少々特殊なようで、僕はそれを見ることが出来る」

フィリップはひとまずソーサーに認識阻害呪文をかけ、一緒に持ってきていた紙にインクを少量垂らして杖を振るった。紙には青の羊のペンタグラムが描かれた。

「これが認識阻害呪文の形だ。こんなふうな魔力が見えはするが、色に関してはどこまで効き目があるかで、青が最高ランク、最低ランクは赤だ」

「マグルのサーモグラフィを逆にした感じなんですね」

「サーモグラフィ……？」

「あ、マグルの技術で、温度を測る事ができる機械、だそうです。お父さんがこの前珍しいものを見た、とはしゃいでいたので」

「ウィーズリー……本当に聖二十八一族から除外するか」

「ドラコ、その言葉はせめて次代になるまで取っておきなさい。こちららも魔法省から「マグルとの隔壁的存在のはずなのに大きな穴を空けられている」と難癖つけられてるのだから」

「申し訳ございませぬ、アリシア様」

さも平然としてウィーズリーへの悪態を零すドラコを宥めるアリシア。自分の父親がそんな評価を受けていることに驚きつつ、やはり「父がすいません」と謝っているあたり、ジネブラは出来た子なのだろう。

フィリップはその様子を見つつ、紙に書かれたインクの色を青から黒にもどし、紙から抜き取った。結果的に羊皮紙には何も書かれていなかったことになる。

自分と遜色のないレベルの魔法使いと思っていたレイルだが、どんな訓練をすればここまでの技術を得られるかも疑問に思った。レイルはトランクの中という外から絶対にバレない場所があるが、フィリップの場合はそうではないだろうし、何より聖二十八一族総督家というアリシアが近場にいるせいで人目もあつただろうに、自分と同じ領域に立っているフィリップに少なからず驚いていた。

「で、なんだが、それでもやはり確認していない模様もあつたりする。最近新しく確認したのは不死鳥変異種のレイヴェルの透明な逆三角」「透明？ どういう……」

「いや、それはどうだっていい。ともかく、そういったものを見れるということだけを認識して欲しい。で、最新は……」

言葉を紡がず、フィリップは杖をジネブラに向けた。

「君だ。ジネブラ・ウィーズリー」

「……えっ？」

「薄緑色だからこそまだ本質を保っているが、分からないのはその形だ」

再び杖を振り、今度は羊皮紙にはインクをこぼさず、宙にその形を書いた。その形を見て、数人が、首を傾げた。

「……フィリップ、これは？」

「僕がみた形だ。お生憎様、この正体を僕は知らない」

「三角形に真ん中で割られた線、で三角形の辺全てに当たる円？」

不可思議な模様に反応を示したのは聖二十八一族の純血代表とも言える三人。フィリップもそれがわかっているからなのか、アリシアの方に目を向け、彼女もそれに頷いた。

「……これは、死の秘宝よ」

「死の秘宝……？」

「三人の魔法使いが死から逃れるために死から与えられた三種の用具。1つは、現在校長先生が所持しているニワトコの杖」

「1つは、忌々しいポッターが持っているヘルミオネが言っていたな。透明マント」

「1つは、今はどこにあるか分からない、蘇りの石」

「真ん中の線が杖、丸が石、三角がマントよ」

解説をいれる三人に、納得のいく表情をしたようなレイルとフィリップ、ヘルミオネ。ジネブラだけはまだ状況が掴めていないのか、少しだけ困惑している。

「そんな……その、死の秘宝が形として現れるのは……?」

「残念ながらそこまでは分からない。ただ、色つきであるという点を考えれば何らかの形でジニーを蝕んでいる可能性が高い」

「?!?でも、どうやって?」

「まだ被害が出ていないところから見れば、精神干渉系、恐らくゆつくりと効果が現れるのだろう」

まさか自分がそんなことになっているとは露ほども思わなかったジネブラは多少なりともショックだったのか、少しだけその体をふらつかせた。倒れそうなところをダフネに支えられ、ベッドへと腰をかけた。

「どうするのフィリップ?」

「勿論原因を破壊する。とはいえども、問題はどこにあるか、なのだが、やはりジニーの所有物の可能性が高い、そこでだ」

フィリップはアリシアの問いに頷きながら、ジニーの前に膝をついた。

「君の所有物に気が付かないうちに混ざっていたものはないか?」

「……一つだけ。あの、マルフォイのお父さんとうちのお父さんとのゴタゴタの後、気づいたら鍋の中に入っていた本が」

「決まりね。というかドラコ、あんたその時何してたの?」

「2階で本を漁っていた」

「……ほんとアリシア様以外になるとどうでも良くなるのね。知ってる? あんたって「女になるとツンデレっぽくなりそうなのにデレることもしなければツンすらなくなりそう」って言われてるのよ」

「何だそれは? 侮辱なのか?」

「さあ? ハツフルパフの子に又聞きしただけだから意味は知らないもの」

恐らくハーマイオニー、またはマグル界、魔法界ともにある程度の

知識があるメズールなんかがいれば吹き出していただろうが、残念ながらここにはヘルミオネと魔法動物レイル、ヘルミオネ、箱入り娘アリシア、ファイリッブジネブラなどというその手の趣味がわからないものだらけなのでスルーするしかない。勿論ファイリッブは意味を知っているのだが、こんな状況でツツコミを入れられるほどシリアスブレイカーではなかった。

ひとまずその対処は後日に回すとして、ジネブラの「気づかないうちに呪われている」というシヨックから解放させるため、1度解散させた。行動するのは、一週間後。

.....

一週間後、の前に、ファイリッブはジネブラに頼んで呪いをかける本らしきものを借りていた。見た限りはただの日記帳だが、古びているが上質な革本であり、トム・マールヴォロ・リドルという文字も刻まれている。

ただ、問題が一つだけ存在する。もちろんそれはジネブラの呪い関連の話である。

実は、あの時ファイリッブは2つほど嘘をついた。

三角形に丸と垂直二等分線。それが死の秘宝を表すものであるということとは勿論知らないわけがない。と言うよりも、そもそも世界の知識全てと接続できるファイリッブが知っていないはずがない。

では何に嘘をついた、と聞かれれば、ジネブラに着いていた魔法の形である。そう、本当は三角に内円、垂直二等分線ではない。

骸骨ととぐろを巻いた蛇。

それに気がついたファイリッブは、ひとまず事情を説明するべくとして、皆が集まる前に基礎知識が必要だと思い地球の本棚に接続。「骸骨」「蛇」「魔法」と3つのキーワードから検索をかけ、その意味を知った。

罫の印を
モースモードル

かつてハリー・ポッターがヴォルデモートを打倒する以前より、ヴォルデモートのシンパが使用していた呪文である。空に打上げる

ことにより、骸骨とどぐろを巻いた蛇を雲に浮かび上がらせ、死喰い人の出現の証となっていた。

これにより、フィリップは今回の事件の騒動から確実にルシウス・マルフォイが死喰い人であり、この呪いをかけてきたものが死喰い人、もしくはヴォルデモート自信が起こしたものであると狙いをつけた。というよりも、犯人はヴォルデモートで確定であるとフィリップは思う。

何故ならば、Tom Marvolo Riddleの文字を入れ替えれば「I am Lord Voldemort」となるからだ。

だからこそ、前準備が必要であった。フィリップは日記帳を適当に開き、羽根ペンにインクを通して文字を書いた。

「こんにちは、リドル」

たった二単語。その小さな英文はたちまち日記に吸い込まれてゆき、新たに先程の答えとなるような文が帰ってきた。

「こんにちは。僕はトム・リドルです。あなたの名前をお聞かせ願っても?」

フィリップはこれで確信した。この日記はトム・リドルである。

日記からそう帰ってきたことが問題なのではない。こちらの名前を聞いてきたのが日記帳をトム・リドルと決定づけた理由だ。

別に会話をするだけなら互いの名前は必要ない。だが、わざわざ情報を引き出すかのように名前を聞いてきた。

温和な雰囲気を出しつつ返事をすれば、それ相応の返事を返す。これがそう設計されたにしては、そんな魔力反応がない。

その上、形は一つだけ。無駄に高性能ならばそれ相応の数が見れるし、認識障害呪文でさえ見えるフィリップの目は、欺けない。

故に、これはヴォルデモートである。

「……」

フィリップは一人思考する。この日記帳を破壊できるかどうか。

確かにレイル達には「当然破壊する」と告げた。だがそれは最終目標であって、現在それができるとは限らない。

そも、これがヴォルデモートとわかったただけであって、結局のどこ

ろ日記帳が実際なんなのか、ということとはわからない上、仮にそれが判明したところでその破壊方法も思いついていない。大前提として普通の魔法は聞かないであろう。

だからこそ、早急にこれに対しての実態の判明と破壊方法を模索しなければならぬ。

フィリップは地球の本棚に接続し、一度全てを検索した。

思いは遠く

レイルは一度、フィリップが謎の日記を調べて1日後に「必ず殺せるものを探してくれ」と頼まれた。その意図は押して凶ることは出来なかったが、彼の言うことなら、と二つ返事でひきうけた。

必ず殺せるもので真っ先にレイルが思い浮かべたのは必殺魔法で、必殺魔法とは読んで字のごとく、人を殺せる魔法である。いちばん知られているのは、闇の魔術の禁忌中の禁忌である「アバダ・ケタブラ」だろう。

だが、それにももちろん制約というものが存在する。この世には許されざる呪文というものがあり、服従、磔、そして死の三つをどれかひとつでも人に対して使用すると問答無用でアズカバン行きとなる。ので、今回この死の呪文は使えない。だから探す必要があったのだ。

次に思いついたのは、バジリスクの毒。つまりレファイアから毒を拝借するのだ。

といっても、バジリスクの毒は少し前に既に取得している。ちなみに取り出し方は20ミリφの試験管を牙の先端に宛てがい、試験官の口が牙でつまらないように隙間を開けて牙から伝ってくる毒液を回収する。

バジリスクを捕獲したことはダンプルドアには極秘に去年お世話になったフロー・ベアリングに伝えており、研究のため月一ペースで毒を回収している。ので、その余剰分は普通に余っているのだ。

これを使えるか、と思うが相手は無機物であり、毒が回るかどうかも不明である。よってこれは保留案となる。

予め断っておけば、人は何も全知全能ではない。

彼にだって知らないことやできないことがある。今回の「法律に引つ掛からない何かの殺し方」だって知らないし、一応人並みの魔力しか持たないレイルには魔法だけであの日記帳を壊すなんて芸当はできない。

少しばかり他の人よりヘルミオネやゼノ、トランクの住人たちのような家族にたいして情が働くだけで、その他は落ち着いているだけの年相応の優秀な少年なのだ。本当の全知とはフィリップのことを言い、本当の全能とはゼノのことを言う。

年相応のレイルは当然ながら困ったときは大人に頼ればいいということを知っている。だが、ここで問題となってくるのは人選である。

校長であるダンブルドアはレイルが個人的にもあまり良い印象を持っておらず、なおかつヘルミオネ達が毛嫌いしているので却下。副校長で基本的に全寮に対し公正を謳っているながら本当はグリフィン・ドールに甘いと定評がつきつつあるマクゴナガルもこんなことをしているとは知られれば絶対に探りを入れてくるだろう。

金切り声で有名なフリットウィックも普段は弱く見られがちだが、以前校長室で相対したときにわかったがかなりの実力者である。ので、こちらも自ずとダンブルドアの方に報告が入るだろう。

ステファニー^母は論外、用務員のアーガス・フィルチも風の噂で聞いた程度だがスクイブと聞いた。スプラウトはダンブルドアに寄っているきらいがあるのでこれも論外。

となつてくると、消去法で残るのはたった一人である。

.....

「.....で、我輩の元に来たわけか」

「はい。なにかありませんか？」

スネイプは、目の前の少年に少しばかり頭を悩ませた。本人に迷惑はされていないのだが、その母親が面倒なのだ。

過保護とは言わないまでも、結構の割合で口を開けば「レイル」の言葉が出てくるステファニーは、度々スネイプの部屋を訪れていた。神秘部でありながら子持ちであるステファニーの忙しさは、個人的な用事で魔法省によく行っていたスネイプも理解している。

が、だからといってバーボン片手に既に酔っぱらって「せんぱい」とわずかに赤みがかかった顔で寄られるのはうざくもなってくる。最近は回数も多くなつてきているので、どうしたものかと悩んでいた。

そんな矢先に「死の呪文と悪霊の火以外で直ぐに対象を殺せる魔法はありますか？」とドストレートに聞いてきたのだ。スネイプの頭痛は加速することとなる。

が、適当にあしらうのも面倒である、と忌々しき男と最愛の女性との間に生まれた護衛対象を頭にちらつかせて、思考してみた。だが、やはり思い付くのは、ただ一つ。

スネイプは目の前の少年を、わからないほど一瞬だけ真剣に一瞥した。ダンブルドアから「彼に並みの開心術は効かない」と報告を受けているので、その目に曇りがあるかだけの確認だ。

「……夏休みのレポートにあった生ける屍の水薬をこえる睡眠薬のダイバーダウンとやらを瓶詰めで三本無償で提供したまえ。それで教えてやろう」

「ありがとうございますー！」

結果、スネイプは教えることにした。作ってからほとんど使っていないオリジナルを。

「これから貴様に教えるのは確かに法に引つかかることは無い、だが使い方を間違えたなら直ぐに投獄されるだろう魔法である。くれぐれも、間違いは冒してくれるな」

「分かってます」

スネイプはレイルのことを見ることなく、杖を振って蛇を出す。クロエたちのような特別なものではなく、単なる蛇である。

杖が微かに震え、スネイプは僅かに力を弛めて震えを抑えた。

「……セクタムセンプラ」

無色半透明の魔法が蛇を襲う。すぐに効果は出なかったが、見るとじわじわと赤い池が発生していた。

蛇をもう一度見ると、至る所にナイフで裂かれたような傷が発生していた。さすがに目や口中などのところにはないが、しかし全身にわたって傷跡は出来ていて、むしろだんだんと大きくなっている。

「……これならば、対象を確実に殺せるだろう。ヴィペラ・イヴァネスカ」

苦しむことなく横たわり、赤い池の生成機となっていた蛇を魔法で

消したスネイプ。レイルはありますがとうございます、とだけ言って直ぐに部屋を出ていった。

その様子に聞きたいことがあったスネイプだが、その質問を喉奥に引込めて、座り心地の良いソファアーにいつの間にか置かれていたダイバーダウンの使用法をチラ見し、コップ一杯の水に大きじ一ほど入れて飲み干し、瓶を机の方に移動してソファアーに寝そべった。結果先送り。

詰まるところ、スネイプは考えることをやめた。

.....

スネイプは昔、虐められっ子だった。

理由は単純、いかにもな性格と、スリザリンであること、そのうえ闇の魔術に対する興味があつたこと。まあ誰に虐められていたかはともかくとして、とにかく彼は虐められていた。

学校側が黙認するので耐え続けるしかなく、ついぞ入学より始まつた虐めは卒業までずっと続いたのだ。最愛の人さえ奪われて、彼の心はあれに荒れていただろう。

だが、彼にだけ隔たりなく接する女性が、1人だけいた。というよりも、その特異性より誰からも注目を浴びていたのだが。

学生期間に入れば、何かしらのコミュニティにはいるのが子供たちのセオリーだ。趣味が合うから、似ているから、理由はともあれ、そういうグルーブはそこかしこ存在する。

ホグワーツは四つの寮に別れているだけに、そういったコミュニティはほかの普通の学校よりも断然出来やすかった。そこで、先程述べた特異性のある者が登場する。

ただひとつのコミュニティに存在するでもなく、コミュニティを点在するでもなく、事実上のオールラウンダー的な存在で、その優しい性格やクディッチの上手さ、学才も相まって、先輩や同輩、後輩、教師や用務員にまで好かれていた。そのうえ何故かいわゆるアンチな存在がいなかったせいで、「何かあれば彼女に頼れ」と言われるまでの存在に登り詰めた。

ハツフルパフにいた、ステファニー・クローターである。

ハツフルパフでありながらレイブクローの学力トップランカーと肩を並べるほどの知識を持ち、ハツフルパフ特有の気前の良さや親しみやすさがあり、かと思えばスリザリンのように気品ある仕草や礼儀を持ち合わせ、グリフィンドールのような勇氣もある。どこの寮に行ってもおかしくないほどの人材で実際彼女も「自分で選ばせてもらった」と証言している。

優秀。それが彼女を形容するに値する言葉である。

故にこそ、彼女はスネイプにも気にかけて。先生から言われたから、という大義名分もなく、ただたんに気にかけてのだ。

スネイプにとって、第一印象は「人気者が日陰者に何の用だ」とでも皮肉ってやるつもりだった。だが拍子抜けしてしまった。

「闇の魔術が得意な先輩って貴方ですか？」

「……そうだが」

「ちよいと分からないところがありました。出来れば御教授願いたくてですね」

「……それはひよつとしてギャグで言っているのか？なら断る」

「いえいえ、本気ですよ」

「真価をわからない人と延々といがみ合っているよりは、その道への理解がある人と語らう方が有意義でしょう？」

スネイプはその日初めて、自分の努力が報われた気がした。

.....

「嫌な夢を見た」

スネイプは起床し一番にそう零した。紛れもなく、覚えている中で二番目ぐらいに嫌な記憶と問われれば真っ先に「あのバカと出会ったこと」と答えるほどに、あの第1接近は嫌なことにカウントされる。

それほどまでに、彼女は関わってはならない人間だったのだ。スネイプは学生時代の記憶を、あの事と彼女に出会ったことだけをやたらと濃く覚えている。

いつの日か、水をワインに変えつつ、その杯を装飾するというほか

の人からしてみれば芸当とも言える魔術をワイングラスにかけながら、彼女は一人で語っていた。

「別に誰にも隔たりなく、当たり前障りなく接してるつもりは無いんですよ。その気になれば全員平等に愛せますし、全員平等に見下せて、全員平等に眼中から外せる。けれど、その中でもあなたは、数少ない波長の合う友人で先輩なんです。だから構うんですよ、あなたに」

そんな俗な人間だと、自らを語る少女は言った。そんな付き合いをして十数年。

おそらく今日も来るだろう。そう思い、スネイプは朦朧とする頭を起こそうとした。

「ソファアで溺れたように眠るなんて、らしくないですね、先輩」

そうして、自分を上から覗き込むようにする目線に、今やっと気づいた。

「……何をしている」

「何って、膝枕ですが」

いつも通り、バーボン片手にほんのり頬を赤らめてやってくる後輩はスネイプに膝枕をしていた。スネイプは何も感じないように起き上がり、机の上に置きっぱなしだったダイバーダウンを片付けた。

「疲労に気づかないほど熱中するなんて、あの魔法を開発する時以来ですねえ……なにか悩み事でも？」

「強いて言えば貴様のせいで近頃寝不足だと言う以外は、何も無いがな」

「あはは……まあまあ、後輩のおちゃめな相談と思って聞いてくれるじゃないですか。一応あのお酒って、リスクの大半を消した生ける屍の水薬入ってるんですよ？」

「ふん。貴様の息子の方が、優秀だったな」

「へあ？どういことですか」

ステファニーはソファアールから立ち上がり、ソファアール以上に座り心地の良い一人用の椅子に座ったスネイクに机を挟むようにして立った。「レイル・クローターが調査した、生ける屍の水薬以上に直ぐに眠ることが出来、なおかつリスクのない睡眠薬を夏休みに作れと言え、ダイバーダウンと名付けて提出してきた」

「なあっ!?羨ましいですよ先輩！なに母親の私でも手に入れられないようなもん貰ってるんですか!?!」

「知らん」

「知らんって!?!まさかとは思いますが、結構な量貰ってるんじゃないでしょうね?!」

「瓶詰めで三本ほどだ」

「十分じゃないですか!?!」

その後も、喚くステファニーの尋問は続いた。しかし、ステファニーは気づかない。

「全く！先輩はいつもいつもいつも！」

「うるさいぞクラウ」

スネイクがステファニーを呼ぶ時、呼び名が学生時代に戻っていることを。

王の素質

「決闘クラブ？」

朝食を食べていたレイル、ヘルミオネの所にパドマ・パチルとマイケル・コーナーが相席し、決闘クラブなるものの存在を明かした。ここ最近部屋にこもりつきりだったレイル達にとつて知らないも同然の情報だった。

「そうそう。己の全てをぶつけて誰かと戦う機会なんてないから」「我らが大先生の実力はどんなものかなって思ってたな」

パドマとマイケルがこんなことを言うのも無理はない。レイル、ヘルミオネ、フィリップの三人はレイブンクローではもはや欠かせない存在となっている。

というよりも、いくつかの反乱分子を除き、レイブンクローだけではなく全ての寮の先生という認識になっている。類まれなる知識量や、それを補う実力も去ることながら、「来る者拒まず去るもの追わず」というスタンスを基本的にとつているせいかフレンドリーに当たりやすい、という点でも彼らは人気がある。

また、最も決定的に全寮からの信頼を置いているのは聖二十八一族総督家ティファール魔法省の忠臣とマルフォイからの信用と、研究結果の事実性だ。魔法省にも提出している彼の研究結果、最たるものは脱狼薬改という、一度飲めば一ヶ月は人狼にならず、無味無臭という今までの脱狼薬とは比べ物にならないほどの薬を開発したのだ。

それに加えて、デイマイント家との深い繋がりがある。はつきりいってしまえば、現在ホグワーツには彼以上の人材は存在しない。

となると、気になってくるのが実力である。とはいえども、ロナルドの失態あの光景をパドマ達は見ているので、決闘を行うとなれば無言呪文が大前提となることはもちろん分かっている。

それを差し引いても、パドマはレイルの実力を知りたいのだ。

「どうする？ヘルミオネ」

「面白い、とは思う」

「来てみたら？みんな知恵を絞って、どうやって相手を出し抜くかって考え抜いてるの」

「それでも僕は君に勝ったことはないんだけどね、パドマ……」

肩を竦めながらマイケルがパドマを見る。パドマは少しだけ得意げに「ふふん」とわざとらしく言いながら腰に手を当てた。

「で、どうする？レイル」

「行ってみようと思う。そういえば、これ誰がやってるの？」

レイルは、何気なく問うたことを後悔した。

「え、ステファニー先生だけど」

——突如として興味を失った。

……

失った……のだが。

「アリス、一っだけ質問をさせてくれ」

「一度だけね？それ以上は2回しか付き合わないわよ」

「なぜ僕はここにいるんだい？」

レイルの目の前には、ちやうどレイブンクローの先輩であるペネロペ・クリアウォーターとフィリップの親友だというハツフルパフのセドリック・デイゴリーがなかなか激しい戦いをくりひろげていた。ペネロペは全方向に薄く縦の呪文を使用し1度だけなら耐えられるようになっており、それに対抗するかのよう^{デュアル・ブースト}に大人でもなかなかできないような一度に二度同じ魔法を使用する二連射という技術を使用していた。

そう、パドマが言っていた、ステファニー主催の決闘クラブである。「最近ジニーのことで私たちが煮詰まりすぎだったから、たまには体を動かして頭の中をすっきりさせようと思って。迷惑だった」

「いつもならそんなことは言わないんだろうけど今回ばかりは迷惑かもしれないね。迷惑ついでにもう一度だけ質問させてくれ」

「さっきのを1回とカウントすればあとは無いわよ」

「構わないよ、これで終わるから」

「アレら潰していいかい？」

「やめときなさい、突つかかられるのがオチよ」

レイルのいうアレらというのは先程から視界橋でこちらを睨んでいるロナルドと、視線はこちらに向かないながらも「愛してるオーラ」全開のステファニーである。後者は放置でも全然大丈夫だが、前者は驚異ではないが鬱陶しい、という感じだ。

別にレイルは自意識過剰や自己愛があるという訳では無いが、力の線引き、というものはできるぐらいには力を持っている。故にこそ、ロナルドの視線を放置しているのだ。

ペネロペとセドリツクの決闘が両者大奮闘の上での引き分けにより観客が大いに沸き上がり、ステファニーがくじを引いた。

「えーと、8番と42番！」

壇上上がったのは先程こちらを睨んでいたロナルドと、いつの間に来ていたのか、ダフネだった。

「構えて」

何も気にしないようにしているステファニーが審判を務めている。

ダフネは半眼になりながらロナルドに聞いた。

「……アリシア様の方睨んでたけど、なんかあんの？」

「ツ、君には関係ないだろう……」

(ダメね。周りが見えていない)

ダフネとロナルドが正面から立ち会い、杖を構えた。取るに足らない相手を見る目をされたことにより、ロナルドは歯を食いしばった。

一応彼も、努力はしているのだ。かつて完璧に伸されたフィリップを見返すために、兄たちの手まで借りて、一矢報いようと努力してきたのだ。

「3、2、1！」

だからこそ、この結果は予想外だった。

「っ!?!かはっ!」

メキメキ、という鈍い音と、その直後に聞こえた壁を貫いたドゴオンツ!、という大きな音により、皆の視線は全てそちらに向かった。「……決闘っていうのはね、始まる前から勝負は始まっていて、勝負が決まっているものなのよ」

ダフネは杖をホルスターにしまい込みながら、決闘台からおりた。その目はどこまでも先を見据えている目で、その瞳にロナルドは映っていないし、現状映る権利もない。

「だからこそ効くのだよ。どんな魔法で来るのかって警戒しながら行う決闘において、速度上昇ヘイストをかけた生身ナカミによる Close quarter combatクワーター・コムバットってのはね」

そう、あの一瞬でダフネがしたことなんて単純も単純。無言呪文で速度上昇魔法を自信にかけ、体が壊れない程度ギリギリを狙って鳩尾みぞおち目掛けて拳を振り抜いた、ただそれだけである。

総督家の護衛をする以上、無手呪文を習得することが最終目標ではあるが、それでも杖がない状態であれば頼りになるのは自らの肢体のみ。故にこそ、ダフネは選択したのだ。

「競うな。持ち味を活かせ」

という、アガルタファイ・エンツォリック・ハワード母の言葉を。

「女の子だから力がないと思っただけ？お生憎様。私はずっと、アリシア様の護衛をドラコと共に任されられてるの」

ダフネの発する言葉は、何故かロナルドだけによく響いていた。周りが医務室へ、と叫ぶばかりなのだが、どうやっているのか、だんだんと離れていくはずのダフネの声がよく聞こえるのだ。

「貴方あなたごときが、私の前に立つんじゃないわ」

そう吐き捨てて、ダフネはレイル達の元へと向かった。

.....

結局、ロナルドがハリーやグリフィンドル生に連れていかれて行く間にももちろん決闘は続いた。己の全てを出し合い、ぶつけるそれは、レイルの中で少しだけ何かを点ともしした。

「27番と84番!」

レイルが来てくれただけでなく、参加してくれただけで既に有頂天になりつつあるステファニーは息子が名前を書いた番号を高々と読み上げた。レイルはそれを聞いて、ため息ひとつ吐いた。

「呼ばれた、か」

「ま、頑張つてきなさい」

「声援なんて必要ないだろうけど、ね」

レイルが歩を進めると同時、ダフネとアリシアの声援ともならない応援が後ろから聞こえた。レイルはそれに手を挙げるだけで応え、壇上にたった。

目の前にいたのは、ドラコだった。

「……構えて」

「来なよドラコ。全力で」

「……もちろん。全身全霊を持って、君を下させてもらおう！」

ドラコは半身になって杖をかまえ、レイルはフェンシングのプレイヤーのように構えた。唯ならぬ緊迫感が周囲を覆い包み、決闘場は誰も声が発せれなかった。

「3、2、1！」

この場の誰もがこの決闘に目を光らせていた。方や総督家護衛、方や誰もが誇る先生。

それらの第一手を見逃すまいと、ある者は血眼になろうかというほどに凝視する中、彼らが発するのは――

「*Weiß* *Flamme*, *Bitte* *bring* *mir* *den* *leer*
「白き炎よ、我を空へと導きたまえ！」」

一瞬、少なくともこの場にいる生徒ではわからない言語で放たれた魔法は、レイルとドラコの下半身を白く包み、彼らを宙へと導いた。唯一彼らが何を言ったか分かったのは、アリシア、ダフネ、そしてこの魔法を自分を認識できないほどに幼い頃に彼に教えたステファニーだった。

白炎飛行魔法、またの名を「白の飛翔」。

学生時代、スネイプがセクタムセンブラの開発に躍起になっていた頃に開発していた、死喰い人の黒の飛翔を参考にして作った魔法だ。白炎には盾の魔法一回分の防御性能があるということで、当時闇祓い

に大変重宝された魔法である。

だが、もちろん使いづらい。「深海で泳ぎ、かつ空を鳥のように羽ばたく感覚」を習得しなければならぬのであり、皆伝できたのは両手で足りるほど。

ダンブルドアでさえ使うことが出来なかったものを、二年生の子供が使うことが出来る。もちろん並大抵の努力をしている訳では無い。

レイルは、その意志故に。自らを見てくれなかったステファニー親よりも劣るなど、彼には耐えられなかった。

それ以上に、自分を見てくれたゼノ保護者やヘルミオネス達家族と同じ世界を見るために、彼は努力し続けた。だからこそ、誰かから与えられたであろう暖かく、安心できた感覚を覚えていたレイルは、この魔法を習得できたのだ。

ドラコは、その血筋故に。自らが守るべき存在であるアリシア護衛対象に大切なルシウスと両親ナルシッサと、共に研鑽してきたダフネ友がいてくれたから。だからこそ、その力の全てを自らに注ぎ、この魔法を習得できたのだ。

理由は違えども、実力が違うとしても、今の彼らは間違いなく、目指すべき場所は同じだった。

両者の魔法の攻防は、日本のドラマの「殺陣」というものにとどこか似ていて、しかしその表情は、もう少し進んでしまえば本当に殺し合いに発展するほどの凄みがあった。防いでは返し、避けては返し、その繰り返しであった。

武装解除、失神、粉々に始まり、いつかフィリップが見せた剣製、時間差、曲射などなど、明らかに二年生で出来ないような芸当の数々を、それこそ自らができる全てをぶつけていた。

「Ansuuz!」

幾分か、幾秒か、それがドラコが決闘開始後に白の飛翔を除き初めて発した言葉だった。炎が飛ばされたことにより、大半の人間はそれをインセンディオ炎と同系統の魔法だと勘違いしたが、一部の人間、それこそレイル達と少なからず面識のあるもの達はドラコの杖腕左腕の逆を見ていた。

「杖を使っていない?」

セドリツクがそう呟いた時、数人は訳が分からなかった。いくら優秀になったドラコだからといって、無手呪文を習得するまでには至っていないと思っているからだ。

しかし、確かに彼は無手呪文を習得していない。だが、そもそも杖を必要としない魔法は存在するのだ。

そこでペネロペは思い出した。かつて文献で見た、ケルトの英雄たちが使った言葉を。

「ルーン魔術……」

「え？」

「魔法ではない、杖を必要としない魔術」

ルーン魔術。それは、ルーン文字を使用する北欧由来の魔術である。

魔術と魔法の線引きは「科学的に再現が可能か否か」。構造的には魔術の方が簡単である。

だが、当然「無から有を作り出す魔法」よりかは威力が落ちるので、魔法使い同士の戦いでは牽制にしかない。それはレイルに対して、と見ても当然だ。

なぜ、レイルにとつて子供だましとしか見えない魔術を使ったのか。それほど切羽詰った状況なのか——否。

「K a z」

レイルはドラコが放った炎を、ルーン魔術で力をまとわせた拳で殴り散らした。ここまできるともう誰も一周まわって驚かなくなってくる。

ドラコは、「全身全霊を持って」と言った。それ即ち、自信の持てる全てで以てレイルを下そうとしているのだ。

使えるものはなんでも使う。どこまでも狡猾に、賢く、そして気高く。今のドラコは正しく——

——スリザリンだった。

未だ続く攻防にもそろそろ終止符が打たれようとしてきた。レイルの魔法がドラコに当たり墜落したのだ。全身を使って息をするドラコに対し、レイルは額に数本汗を垂らす程度でまだ息も上がってい

ない。

「楽しかったよ、ドラコ」

「勝手に終わらせないでくれるかな……僕はまだやれる！
サーペンソーティア、オパグノ！」

杖腕に僅かに裂傷を負いながら、ドラコは健気にも立ちあがり杖を振った。それと同時にドラコが倒れたことと、急な生物系の出現に少しばかり驚いてしまい、レイルは反応が遅れてしまった。

「ヴィペラ・イヴァネスカ！」

出現してきた四匹のうち三匹を魔法で消し去り、最後の一匹だけ距離が近すぎたので蹴りで対処した。吹き飛んでいった蛇はステージの外のアリシアの足元へと着地した。

物理攻撃を喰らって気がたっているのかレイルに向かって威嚇する蛇。ドラコが倒れたことにより、この蛇がレイルを攻略しなければドラコは負けてしまう。

だが、蛇は動きをとめた。

「待つて」

アリシアが、何かを発したのだ。

「落ち着いて」

「あなたの主人は倒れた。もう戦わなくていい」

「だから、そこで大人しくしてて」

アリシアの何かを聞いた蛇は1度アリシアを一瞥し、とぐるを巻いてそこに座った。アリシアはほっとしたような表情で杖を抜いた。

「ヴィペラ・イヴァネスカ」

杖から発された炎は蛇をつつみ、だが痛くもない炎は真ん中から蛇を二分にして消した。そこでアリシアは気づいた。

皆が自分を見る視線が、どこかおかしいことを。

「えつと……なに？」

「いや、なに、じゃなくて……」

「気づいてないの……？」

アリシアは皆が何を言っているかわからずに、恐らく今一番頼りになるだろうレイルの方へと視線を向けた。彼はステージから降りて、

アリシアに近づいていた。

「アリス、驚かないで聞いて欲しい」

——君は、パ^蛇ーセル^語マウ^使スだ。

天然令嬢と王の日記

「いつかはやらかすと思っていたが、この天然娘は……」

「卒業まで持たせると思ってたけど、なかなか早かったね」

「う、うう……」

紅茶を優雅にすすりながら、パラパラと活字のない本を読み進めていく男一人、棒付き無限飴をスプーン替わりにしてカランコロンと音を立てる女一人。そして、そんな2人に見守られながら正座で座っている女一人。

さらに、それを遠巻きに見ている男女六名。何たる公開処刑か。

先の決闘クラブでのまさかの発覚で騒然とした場をステファニーが沈め、レイルがアリシアを引っ張って自室まで連れ込んだ。その時にはもちろんダフネとドラコもついている。

その隙に砂打ち式連絡機を使ってヘルミオネにフィリップ、メズールを呼んでもらった。その時にはもちろんハーマイオニーとジネブラもくつついてきた。

全員をトランクの中に突っ込んで誰も入れないように二重ロックをかけ、アリーに紅茶を出してもらいつつ、何か知っているのではないかと思つたフィリップとメズールに聞いた。そのところ、やはり二人の前で1度見せているそうだ。

遡ること二年。当主となったアリシアを狙う輩から身を守るための知識やら何やらの授業の合間、フィリップと息抜きにチェスをしていた時だ。

どこからか迷い込んでしまったサファイアを額に着けた角水蛇と遭遇し、どうにかして元々の住処に返そうとしていた時に発覚したらしい。ちなみにメズールはその時隣で魔法界のマイナー作家、ダリル・ワグナーの小説「動物擬きと霞の蛇」を偶然にも読んでいた。

始めはそれが何かわからなかったが、やはりそこは世界の図書館。一発で正解を導き出したらしい。さすがリアルチャーターは格が違う。

「せめて五年生になるまで持たせて欲しかったがな」

「うっ」

「まさか自爆とは思わなかったよね」

「ううっ」

「だからこいつが当主など無理だと言ってるんだ。花婿を迎え入れて育児に専念した方がまだマシだ」

「だ、だって……」

「いつもアリスのオチの付け方は想像できないから面白いんだよね」

「め、メズールは私を助けなさいよお……ただでさえフィリップの苦言は耳に痛いのに」

「そりゃ、そうなるように言ってるからな」

「独り立ちって大事だよ」

「二人とも他人事のようにズバズバ言ってる……」

「だって他人事じゃないか。何言ってるんだ？」

「うう……」

何たるアトモスファイアか——この二人、キレッキレである。最後に至ってはメズールも間延びしなくなっている。

かくして、二人に為す術なくボコボコにされたアリシアは蹲り、フィリップはやはり本を読み進め、メズールは無限飴を噛み砕いた。ちなみにこの無限飴、噛み砕く、若しくは胃液に触れる、のどちらかが行われた場合無限生成は止まる。

ドラコは完璧なる従者をめざしているゆえに苦言を呈すことはない。ダフネもこのうっかり癖は昔から目に余っていたそうだが、今はボロボロに打ちのめしたフィリップをどう殴るかを内心腸を煮え滾らせながら静観している。

だが、あくまでダフネの言い分は「そこまで言う必要は無かった」とのことであり、発言については改めることもない。事実、それを理解しているからこそ、理由のでっち上げに死力を尽くしているのだが。

ちなみにハーマイオニーとジネブラはズバズバとものを言うフィリップを色呆けフィルターをかざしてみていた。もう何しても賛同するほどの恋慕心、ある意味信者である。

「はあ、うっかり者のせいで予定変更だ。レイル、蛇の王の居場所は分かるか？」

「……蛇の王？バジリスクの事か？」

レイルの間に首肯するフィリップ。しかし、レイルにはなぜこのタイミングでフィリップがバジリスクを求めのかが分からなかった。「なぜバジリスクなんだ？」

「蛇語使いは、本来聖二十八一族が提唱する『古き良き血統』の体現者、サラザール・スリザリンの直列家系、もしくは分家出なければ発現しないものだ。まあ、調べてるうちに裏技があるのがわかったがそれは今はどうでもいい。で、もしスリザリンの怪物と言われるバジリスクが今もこのホグワーツにいるのなら、それは早急に取り除かなければならない異物だ」

「異物って……そこまで危険視するものか？」

確かに、取り扱いには嚴重注意すべき対象だろう。何せ目を合わせただけで対象を殺す魔眼持ちだ。

だが、現状バジリスクを起こせるのはアリシアだけだというのに、何を危険視するのか。その答えは、フィリップが今まで調べていたものだった。

フィリップはパタリと空白の書を閉じ、代わりに黒革の本を取り出した。背表紙の端に名前が書かれた、トム・リドルの日記である。

「これはつい最近まで悩みの種だったジニーが持っていた本だ」

「そ、それとバジリスクのなんの関係があるんですか？」

恐ろしいものに触れると同時に、どこか嬉しそうにジネブラが問う。自分が先まで触れていたものを堂々と見せびらかされる恐怖もあるだろうに、それでも想い人に愛称で呼ばれたことの嬉しさが見え隠れするのは流石と言ったところだろう。

「色々と独自に調べた結果、こいつは遺物である可能性が高い」

「その遺物がどんな影響を及ぼすんだ？」

「影響はないさ。ただ、あのままジニーがこれを所持していたら、死人の一人や二人出ていてもおかしくなかっただろうね」

器用に本の角を人差し指に乗せて自立させながら目を伏せるフィ

リップ。中指で弾いて開店までさせ始めたが、その才能はどのようなのだろうか。

ストン、と音もなく開かれたトム・リドルの日記に羽根ペンでスラと適当に文字を書いていく。次第に文字は消えていく。

「チエイ^視ン・イヴ^覚エラブル^有ズ」

おもむろに杖を取り出してその場にいた全員に新年度前に作ってきたのであろう魔法をかけ

るフィリップ。何事かと杖を抜いたドラコが次に見たのは、自分が目の前で杖をもって構えている景色で、しかも自分の意図とは関係なしに動いている。

「今君たちが見てもらっているのは、網膜を介した僕の視点だ。頭のいい君たちなら、これがどう言うことか、分かるだろう？」

「えっと、つまりはどう言うことなのでしょう」

「つまるところ、こいつの特殊なものが見えるってことでしょ？何で私がこいつと視界を一緒にしないといけないのかしら」

ため息をはきつつ、嫌悪していませんまでもなかなか辛辣に言葉を吐き捨てるダフネ。その様子にジネブラは苦笑しつつ、共有された視界を見る。

そして、その先に見えたものに、他でもなくドラコとダフネ、アリスアが驚愕した。

「嘘だろ……なんでこの模様がここに!？」

「なるほど、フィリップがこれをジニーから遠ざけた理由がいたいほど分かるわ」

「本当に、不味い話ね、これ」

「え、っと、これは？」

ジニーに聞かれて口を開こうとしたフィリップ。だが先に、珍しくヘルミオネが喋った。

「モース^闇モード^印ル。今は姿を消している、闇の帝王が眷属、死喰い^{デスイーター}人の印」

目の前の、骸骨からの蛇の舌、という不気味なデザインの緑色のそれを忌々しいものを見るような口調で言った。実際、闇の帝王のもの

と聞いて気分をよくするっ物好きなんて彼のシンパしかいないだろう。

「精神干渉系統魔法と同時、生気を吸引し空いた魂の器に自分の魂を刷り込んでいく、虚言う気の一品。だが、それだと元々の魂の器、つまるところこの日記だが、力関係に齟齬が発生し耐えられなくなつて自壊してしまう」

「それで、もつとも魂としての格が高くなるその魔法を使ったのね……本当につくづく、ね」

「結局、これは……？」

この日記を送りつけてきた第三者、ならびに日記を製作したトム・リドルに苦虫を噛み殺したような声音で話し合うフィリップとハーマイオニーに、割れ物をさわるような感覚で問うジネブラ。深いため息をついたフィリップは、その答えを口にする。

「これは、分霊箱。ホークラックスさ」

「ホークラックス？」

「自らの魂を分けて入れ物にいれることによつて不死の身体を手にいれることが出来る使用禁止項目第一種魔法呪文。そして魂の元は、ヴォルデモートだよ」

「つまり、乗っ取られたジニーがバジリスクを起こしたかもしれない、と？」

「彼は蛇語使いだったらしいからね。可能性は十分だろ？」

もつとも、その心配はもうないが、と続けるフィリップだったが、ジネブラにはもし彼がそうしていなかったら、と思ひ、恐怖した。打ちひしがれてしまい、ふらつと倒れそうになるが、他ならぬフィリップに支えられ、今度は羞恥やら何やらで固まってしまった。

「言つたらう？もうその心配はない。空气中を伝う魔力を吸収するのは無理らしくてね。先手を取り続けければ、まあこうなるさ」

「じゃあ、それこそバジリスクに会う必要があるな……その前に」
「ん？」

いつの間にか視覚共有魔法が切れていたことを確認しつつ、レイルは嚴重に管理された透明なフラスコを持ってきて、おもむろに開かれ

ていた日記のページに垂らした。何を、とドラゴが思ったが、すぐに異音と異臭、そして変に燃えていく日記を見て困惑した。

「……レイル、一応聞いておくが、これは？」

「バジリスクの毒やら何なら、少なくとも放置していれば死に至る毒をかき集めて企業秘密的黄金比で配合した殺傷薬品、名付けて『不死殺し』イモータル・キラ」

さらつとんでもないものを作りあげているレイルに戦慄しつつ、文字通りの劇薬がバチツと変な音を立てつつ日記に吸収されていく様をみつつ、少し彼が恐ろしくなってくる一同。そしてハーマイオニーがふと気になったところを指摘した。

「待って、さつきなんて言ったの？」

「少なくとも放置しておけば……」

「違う、そこじゃなくて、その前！」

「……？バジリスクの毒やら何やら」

「さらつと会ってんじゃあないわよ」

「え、何、つまり今このトランクにあの蛇の王がいる訳？怖っ、なにこの人怖っ」

「僕らに出来ない事を平然とやってのける……」

「痺れたいし憧れたいけど実質私たちがやろうとすると自殺行為よね」

「これ、褒めていいんでしょうか……？」

「一応、褒めるべき案件だと思うぞ、ジニー」

「違うと思うわ、私」

ナチュラルに吐かれた事実に体に鳥肌が立ってきたダフネに、凄いことをした人にはこれを言っておけ、と言われたから実践してみたがさして感性がわからないので棒読みになったドラゴ。すごいと一瞬思いはしたがそれが自殺行為であることに気づくアリシアや、褒めるべきかどうかを談義するジネブラとフィリップに否定するハーマイオニー、素晴らしきカオスである。

しかも、それがさも当然だろ？と言った顔で首を傾げているレイルがいるのだから余計タチが悪い。アリーでさえ首を振つため息を

吐いている。

「まあ、会いに行ってみなよ。ヘルミオネ、案内してあげて」

「アリー、レイルをお願い」

「了解、クイーン」ヘルミオネ

収集がつかなくなったため、その場をあとにしようとするその案には全員が食いついた。

日記は、気づけば跡形もなく消えていた。

バジリスク

ヘルミオネは、レイルに頼まれて現在トランクの空を飛行している。いつぞや見せた浮遊魔法では無いのだが、それを悟れるのはフィリップぐらいなのだが、彼には自身の招待を晒しているので別に隠す必要は無い。

ちなみに後ろには誰よりも早く飛行魔法を取得したフィリップ、白き飛翔を取得したため、アリシアを横抱きに行っているドラコ、まだ技術は拙いながらも飛行魔法を使用出来ているハーマイオニーと、それに抱かれているジネブラ、ダフネはというと、まだ飛行魔法を十分に使えないので加速魔法ヘイストで地面をパルクールで追ってきている。なかなか人外な技であるが、体力増強などでスピードが落ちないようにしているところ、流石最強の護衛を指しているだこのことはある。

数分の程空の旅をして、当たりが暗くなっている砂山に到着した。辺りには砂岩が変な形で配置されていて、それがどこかストーンヘンジに似ていた。

ヘルミオネとフィリップはストーン、と音もなく着地し、ドラコはアリシアを起き上がらせやすいように立膝で着地した。ハーマイオニーは1度停止してから重力で落ち、唯一陸路だったダフネは砂を巻き上げながらブレーキをかけて停止、摩擦熱で溶けかけていた靴レバロを修復しておいた。

「ここにいるのか？バジリスクが」

「うん。アリシア、蛇語で『開け』って」

「分かったわ——開け」

指示されたアリシアはスつと言葉を発した。それにより、砂岩群が忙しく動いてゆき、最終的には大きな穴が出来ていた。

そこが見えないほどの、しかし僅かな光がともされている穴に、彼らは僅かに恐怖した。動けないでいる間に、それぞれの肩に少し重みを感じて、そちらに目を向けてみると、蛇が乗っていた。

「え、ちよつ、まつ!？」

(落ち着け、若僧共)

「喋った……いや、脳に直接?」

(正解だ、フィリップ・レツカ・ハワードとやら)

モゾモゾと蠢いていた蛇は、まだ誰も会ったことがなかった動物たちだが、レイルは割と助けてもらうことが多い種族。すなわち、シンドミツションと呼ばれる、開心術を使う蛇の一族だった。

(俺達はシンドミツション、聞いたことないか?)

「確か、開心術を使う蛇、よね?」

(然りだ、ハーマイオニー・グレンジャー。だがそれだけでは無い。俺達は全ての生物と意思疎通ができる。今会話しているのもこの応用なのさ)

「へえ……」

この世にはそんな生物もいるのだな、とジネブラが感心していると、僅かに首にくすぐったいものを感じて、思わず手で払い除け用として、なんとか踏みとどまった。そのまま行ってしまう、と頭を撫でたりすると甘噛みしてきたので、わりと可愛げもあるところが気に入った。

(自己紹介をすれば、フィリップ・L・ハワードの肩に乗ってる俺が、ネイキッド)

(ハーマイオニー・グレンジャーの肩に乗ってる私がソリダス)

(メズール・キラグリードの肩に乗ってるのがソリッド)

(ドラコ・マルフォイに乗っている僕がリキッド)

(ダフネ・グリーングラスに乗っているのがヴェノム)

(で、ジネブラ・モリー・ウィーズリーに乗っている私が、まあ……オールドだ)

見れば、それぞれがわずかに鱗の形や色が違ったりしている。遠目で見れば血縁者とだけわかるのだが、それでも誰が誰だかははっきり見ないとわからない。

ヴェノムは唯一の女の子だからか、何かしらのシンパシーを感じたのかはわからないが、ダフネに寄り添うように肩に乗っている。ダフ

ネもそれが割とまんざらでもないのか、親しげに接している。

(配置はこれでいいんだろう？ヘルミオネ)

「うん。それと、来るよ」

何を、と確認するまでもなく地響き一つ。次第に大きくなっていく何かを擦るような音は、明らかにこちらへと接近していることを示していた。

しかし、警戒してはいけないとわかっているけど、ハーマイオニーは身構えてしまう。杖を抜きかけてしまおうが、それはしてはいけないとわかっている、わかっているのだ。

体に砂をまといながら、目を閉じながら顔をこちらに向ける巨大な蛇。だれであろう、蛇の王、スリザリンの怪物、アクロマンチュラの天敵、バジリスク、レファイア・レギスである。

大きな体に見合った貫禄、覇気たるや、死なないとわかっているけど「死」という概念を押し付けられるような圧迫感。しかしそれを感じ取り、膝をつきそうなまでに顔色を悪くしているのは、以外にもアリシア、ハーマイオニー、ジネブラであった。

フィリップはいつも通り飄々としているし、メズールもへらへら笑っているものの、器用に目だけ笑っていないし、ドラコとダフネは高々化け物ごときに一々臆病になっていられないのだろう。ヘルミオネは言わずがなであり、予想外のタフネスを見せる彼らにオールドは少しだけ笑っていた。

(ああ、この空気、この匂い、この感覚。忘れたくても忘れられぬ。否、誰が忘れようか。否、忘れるべきではない。目の前におるのだろうか、妻の悲願が。果たして幾星霜、これほどの喜びはない。ああ、妻が主よ。名を……)

「え、えつと……アリシア。アリシア・ティファールです」

少しだけ臆病になりながら、アリシアは名を名乗る。無理もないが、もう少し堂々としてはどうだろうか？フィリップとメズールが思うのも仕方ないことではあった。

また、彼女はここに来なくてはならないのだから、そのたびにビクビクしているのでは話にならない。やはりポンコツは治らないと諦

めるべきか、まだ大丈夫と自らを鼓舞させるのではどちらが労力を使うのだろうかと思いつつ、目の前の光景に向き合う二人であった。

（何たることか。よもやスリザリンの直近の分家に妾が主がいうとは……）

「ん、それはどういうことだ？蛇の王よ。聖二十八一族総督家とはいえ、確かティファール家は聖二十八一族制定当時はスリザリンよりも縁遠き血族であると記憶しているのだが」

新たな知識に我慢できなくなったのか、いきなり質問をぶち込んだフリリップにメズール以外が目を向けた。約一名、「アリス様が話してたる何会話に入り込んでんだぶち〇すぞ」的な空気を出している誰かさんと、それを宥めようとしている誰かさんは放置して。

（それは歴史の歪みだ。血統を重んずる妾が主は、誰よりもマグルに近かった　レ　イ　ブ　ン　ク　ロー、マグルに近づくことを恐れぬ　グ　リ　フ　ィ　ン　ド　ー　ル、マグルに好意的であったハツフルパフではいずれ破滅することを恐れ、どこよりも認知させていなかったティファール家の者を頭にながらせた。故に、どこの誰ともわからぬ馬の骨と思われていたのだ、レイブンクローの末裔よ）

「なっ……!?!」

バジリスクからのまさかのカミングアウトに、それを知らなかった組、有体に言えばハーマイオニーとジネブラだが、やはり驚いていた。しかしフリリップはそれを意に介そうともせず、じっとバジリスクを見ていた。

それはほかでもないフリリップ本人が、自分がレイブンクローの末裔であることを「どうでもいい」と切り捨てていることに他ならない。

「なるほどな……。ありがとう、蛇の王よ」

「なんかー、アリス以外には何も話さないのかと思ってたよー」

（些細な事だ、ハツフルパフの末裔。既にこの身体は死に体、向こう100年も生きられぬ老耄よ。盟友の友人なのであろう？このような知識は、さっさと誰かに預けておく方がよいだろうさ）

「え、もうそろそろ寿命なの？その言い方だと、まるで本来は生きられ

たような……」

ハーマイオニーはメズールがハツフルパフの子孫であることよりも、バジリスクの様子に疑問を覚えた。しかしバジリスクは、それを無言で肯定していた。

バジリスクはバジリスクは目を開けてはいないが、アリシアの方を見たような気がした。バジリスクのその雰囲気には押されかけて、アリシアが少しだけ身構えると。

(妾が主よ。願いがあ)

「え、ええ。何かしら」

(それは――)

妾を、殺してくれ。

・
・
・
・

その日。一匹の蛇は生まれ落ちた。

誰が願ったか、その蛇の名前は、とても恭しくて。

それでも、そんな名前に納得できてしまう。

その蛇の名は――

――レファイア^姫・レギス、と言った。

水天の涙

アリシアは、トランクから戻ったあとの事をよく覚えていない。正確に言えば、クリスマス休暇も、その後のことも。

ずっとなし崩しに生きていたような気がして、それが幾年分とも感じられて。何より、どこか心の中での思いが欠如したような感覚が、こびり付いて離れなかった。

胸の思いこそ上の空、一応授業も当てられたら答えたし、なにか不都合がない限り休もうとも思わなかった。休んだところで皆と顔を合わすのだから、という半ば諦めのような気持ちでいたのは否定しないし、少なからずそういう考えがあったのも事実。

しかし、そうなる、である。

少なくともその「心の中での思いの欠如」とやらの真実は、トランクにいた少年少女にしか計り知れないものであるし、実際このぽっかり空いた穴を誰かに打ち明けようとも、相談しようとも思わずに割とこのうのと過ごしてきた。誰にも知られないように、という訳でもなく、ただ漠然と、その気持ちを口に出すまでに、喉に引っかかるものを感じていただけである。

熱情なんてほっぴり出して、スリザリンでの勝手に押し上げられた地位を放り投げてでも、アリシアは何故か、一人になりたかった。それが何を指すのかも、分からないままに。

この思いが、気持ちだが、その欠如が、誰もが分からない、と豪語する気はなかった。どんなに歳を取ろうと、少なくとも人生に一度はそういういた空虚感を感じるものだと思っていた。

肉親が、母が早死し、父が病に堕ちて。それでも、それでも尚こんなにぼっかりとした感覚には陥ることは無かった。

何故か。

それを自問すること幾星霜、終ぞ答えは見つからず、自答するに至らずに。寧ろ、自問自答できることなく、その果ての自分を見てみた

い気もしてきた頃。

自らの気分を映し出されたような、皮肉られたような灰色の空の元に。

フィリップに、呼び出された。

・・・

「来たか」

アリシアを呼び出したフィリップは、アリシアよりも爽やかな顔をしていた。それに少しだけ、あの光景が目には焼き付いて離れない自分よりも、精算が早い彼に嫉妬した。

「……で、私を呼び出したわけは？」

「フツ、そう結論を急ぐなよ。君の悪い癖だ」

まるでそう問われる事を予想していたかのように鼻で笑われたことにイラつきを覚えつつ、フィリップの隣に座る。睨んでもなお飄々としているその態度は、死んでもなお治らないだろう。

ため息を吐きつつ、隣のいけ好かない少年との過去を思い出す。それは、あまり思い出したくないもので。

出会い頭に、母の急死と父の病弱を慮った、たった数文字程度の氣遣いと、それにしても多すぎる立場の皮肉を投げつけられたのはいい思い出で。アリシアが誇ろうとするものを、全て百八十度目線を変えて心を抉ってきた。

それでも、あれは「こんな人間もいるんだよ」という暗示と捉えれば、なるほど、と思いかけるが、それでもよくもまあ初対面の、それも女の子にズケズケといえたものだと感じする。

知らないことを問えば皮肉と答えを貰い、ゲームをしようと言え皮肉と敗北を貰い。ともすれば、ろくなものも貰っていないような気がするが、それをフィリップに願うのはお門違いも甚だしく、それを両者とも分かっているせいで、自分たちの仲は劣悪というわけでも、かといってすこぶる善い、という訳でもなくなった。

自分のことを棚に上げ、高々若輩に教わることもないと、當時は思っていた。だがそれは自分のプライドが、ただの一般市民だった者に負けたくないという聖二十八一族総督家としての理念が勝手に動き出し、よく分からない言い訳をでっち上げてでも、一つだけだとしてもフィリップから勝ち星を拾いたくて、しかしこぼれ落ちるのは全て黒。

それと、皮肉。これで自らの運命を嘆かなかったことこそ、自分が一番誇れるものだと思えながらに覚えている。

それでも、それでも。

自分が記憶している中で、思い出していく中で、ふと思う。

——表情が、少ない。

笑いにも種類があるのは、全人類の常識だ。それが愉しみから来るのか、楽しみから来るのか、はたまた悲しみから来るのか、情けから

来るのかはその時の思い次第だ。

それでも、フィリップの笑いは、大体が、いや、その殆どが、いやいや。

その全てが、嘲あざけから来ていた。

一度たりとも、それが、「楽しみ」だとか、そういったもので笑ったことは無かった。直近で代表的なものといえば、ダフネがレイル達に自己紹介をした時に。

腹を抱えるほどの大笑いであつたにもかかわらず、それは確実にダフネを嘲笑うものであり。傍から見ても分かるからこそ、それ以外での笑いが見つからない。

何時しか、ちゃんと笑えているか、と父に問われたことがあつた。あの時はちゃんと肯定したけど、その後に出会ったフィリップに見抜かれて。

その時の皮肉は、「笑えもしない貴族など、蟲に食われて当然だ」だったはずだが。では、ならば、それでは。

——誰よりも笑えていない貴方は、どこまで食笑えなくなつてべられてしまったの？

「今の今まで、さして何かに執着することもなくボケーツと過ごしてきた気分はどうだ？」

「……正直、あんまりね。世界はいとも簡単に変わる。捉え方の問題だと気付かされたわ」

「それはそうさ。何せ世界とは個々人の所有物であり、同時に人々の共有物だ。ある一方からは正義と見られ、もう一方はもうひとつの正義であるのに対岸からは悪として見られてしまう。この世界の悲しき性さがだ」

一度たりともアリシアの方を見ずに、フィリップは語る。そんな様子に、どうしても不機嫌になってしまう。

いや、と思い返す。そもそも彼はちゃんと人の顔を見ない、まともに話そうとしていた自分が愚かだったのだ。

自分が思っているよりも交遊があるはずなのに、その全てを「知人」で終わらせる辺り、彼の付き合いの悪さがうかがえる。実際、世間一般でとらえる「友人」というコミュニケーションは確かにフィリップの方が軍配が上がるし、そういった友人付き合いができない立場であることも、当然アリシアは理解している。

しかし、これがマグルの世界だったならば、その付き合いの悪さもそれで正しかっただろう。学校というものは奇妙であり、プライマリーからハイまでの学校は、そのときに得た友人とは全然付き合い合わないのだ。

家が近い幼馴染みというものもあるかもしれないが、フィリップは大体はカリフォルニアから来た娘症候群を発症するほどの距離感しか取らない。この一点を母親であるアガルタも容認しているので余計にたちが悪い。

「史実の方が過激であると差とされた演劇作家でも、ついで現実を凶れなかった。もしこの世にしっかりと現実を図ることが出来る人物がいるのなら、それはきつと皮肉屋だ」

「……あなたなら、そこでアンデルセンの名前が出てくるかと思ったけど」

「おいおい、君は本当に人を理解しないな。彼も確かに皮肉屋だったが、それはこの世に絶望した自分に対してだ。世界まで皮肉っていない。彼の言動はどこか刺さると思ったのなら、それはどこか自分におかしなところがある証拠だ」

フィリップはどこか悟ったような顔でそう言った。確かに、自分は他人を分かつとはしても、それが「解」ったかと言われれば、そうではない。

しかし、しかし、である。

本当にその人を理解しているのは、その人自身である、とは使い古された定型句であり。それこそ、自分だってレイルたちのことをあまりわかっていないくせに、と反論したかった。

しかし、それを口にする前にフィリップは杖を取り出した。いつかみせたペンタグラフを描くように、筆記体で、無駄に流れをよくして。

メルヒエン・マイネス・レーベンス

「貴方のための物語。ハンス・クリスチャン・アンデルセンの本質はそこにある。民衆向けの童話作家と思っていたか？戯けめ。そんなはずないだろう。誰しもに向けられた話であるように見えて、少し目を凝らせば今を生きている誰かへのメッセージに早変わりだ。それをわからんから彼は皮肉屋と勘違いされるんだ」

「それを理解できたら、あなたみたいになるのね」

「無論乱数はあるぞ？レイルもまた、あれを正しく理解していた。メズールやヘルミオネもな」

「……ドラコとダフネは？」

「満点回答が100なら65だな。いい線を引けてこそ、核心を突けていない」

正直、メズールがあちら側であることに何ら違和感はない。むしろダフネやドラコが自分側であることに安堵している。

一向に本題に目を向けられない状況が、少しだけ頭を冷静にさせてくれた。本題にいかない、というよりも、幼かった頃の状況に少しだけにていたからか。

実際、彼の皮肉は、あのとときも。

——あれ？

「思い出したか？」

ばつと、髪を巻き上げるほどの速度でフィリップを見た。そこには、やはり人を嘲るような笑顔を張り付けていて、「悪戯成功」とでも黒インクでベタベタに書いていそうなほどにいい笑顔をしていた。フィリップがいた。

「この会話は、既製品なのさ。過去に戻った気になっていたならお生憎。君はまるで成長していなかったわけだな」

記憶の混濁か、それともタイムリープしていた？ いや、それはない、今いる場所は、紛うことなくホグワーツだ。

脳をいつになく、いや、過去に類を見ないほどに回転させていく。知っていたはずだ、この会話を。

予想できた質問のはずだ、予想できた答えだったはずだ、予想できた未来だったはずだ。こう答えればこうなると。

——なんで、繰り返ししている？

——しかもこの会話は——

「その答えを、ここに開いていこうか？ 喜べ少女よ、これが本題だ」
バン、と。いつのまにか持っていた空白の本をきれいに音をならしながら、フィリップは、見る人によれば卑下たる笑みを浮かべていた。

「仮面をつけた父親と顔も口クに覚えていない母親、産まれてくるはずだった顔もわからない弟を失った少女は、その歳では確かに静観し

ていた。だがそれは、見方を変えれば、否^N。彼女は諦観していたのだ。無けなしの愛さえくれなかった母親が、家を残すために奮闘した父親が、産み落とされもしなかった弟がこの世から去っていった。故に彼女は愛に飢えた」

「使用人たちがくれる敬愛ではダメだ。地位を狙う賊の下賤なる欲求は論外。気楽に話せる馬鹿共の友愛もダメだ。新しく出来そうな親友の隣人愛も」

「だが少女は不意に、^{レフイア・レギス}一匹の蛇と出会った。蛇はその壮大なる寿命からすれば、残り滓のような灯火を必死に守り、いつか来たる敬愛した主の血族を心待ちにしていた。この悲願を果たしてもらおうと、ずっと、ずっとその灯火と共に抗っていた」

「遂に果たされた悲願こそ、蛇の求めたものだったのだろう。だがそれは、一つだけ誤算があった。死に際に、少女にあるものを教えてしまったのだ。敬愛でもなく、友愛でも、寵愛でも、憎愛でも、なんでもなく」

「ただ——誰かを待ち続けるという、その意志を」

「——分かるか？アリス。」

——君はようやく、「愛」を知ったのさ」

……ああ。そうか。

アリシアはようやく理解した。ぽっかり空いた穴がなんだったのか、あの虚無感、空虚な、何かの欠如とは。

初めて愛を教えてくれた蛇ヒトの、世界からのリタイアだったのだ。

「……あああ」

「そうだ、それでいい。それが正常な反応だ」

アリシアは蹲る。もう全て遅かったのだ。

マツチを売ってくれたあの少女は既に居ない。これからは、一人で生きていかなければならないのだ。

父親が、母親が、生まれてこなかった弟が居なくなつて幾年。それは、あまりにも遅すぎた認識。

フィリップはもうこちらに見向きもしない。皮肉られていた灰色の空は、ようやく歩き出せるようなその道を祝福しているようで。

誰にも剥がせないと思っていた仮面を、自分から剥がしに行く愚かさを嘆いたとしても、やっぱり空は自分を皮肉っているのだと睨み

くなってきた。だって、こんなにも素晴らしい、気持ちの良い、文句の付け所もない晴天が、今の気持ちなわけがないのだから。

「愛してくれた存在の欠落は、何時しか水天の涙となるんだ」

「うう…ああ…あああああああ!!!」

アリシアはようやく、彼らの死を受け入れた。

ブラシピミー part. 1

アリシアが泣き崩れてしまい、フィリップがそれを宥めもせずに放置していたところに、運がいいのか悪いのか、ダフネとドラコがきてしまった。ドラコは何か意味があると思つてとどまったのだが、実際同姓ということ、ある意味誰よりもアリシアに近かったダフネは加速魔法と攻撃力倍加魔法を自分にかけてフィリップに飛び込んだ。

彼の弁明むなくも、ダフネは聞く耳持たずに殴る蹴るのコンボを見せつけていた。スカートの中身が知ったことか、私はこの男を殴らなければいけない理由がある、そう心の中で息巻いて、アガルタから教わっていつつも成功しなかった固有時制御タイムアルターを使って、フィリップの土手っ腹に三発入れた。

さすがにそこで何かおかしいと気づいたのか、ダフネは一度停止。フィリップは改めて身の上の潔白を証明し、ダフネを納得させた。

まあ、そこからまたフィリップにいじられるのはまたあとの話なのだが、これはもう不毛だろう。ちなみになぜそんな元気がフィリップにあるのかだが、蹴られるコンマ三秒前に物理障壁を張っていたからだそうだ。

最近元気がなかったアリシアに活力が戻ってきたため、ホグワーツ全体も心なしか明るい雰囲気に含まれていた。アリシアもこれまで以上に勉学に励むようになっており、寮杯の得点はスリザリンとレイブンクローがデッドヒートを繰り広げる展開となっている。

グリフィンドールやハッフルパフも健闘してはいるのだが、如何せん相手が悪い。知識の宝物庫やモンスターマスター、監視者の血筋という実質三強がいるレイブンクロー、幼子の頃から教養を積んでいる貴族が多いスリザリンとでは、知識に疎いマグルが流れ込んできたり、そこまで勉学に励むことのない子供が多いグリフィンドールやハッフルパフでは太刀打ちできない。

実際はウィーズリー・ツインズやスネイプの獅子寮いびりのせいでグリフィンドールが最下位を突っ走っている訳なので、ハッフルパフは3位に落ち着くだろう。本気で寮杯を目指しているハーマイオ

ニーにはこの上なく解せないことかもしれないが。

しかし、彼らは思いもしなかった。

我らが大図書館が、モンスターマスターが、監視者の血族が、総督家現当主が、懐刀の次期当主が、麗しき血筋が、マグルの秀才が、あんなミスを犯すなどと。

他ならぬ彼らによって、ホグワーツは混沌の坩堝と化す……

……

「監視役？」

「そうです」

セブルス・スネイプは、またもや目の前の少年に頭を痛めることになる。誰であろう、レイル・クローターである。

前回は彼一人であったにもかかわらず、今回はなんとも大体一緒にいるメンバーが全員揃っているではないか。これで頭痛を、胃痛を起こすなという方が無理である。

しかも、監視役を行う場所が彼らのテリトリーともいえる自室だというのだから、明らかな地雷案件であることは確定的に明らか。これで首を突っ込める馬鹿を見てみたいものである。

レイルの後ろにはアリシアやフィリップ、その横にメズール、少し下がってダフネ、ドラコ、ジネブラ、ハーマイオニーが並んでいる。そして極大の地雷の横には当然の権利であるかのようにヘルミオネが位置している。

一瞬だけ煩わしい後輩教師に告げ口してやろうかと思ったが、それもそれで地雷が爆発するので、やはりこの地雷は自分で撤去するしかないものだ、と改めて頭を抱えなくなるスネイプであった。今この時だけは人を完全に信頼できない自分の思考回路を恨んだ。

「……で、いったい何をする気なのだね」

「ちよつとした前提実験でしょうか。声や思考で操れるセミオートパペットを作ろうと思ひまして。いざ暴れだしてしまうと生徒の私たちでは状況を抑えられるかもしれないませんが、さすがにゼロとは言えな
いでしようし、そのために不穏な動きを見せたと見えばすぐに人形を
壊してくれてかまいません。どうか、お願いします」

「……ハワード、計画の全容を知っているな？」

「ええ、一字一句余さず」

「そのうえで聞こう。何も無いな？」

「ステファニー どれだけ優秀であつても、顔見知りであつても、やはりこの男が
後輩教師の息子であることが何よりも懸念材料として残つてし
まつている。故に、レイルとともにレイブンクローの片翼を成すフイ
リップに問うた。」

ちなみにここで問われる「何も」は「禁忌を犯していないか」と「誰
かが死ぬような殺傷力はないな」というダブルミーニングである。さ
すが闇の魔術に精通するだけはある、この上なく慎重である。

そのうえでフイリップは、こう答えた。

「何も」

動く大図書館、レイブンクローの知識袋であるフイリップが、何も
と答えた。それはすなわち、普通でない方法でことを成すということ
に他ならない。

こうまでも地雷を増やしたいか、と少しだけ目の前がブラックアウ
トしそうな意識に活を入れ、何とか声を絞り出すスネイプ。

「よかろう。改めて実験の詳細と日程を送り給え。それと、監視を一
人増やさせてもらうぞ」

彼が倒れる日は、そう遠くないのかもしれない。

.....

では。計画の全容を話すとしよう。

前年度にニコラス・フラメルから頂戴した賢者の石は、永遠の命を与えるという。そのほかにも人体錬成術の最後のピースであったり、通常の錬金術の「事に応じた魔法陣を描く」という過程をすつ飛ばす、といった使い道がある。

今回の臨床実験では、何の害もない人形に魂と、半永久的寿命、さらには簡単な錬金能力を与える。この三つの過程をクリアするため、レイルは授業の合間合間に計画を練り続けていた。

魂の召喚はさして難しい話ではない。要するに人体錬成陣と似たようなものを描き、その憑依先を人形にすればいいだけの話なのだから。

簡単な錬金能力も大した問題ではない。問題は、半永久的寿命である。

これのどこが問題であるかについてだが、ずばり「半永久に落ち着けられるか」である。文字通り人間を不老不死にさせることができる賢者の石の力はとてつもなく、一つ使い道を間違えれば簡単に木っ端など消し飛んでしまうほどだ。

これをセーブしたまま力を行使するために、時間や素材はもちろん必要で。今回一番手間取ったのはむしろここである。

もしも媒体が賢者の石でなければ、未完成品である賢者の石水で代用できたのだが、本番に使うのは真正銘の賢者の石。力のセーブの仕方を学ぶと同時に、本番に起こりうるもしも[↑]を考えた場合の対処が、少しでも軽くなれば、と考えたのである。

当然のことながら、前年度に賢者の石を求めたヴォルデモートを前回取り逃がしてしまったおかげで、彼はまだこの世界のどこかに潜伏していると考えられる。その場合、彼を外的として処理するときには、こちらにも死の呪文[↓]と[↑]ときで倒されてしまうようなちやちな人形では話にならない。

そのための賢者の石による臨床実験なのだ。

最近胃痛薬や頭痛薬を飲む姿が頻繁に目撃されているスネイプは、

生徒から割とまじめに憐みの目線を浴びている。事の重大さこそ計り知れることではないが、基本的にポーカーフェイスを貫き通している彼でさえその顔を歪ませるほどの問題ごとを抱えていることは予想できていた。

何よりも、思考をその問題事に向けているせいか、近頃いつものグリフィンドールいびりもスリザリン鼻屑もない。一度マダム・ポンフリーに見せたほうがいいのではないかとハツフルパフきつての良心であるセドリツクがマクゴナガルに談判してみたのだが、「すでに見せている」の一点張りで、その処方があの胃薬頭痛薬らしい。

原因が大つぴらにされていけないだけに、原因がみんなの先生レイル・クローターであるというのも知られていない。もし知っていても、周りにいる人が強すぎて意見などごく一部の者にしかできないのだろうか。

スネイプ、君ホント休んだほうがいいよ。いやマジで。

そんな生徒たちの意向などいざ知らず、ついにスネイプの胃が崩壊しかける日がやってきてしまった。ちなみにこの日はスネイプに計画を話した一週間後である。

部屋には安全を喫するためにレイルとヘルミオネ、フィリップ。そして監視役としてスネイプとスネイプが選んだ監視役がいる。

「がんばれ、レイル」

誰あろう。ステファニーである。

決してレイルへの嫌がらせではない。この学校でそんな実験をしようものなら確実にダンブルドアは面白がってくるだろうし、マクゴナガルは反対の立場に立つだろう。

また、そのほかの教師では、もしもが起^Iこつた場合に対処できるかも怪しい。フリットウィツクももう年であるし、間違つてスプラウト

を連れてこようものなら確実にこの学校が大惨事になってしまう。故に、ここにステファニーを連れてきたのだ。決して、最近の胃痛の原因になってくれやがって、といういやみではない。

決して、ここでちよつと意趣返しをしようという気なんてさらさらない。ないっつたらないのである。

実際、バタフライエフェクトかはわからないが、彼女がいるせいで「失敗するわけにはいかない」という意欲がわきわきと盛り上がっているらしい。意欲向上になっているのはいいが、これがあらぬ方向に向かないのを祈るばかりである。

レイルは素材である竜の鮮血、スウーピング・イーヴルの毒、ユニコーンの角、流体金属、ボウトラックの寄り木を円形状に設置し、中央に素体となる賢者の石のブローチを埋め込んだ人形を置いた。特殊な白チヨークで古ノルド語の文字を書き記していき、五芒星が完成する。

スネイプは胃痛に耐えながら腕を組んで無表情でそれを眺めている。ステファニーは握りこぶしを胸の前で作りながらこちらがうつとうしくなるほどの激励の視線を送っている。

二人の態度は相對すれど、それでも実験の成功を願うのは一致していた。スネイプはこの実験が終わり次第長期休暇を取ってほしいものである。

「では、始めます」

全準備工程が終わったのか、杖を取り出して、目を閉じるレイル。左手にはヘルミオネがしれつと手をつないでいた。

「礎しろがねに銀と鋼。 其は天を廻りしエールズ。 我等が導は、碧き一星。」

風は壁を悠に越え、五方の門は開き、未知より出で、空に至るは我が想い」

言葉を紡ぐ度に、白いチヨークで描いた五芒星に青いプラズマが迸っていく。白チヨークに混ぜ混んだ素材は、もちろんこのプラズマを発生させるためではない。

「凶まがれれ。 凶まがれれ。 凶まがれれ。 凶まがれれ。 凶まがれれ。 凶まがれれ。」

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を知らしめる」

白チヨークが中に粒子となつて舞い上がっていく。プラズマはもちろん止まらない。

「^{S E T}告げる」

「――告げる。」

汝の身は我が身と共に、我が命運は汝の命運と共に。

言の葉の寄るべに揺蕩い、この想い、この理に沿えるならば、応えよ」

白チヨークに混ぜ困れている素材は、ニューレル・ユニコーンの尾毛だ。提供元はバナージとリデイである。

尾毛を混ぜることによって実験の成功確率を引き上げるだけでなく、魂の定着、並びにその制御にも役立つってくれる優れものだ。

「誓いを此処に。」

或いは世界、或いは宇宙、或いは真理、或いは全、或いは一」

だが、レイルは失念していた。どにも間違いはなかったはずなのに、フィリップの計算式も、ヘルミオネのアドバイスも間違いはなかった。

ただほんの少し、運が悪かったただけのだ。

「汝は三大の言霊へと誘う光。」

輪廻の果てより来たれ、^我汝が写し身よ――！」

瞬間。世界は灼熱に包まれた。